

小 洞 遺 跡
小 洞 西 1 号 古 墳

2008

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター

巻頭カラー 調査地遠景



調査地遠景（西から）



調査地遠景（東から）

巻頭カラー 2



小洞西 1 号古墳出土須恵器

序

関市広見字小洞は、岐阜県の中央部に位置し、武儀川と長良川に挟まれた台地と丘陵地にあたります。小洞遺跡、小洞西1号古墳が所在する広見地区の周辺には、古代ムゲツ氏の氏寺として知られる弥勒寺跡、武義郡の郡衙と考えられる弥勒寺東遺跡や、弥勒寺跡の瓦を焼いたとされる丸山古窯跡など多くの遺跡があり、古代における重要な拠点がありました。また、当遺跡の東側には小洞古墳群を始め、大小様々な古墳があり、古代以前からも歴史を刻んだ地であったと考えられます。

今回の発掘調査では、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓、古墳時代の円墳、中世の墓坑などが見つかり、当遺跡が断続的に墓域として利用されてきたことが判明しました。

この調査によって得られた資料は、地域の歴史を知るために、また、私たちの未来を考えるために、様々な示唆を与えてくれるものと思います。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、関市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人岐阜県教育文化財団

文化財保護センター

所長 田口 久之

例　言

- 1 本書は、岐阜県関市広見地内に所在する「小洞遺跡、小洞西1号古墳」（岐阜県遺跡番号21205-10465、21205-11272）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、県営ふるさと農道緊急整備事業（岐阜・関地区）に伴うもので、岐阜県岐阜農林事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財团文化財保護センターが実施した。
- 3 調査は、三重大学八賀晋名譽教授の指導のもと、発掘調査と一次整理作業は平成18年度に、二次整理作業は平成19年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第1章は鶴岡高男が、それ以外は河合洋尚が行った。また編集は河合が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量、景観撮影などの業務は、株式会社中部テクノスに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 自然科学分析（土器胎土分析）は、株式会社パレオ・ラボに委託して行い、その結果は第5章に掲載した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
赤塚次郎、伊藤聰、清山健、高木宏和、高田康成、田中弘志、長屋幸二、藤沢良祐、武内康雄、渡邊博人
愛知学院大学文学部歴史学科、岐阜大学大学院医学系研究科、関市教育委員会、
美濃市教育委員会
- 10 本文中の方位は、世界測地系の座標北を示し、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅷ系で表している。
- 11 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄2005『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、財団法人岐阜県教育文化財团文化財保護センターで保管している。

目 次

序	
例言	
目次	
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	2
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 基本層序	9
第4章 遺構と遺物	
第1節 遺構と遺物の概要	10
第2節 小洞西1号古墳	14
第3節 小洞遺跡	30
遺構全体図	68
第5章 自然科学分析	
第1節 分析の概要	78
第2節 小洞西1号古墳出土須恵器の胎土分析	80
第6章 まとめ	
第1節 小洞遺跡の土地利用の変遷	84
第2節 小洞西1号古墳の特異性	87
第3節 丸山古窯跡との関連性	90
引用・参考文献	92
写真図版	
写真図版1 調査地全景	
写真図版2 小洞西1号古墳（1）	
写真図版3 小洞西1号古墳（2）	
写真図版4 小洞遺跡の遺構（1）	
写真図版5 小洞遺跡の遺構（2）	
写真図版6 小洞遺跡の遺構（3）	
写真図版7 小洞遺跡の遺構（4）	
写真図版8 小洞遺跡の遺構（5）	
写真図版9 小洞西1号古墳の遺物（1）	
写真図版10 小洞西1号古墳の遺物（2）	
写真図版11 小洞西1号古墳の遺物（3）	
写真図版12 小洞西1号古墳の遺物（4）	
写真図版13 小洞西1号古墳の遺物（5）、小洞遺跡の遺物（1）	
写真図版14 小洞遺跡の遺物（2）	
写真図版15 小洞遺跡の遺物（3）	
写真図版16 石製品・石器・鉄製品	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 小洞遺跡位置図.....	1	第31図 小洞Ⅱ期の土坑②.....	45
第2図 試掘確認調査坑位置図.....	2	第32図 小洞Ⅱ期の遺物.....	47
第3図 グリッド設定図.....	3	第33図 小洞Ⅲ期の土坑及び遺物.....	48
第4図 周辺地形図.....	5	第34図 S Z 4・5・8・9・10.....	50
第5図 周辺道路の位置図.....	7	第35図 S Z 6・7.....	52
第6図 調査区西壁及び中央部土刷図.....	9	第36図 小洞Ⅳ期の土坑.....	54
第7図 鉄鋤の鍔身分類模式図.....	12	第37図 小洞Ⅴ期の遺物.....	56
第8図 土坑分類模式図.....	12	第38図 時期不明の土坑①.....	58
第9図 小洞西1号古墳.....	15	第39図 時期不明の土坑②.....	59
第10図 SD 1.....	16	第40図 時期不明の土坑③.....	60
第11図 SD 1出土遺物出土状況図.....	17	第41図 時期不明の土坑④.....	61
第12図 S Z 1・2.....	19	第42図 時期不明の土坑⑤.....	62
第13図 S Z 3.....	21	第43図 時期不明の土坑⑥.....	63
第14図 S K 1・2.....	22	第44図 小洞道跡全形図割付図.....	68
第15図 墳丘・S Z 1・S Z 2出土遺物.....	24	第45図 小洞道跡全形図割付図①.....	69
第16図 S Z 3出土遺物.....	25	第46図 小洞道跡全形図割付図②.....	70
第17図 S D 1出土遺物.....	27	第47図 小洞道跡全形図割付図③.....	71
第18図 S K 1出土遺物.....	27	第48図 小洞道跡全形図割付図④.....	72
第19図 S K 2出土遺物.....	29	第49図 小洞道跡全形図割付図⑤.....	73
第20図 小洞Ⅰ期の遺物.....	30	第50図 小洞道跡全形図割付図⑥.....	74
第21図 1号方形周溝墓.....	32	第51図 小洞道跡全形図割付図⑦.....	75
第22図 S I 1.....	33	第52図 小洞道跡全形図割付図⑧.....	76
第23図 SD 2・S I 1出土遺物.....	33	第53図 小洞道跡全形図割付図⑨.....	77
第24図 2号方形周溝墓.....	35	第54図 丸山南道路試掘確認調査トレンチ位置図.....	79
第25図 SD 3遺跡出土状況図.....	36	第55図 丸山南道路土分分析資料実測図.....	79
第26図 SD 3出土遺物.....	37	第56図 R b - S r 開闢図.....	82
第27図 SD 4・5.....	39	第57図 料料別元素分布図.....	83
第28図 SD 6.....	40	第58図 小洞道跡遺構変遷図.....	85
第29図 S I 2.....	43	第59図 県内の木棺直葬による主部を持つ古墳位置図.....	87
第30図 小洞Ⅱ期の土坑①.....	43		

表目次

第1表 小洞遺跡試掘確認調査結果.....	2	第14表 小洞Ⅳ期の土坑.....	55
第2表 周辺道路一覧表.....	8	第15表 時期不明の土坑.....	64
第3表 小洞遺跡の時期区分.....	10	第16表 土器綱要表①.....	65
第4表 檢出遺構数.....	10	第17表 土器綱要表②.....	66
第5表 土器類出土地點一覧表.....	11	第18表 石器・石製品一覧表.....	67
第6表 小洞西1号古墳周溝遺構.....	28	第19表 鉄鋤一覧表.....	67
第7表 1号方形周溝墓周溝遺構.....	31	第20表 刀子一覧表.....	67
第8表 2号方形周溝墓周溝遺構.....	38	第21表 分析対象資料一覧.....	80
第9表 小洞Ⅱ期の漢状遺構.....	41	第22表 定量分析結果.....	81
第10表 小洞Ⅱ期の集石遺構.....	41	第23表 中世墓の時期と出土遺物.....	86
第11表 小洞Ⅱ期の土石坑.....	46	第24表 美濃地方の木棺直葬を主部に持つ古墳.....	88
第12表 小洞Ⅲ期の土坑.....	48	第25表 TK 209期の主な古墳.....	89
第13表 小洞Ⅴ期の墓坑.....	53		

写真目次

写真 1 発掘調査の様子.....	4	写真 3 56流線文状沈縫.....	34
写真 2 現地説明会の様子.....	4	写真 4 57貝殻文.....	34

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

小洞遺跡・小洞西1号古墳は、岐阜県関市広見字小洞に所在する。当遺跡は、広見地区の南部にある標高100m程の丘陵の北斜面に位置する。

当地域で進められている県営ふるさと農道緊急整備事業（岐阜・関地区）に伴い、開発地における埋蔵文化財の確認を行うこととなった。

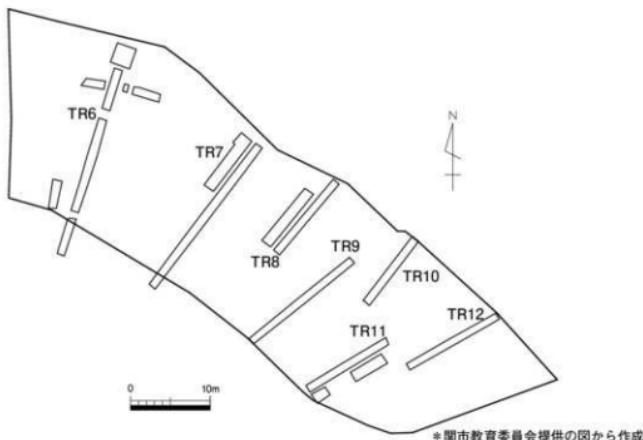
関市教育委員会の現地踏査によって、この事業範囲の丘陵裾に、地形が盛り上がる部分が確認された。そのため、関市教育委員会が平成17年11月21日から12月27日にかけて試掘確認調査を実施した。この調査によって、中世墓や集石土坑などの遺構や、古瀬戸系陶器などの遺物を確認した。そのため、小洞遺跡（遺跡記号21205-10465）として岐阜県の埋蔵文化財包蔵地に登録された。さらに遺跡の広がりを確認するため、関市教育委員会が平成18年4月17日から6月上旬にかけて試掘確認調査を実施した。この調査では、周溝や土坑と考えられる遺構や、古代の土師器、古瀬戸系陶器、五輪塔などの遺物を確認した。試掘確認調査のトレチ配置と試掘結果は、第2図及び第1表のとおりである。

これらの調査結果に基づき、平成18年度第2回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会による検討の結果、本発掘調査を1,625m²行うこととなった。調査は、平成18年度に岐阜県岐阜農林事務所から岐阜県教育委員会が委託を受け、財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した。

また、現地踏査によって確認した丘陵裾の地形が盛り上がる部分は、発掘調査中に木棺直葬の埋葬主体を持つ円墳であることが判明した。円墳は、小洞西1号古墳（遺跡番号21205-11272）として岐阜県の埋蔵文化財包蔵地に登録された。



第1図 小洞遺跡位置図 (S=1/25,000)



* 関市教育委員会提供の図から作成

第2図 試掘確認調査坑位置図 (S=1/600)

第1表 小洞遺跡試掘確認調査結果 (関市教育委員会提供)

試掘確認調査坑	調査面積	想定できる主な遺構	出土した遺物
6トレンチ	34m ²	中世墓1基・集石土坑3基	中世陶器2点
7トレンチ	40m ²	溝状遺構1条・堅穴住居1軒	土師器1点・須恵器1点
8トレンチ	24m ²	溝状遺構2条	土師器2点
9トレンチ	16m ²	階段状遺構1基	なし
10トレンチ	10m ²	なし	土師器2点
11トレンチ	23m ²	溝状遺構1条	土師器1点・須恵器1点
12トレンチ	13m ²	なし	石製品(五輪塔)1点

第2節 調査の方法と経過

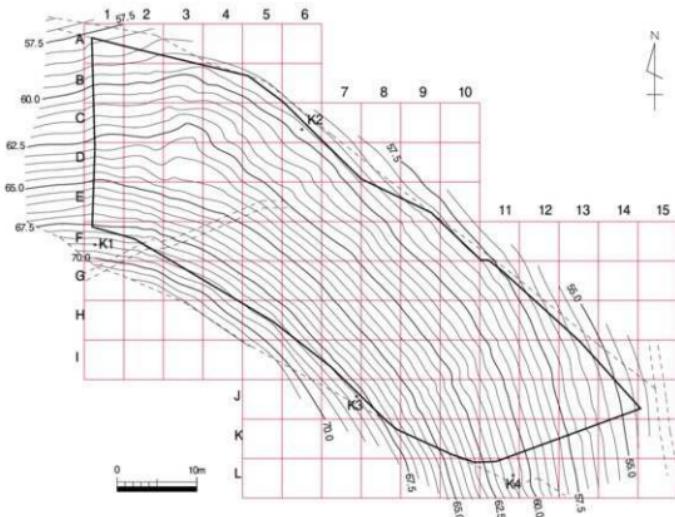
発掘調査面積は、1,625m²である。現況は山林である。

調査区画は世界測地系座標をもとに、5m×5mのグリッドを設定し、北から南へAからL、西から東へ1から15とし、調査区画の呼称は北西角の杭番号を用いた。

基本層序は、試掘確認調査結果からI層からIV層まで設定した（第3章参照）。

当遺跡は山の急な斜面上に調査面があり、また切り株が多いため、掘削作業はすべて人力で行った。遺物包含層から出土した遺物については調査区画による一括収集とし、遺構内から出土した遺物については、原則としてすべてトータルステーションで出土位置を測定して取り上げた。

遺構調査に当たっては、原則としてすべて平面図及び土層断面図を作成した。また、遺物出土状況図や、礫出土状況図などを必要に応じて作成した。発掘調査地の景観写真はラジオコントロールヘリコプターにより行った。景観撮影後、1号古墳の墳丘を解体し、旧表土上の遺構検出、遺構掘削を行った。

第3図 グリッド設定図 ($S=1/600$)

以下、作業日報から抜粋して週ごとの調査経過を記述する。

- 第1週（8/1～8/3） 人力による調査地全体の草木の切り株除去及び腐葉土の掘削。
- 第2週（8/7～8/11） 調査地内のトレンチ壁面清掃。
- 第3週（8/22～8/25） 調査地西側から人力による表土掘削及び遺構検出を開始。調査地西側壁面実測開始。
- 第4週（8/28～8/31） 表土掘削・トレンチ排土除去及び円墳の盛土や外護列石等の検出。
- 第5週（9/4～9/8） 表土掘削・トレンチ排土除去及び円墳の盛土や外護列石等の検出。
- 第6週（9/11～9/15） 表土掘削・トレンチ排土除去及び円墳、中世墓、2号方形周溝墓の検出。
- 第7週（9/19～9/22） 表土掘削・トレンチ排土除去及び調査地西部の遺構検出。中世墓等の遺構実測開始。
- 第8週（9/25～9/29） 表土掘削・トレンチ排土除去及び調査地中央部の遺構検出。
- 第9週（10/3～10/5） 表土掘削・トレンチ排土除去及び調査地東部の遺構検出。
- 第10週（10/10～10/13） 墳頂部土坑から一括して須恵器が出土。遺構掘削開始。集石遺構実測。
- 第11週（10/16～10/20） 1号方形周溝墓を検出。円墳の埋葬主体部を検出。遺構掘削。
- 第12週（10/23～10/27） 円墳の周溝掘削。土坑・溝等遺構掘削。集石・遺物出土状況実測。
- 第13週（10/30～11/2） 円墳の埋葬主体部や方形周溝墓の周溝を掘削。集石・遺物出土状況実測。

4 第1章 調査の経緯

- 第14週（11/ 6～11/10）円墳の埋葬主体部、方形周溝墓、土坑、溝等遺構掘削、及び出土状況実測。
- 第15週（11/14～11/17）円墳の埋葬主体部、方形周溝墓、土坑、溝等遺構掘削、及び出土状況実測。
- 第16週（11/20～11/25）遺構掘削及び円墳・方形周溝墓の全景写真撮影。現地説明会の準備。25日に現地説明会を実施（参加者178名）。
- 第17週（11/28～12/ 1）円墳・方形周溝墓・中世墓・土坑等完掘及び掃除。1日にラジオコントロールヘリコプターによる景観写真撮影。
- 第18週（12/ 4～12/ 7）円墳で第3の埋葬主体部を検出。鉄鏃等の金属器が出土。
- 第19週（12/11～12/15）円墳の盛土を掘削開始。14日県教育委員会社会教育文化課による完了検査。
- 第20週（12/18～12/21）遺構掘削、遺構実測、写真撮影終了。20日調査終了。21日撤収作業終了。現地を岐阜農林事務所へ引渡し。

なお、出土遺物の一次整理は、現場調査終了後、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター三田洞事務所において行った。二次整理作業及び報告書作成作業は平成19年度に三田洞事務所において行った。発掘調査から整理作業までの体制は、以下のとおりである。

理事長	高木正弘（平成18年度）
副理事長兼理事長職務代理者	伊藤克己（平成19年度）
副理事長	高橋宏之（平成18年度） 伊藤克己（平成18年度）
常務理事兼センター所長	中島正和（平成18年度） 岩田重信（平成19年度）
経営課長	田口久之（平成18・19年度）
調査部長	後藤 智（平成18年度） 川部 誠（平成18年度）
調査課長	加藤美好（平成19年度） 北村厚史（平成19年度）
担当調査員	大熊厚志（平成18年度） 谷村和男（平成19年度）
整理作業員	鵜飼高男（平成18年度） 河合洋尚（平成19年度）
	小木曾美智、橋本法子、長谷保真理子、原幸子、堀三恵



写真1 発掘調査の様子



写真2 現地説明会の様子

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

当遺跡は、長良川と武儀川の合流地点から直線距離で約2.5km上流に位置する。武儀川は、当遺跡の北北西約0.5kmにおいて南東方向から南西方向へほぼ直角に屈曲する。長良川は、当遺跡の東南東約1.5kmにおいて西方向から南西方向に緩やかに屈曲する。この屈曲する場所をつなぐ部分に幅約1kmの帯状の下位砂礫台地が広がる。この台地の東西両端には扇状地状の低地部が広がる。低地部の土壌は中粗粒灰色低地土灰色系に分類される。この土壌の土性は変化が大きく、土色は灰色又は灰褐色である。主に沖積地帯に分布し、排水が良く、保肥力が強いため高い水稲生産力をを持つ。当遺跡の立地する広見地区では条里造構が21坪確認されており（八賀・玉井1971）、少なくとも古代から水田として土地利用されていたことが分かる。この台地の北部の最も高い場所に、集落が東西方向に広がる。

東山道方県駅（岐阜市合渡又は長良辺り）と飛驒支路武義駅（関市下有知、美濃市中有知・上有知辺り）を結ぶ交通路ははっきりしていない（水野1971）が、武義駅を起点とする交通路としてこの台地が利用されていた可能性は高い。武義駅推定地と弥勒寺跡は長良川を挟んで対岸にあり、その延長線上のこの台地は、武儀川沿いに北上する交通路として重要な役割を担っていたと考えられる。

この台地を挟むようにして、南北に約160～180mの高さの丘陵地帯が広がる。丘陵は砂岩、泥岩、チャート等を母岩とし、石礫は角礫が多い。当遺跡は台地南部に点在する丘陵の北斜面に位置し、北には、台地に向かって張り出す尾根状の小丘陵がある。



第4図 周辺地形図 (S=1/2,000)

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には、いくつかの遺跡が確認されている。以下、当遺跡周辺の遺跡で、発掘調査等により詳細が明らかになっている遺跡を時代順に概観する。なお、文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、第5図及び第2表と一致する。

旧石器時代の遺跡は、松原遺跡(20)、巾遺跡(31)、渡来川北遺跡(78)がある。長良川対岸の松原遺跡では、ナイフ形石器2点、細石核2点が表面採集されている。平成4年度の閔市教育委員会による調査では、チャート製のナイフ形石器が出土している。

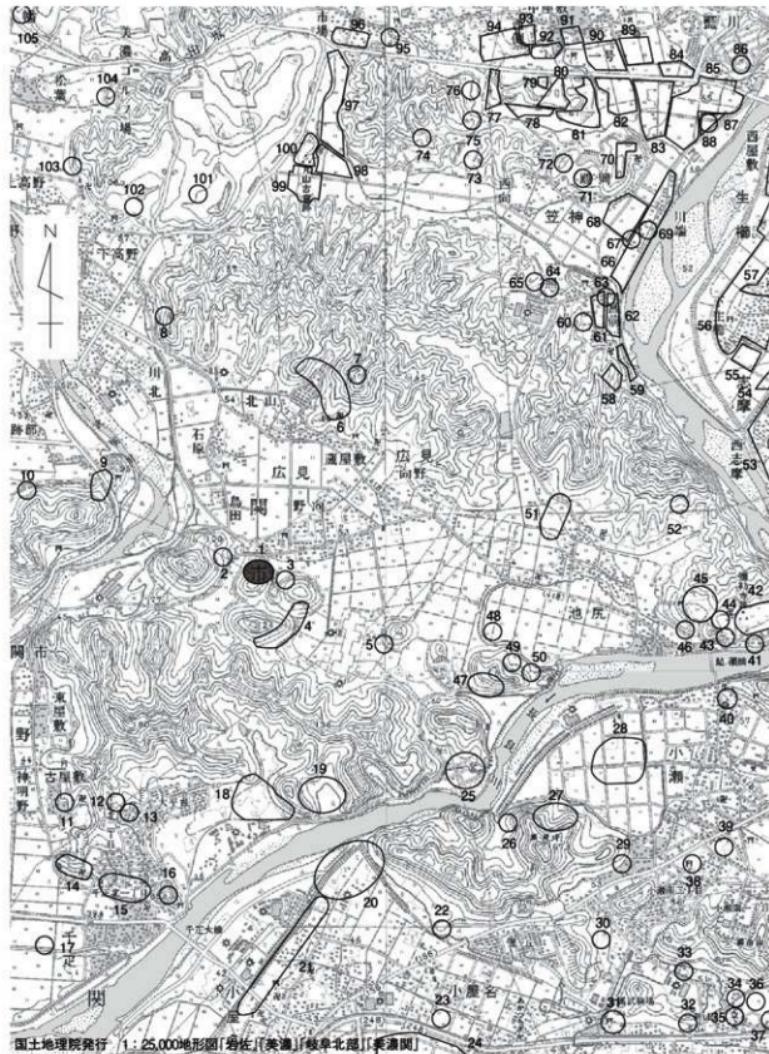
縄文時代の遺跡は、塚原遺跡(18)、岩利ヶ洞遺跡(19)、古村遺跡(66)、丸山南遺跡(99)、高野遺跡(102)などがある。当遺跡の約1.2km南東に位置する塚原遺跡では、早期の屋外炉や焼化礫群、押型土器などを確認している。また、中期の堅穴住居群や掘立柱建物群からなる集落を確認している。

弥生時代の遺跡は、塚原遺跡(18)、巾遺跡(31)、一ノ門遺跡(33)、森坪遺跡(61)、古村遺跡(66)、井守山遺跡(77)、高野遺跡(102)などがある。古村遺跡では、当遺跡とは同時期の弥生時代後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓18基、堅穴住居跡11軒などを確認している。

古墳時代の遺跡は、その多くが古墳そのもので、集落遺跡は少ない。当遺跡の東西に位置する前山古墳(2)や大山古墳(3)、当遺跡から約300m南東に位置する小洞古墳群(4)など、周辺丘陵部に多くの古墳が確認できる。塚原古墳群(18)は古墳時代後期の群集墳で、総数37基を数える。古墳時代終末期における主墳の周囲に小規模な古墳を配置するという様相を提示する貴重な資料といえる。当遺跡から約1.8km南西の陽徳寺裏山古墳群(15)は古墳時代前期から後期の古墳群で、総数14基を数える。5号墳の主体部は木棺直葬櫛2基である。東・西櫛とともに墓坑基盤上に赤色顔料の堆積が認められた。西櫛の赤色顔料中から刀子や鋏先などの鉄製品や、勾玉、管玉などの石製品が出土している。1号墳は6世紀初頭の築造時期で、7世紀初頭まで追葬が行われた両袖の横穴式石室である。また、6世紀代の角環が出土しており、北陸地方とのつながりが想定できる。

古代の遺跡は、弥勒寺跡(44)を中心とする武儀郡衙と推定される弥勒寺東遺跡(42)、弥勒寺西遺跡(45)がある。弥勒寺跡では、講堂、塔、金堂の礎石や掘立柱建物跡、掘立柱塀等の遺構を確認し、川原寺系の軒丸瓦、軒平瓦、平瓦などの遺物が出土している。出土した須恵器から、7世紀後半から末にかけて創建されたと考えられている。弥勒寺東遺跡では、掘立柱建物跡や区画溝、鍛冶遺構などを確認している。建物跡は倉庫建築群(正倉院)や郡衙の中心施設(郡庁院)と考えられている。弥勒寺西遺跡では、8世紀後半から9世紀の祭祀跡を確認している。さらに、弥勒寺の経営を司っていたと考えられる役所跡や僧坊跡、鍛冶工房跡、工人たちの住居跡、厨房跡などを確認している。当遺跡から約2.2km北に丸山古窯群(100)がある。6世紀後半から須恵器窯として機能をはじめ、古代においては弥勒寺の瓦を併焼したとされる。美濃地方の須恵器窯としては古い段階に位置づけられている。

中世の遺跡は、広見城跡(7)、和田山遺跡(49)、西屋敷遺跡(51)、上西田遺跡(54)、改田遺跡(85)、丸山北遺跡(97)、丸山南遺跡(99)などがある。当遺跡から約1.5km東の西屋敷遺跡では、鎌倉時代後期から近代までの水田区画や畦畔を確認している。改田遺跡では、12世紀前半の大型掘立柱建物跡を確認している。



第5図 周辺遺跡位置図 (S=1/25,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	小洞西1号古墳・小洞遺跡	弥生・古墳・中世	54	上西田遺跡	中世
2	前山古墳	古墳	55	銅屋遺跡	古墳・中世・近世
3	大山古墳	古墳	56	生櫛遺物散布地	古墳・古代・中世・近世
4	小洞古墳群	古墳	57	大門脇遺跡	中世・近世
5	西中畠古墳	古墳	58	三井寺跡	中世
6	浦山古墳群	古墳	59	正林寺前遺跡	古代・中世・近世
7	広見城跡	中世	60	鍛冶屋洞古墳	古墳
8	火打山古墳	古墳	61	森坪遺跡	弥生・古代・中世・近世
9	末田山古墳群	古墳	62	弦賀遺跡	縄文・古代・中世・近世
10	段ノ尾古墳群	古墳	63	宮前古墳	古墳
11	源賴政首塚	中世	64	神田洞遺跡	古墳・中世
12	松洞古墳	古墳	65	神田洞古墳	古墳
13	松洞火葬墓	古代	66	古村遺跡	縄文・近世
14	人ヶ洞古墳群	古墳	67	古村古墳	古墳
15	陽徳寺裏山古墳群	古墳	68	石橋遺跡	古墳・中世
16	千疋城跡	中世	69	黄金塚古墳	古墳
17	野畔遺跡	縄文・古代	70	山後遺跡	古墳
18	塚原遺跡・塚原古墳群	縄文・弥生・古墳	71	殿岡古墳群	古墳
19	岩利ヶ洞遺跡・古墳群	縄文・古墳	72	西向遺跡	中世
20	松原遺跡	旧石器・縄文・古墳	73	松毛窓跡	古代
21	新屋敷遺跡	古墳・古代	74	大洞窓跡	古代
22	高井坪古墳	古墳	75	桜洞窓跡群	古墳・古代
23	小屋名神明前遺跡	古墳・奈良・中世	76	椎藏窓跡	近世
24	薄原遺跡	縄文・古代	77	井守山遺跡	縄文～中世
25	大原古墳群	古墳	78	渡来川北遺跡	旧石器・縄文・古墳
26	小屋名遺跡	縄文	79	南出遺跡	古代・中世
27	片山古墳群	古墳	80	葛盤洞遺跡	縄文・古墳・古代・中世
28	庄内遺跡	古代・中世	81	南山遺跡	縄文・古墳・中世
29	八王子古墳	古墳	82	穂口遺跡	縄文・古墳・古代・中世
30	高山寺遺跡	縄文	83	玄入遺跡	古墳・古代・中世・近世
31	巾遺跡	旧石器・縄文・弥生	84	茶屋下遺跡	古代
32	狐洞塚古墳	古墳	85	改田遺跡	古墳・古代・中世
33	一ノ門遺跡	縄文・弥生	86	藍川古墳	古墳
34	上人塚	古代	87	岡ノ下遺跡	古墳
35	幕屋塚	古代	88	道光寺塚古墳	古墳
36	大塚東塚遺跡	古代	89	一本杉遺跡	縄文・古代・中世・近世
37	十三塚古墳群	古墳	90	垣内遺跡	古代
38	御前塚古墳	古墳	91	中屋敷遺跡	中世
39	長野遺跡	中世	92	西側遺跡	古代・中世・近世
40	松尾山古墳	古墳	93	西出遺跡	中世・近世
41	内空入定塚	近世	94	大屋敷遺跡	中世・近世
42	弥勒寺東遺跡	古代・中世	95	亀藏庵窓跡	近世
43	弥勒寺古墳	古墳	96	市場西屋敷遺跡	古墳・中世・近世
44	弥勒寺跡	古代	97	丸山北遺跡	古墳・古代・中世・近世
45	弥勒寺西遺跡	縄文・古代・中世・近世	98	立長遺跡	古墳・中世・近世
46	池尻大塚古墳	古墳	99	丸山南遺跡	縄文・古墳・中世・近世
47	赤根古墳群	古墳	100	丸山古窓跡群	古墳・古代
48	反松大塚古墳	古墳	101	高野古墳	古墳
49	和田山遺跡	中世	102	高野遺跡	縄文・弥生
50	向畠古墳	古墳	103	江尻古墳群	古墳
51	西屋敷遺跡	中世	104	獣食古墳	古墳
52	南宮前古墳	古墳	105	岡之上古墳	古墳
53	西志摩遺物散布地	古代・中世・近世			

第3章 基本層序

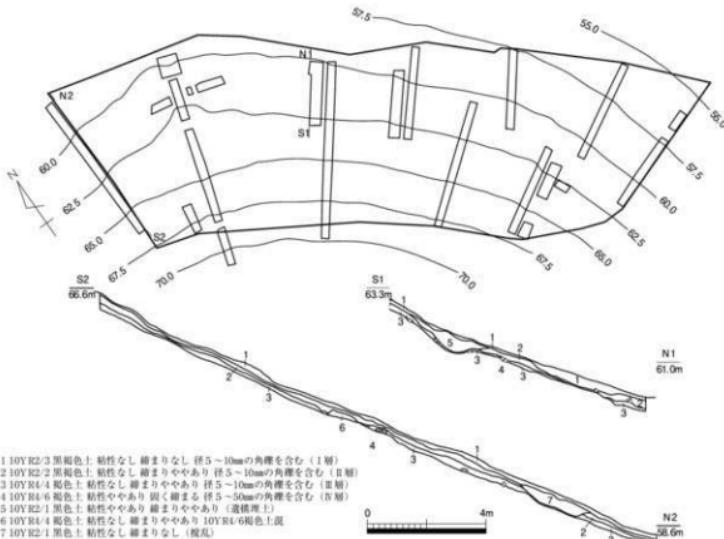
当遺跡の表土の上層に、層厚10cm～20cm程度の腐葉土が確認できる。近現代の擾乱は少なく、層序は安定している。傾斜の大きさから層厚にかなりの差異がある。以下I層から順に述べる。

I 層 黒褐色土 (10YR2/3)。層厚10cm~50cm。やや砂質で径10mm~30mmの角礫を含む。表土層と認識した層で、調査区内全域で確認できた。調査区中央東側の斜面上方部では、層厚が50cmある。

II 層 黒褐色土 (10YR2/2)。層厚10cm~40cm。旧表土と認識した層で、原則としてこの上面が遺構検出面となる。やや暗色の黒褐色土で、やや縮まりがあり、やや粘性がある。I 層よりは小粒な径5mm~20mm程度の角礫を含む。調査地西部から中央部の斜面上部では堆積が認められない場所がある。

Ⅲ層 褐色土(10YR4/4)。層厚10cm～20cm。Ⅳ層の堆積土壤を含み、Ⅳ層(基盤層)が土壤化したものと考えられる。やや縮まり、やや粘性がある。径5mm～20mm程度の角礫を含む。調査地西部から中央部の斜面上部では、I層直下で確認しており、そこではⅢ層上面が遺構検出面となる。

IV層 褐色土(10YR4/6)。固く縮まり、やや粘性がある。径10mm～50mm程度の角礫を多く含む。
基盤層と認識した層で、この層以下では遺構、遺物ともに確認できなかった。



第6図 調査区西壁及び中央部土層図 (S= 1/160)

第4章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物の概要

当遺跡で確認した遺構や遺物の時期は4時期に及ぶ。これを小洞Ⅰ期からⅣ期と設定した(第3表)。

第3表 小洞遺跡の時期区分(○:有り、×:無し)

設定時期	小洞Ⅰ期	小洞Ⅱ期	小洞Ⅲ期	小洞Ⅳ期
時代	縄文	弥生末～古墳初頭	古墳後期	中世
遺構	×	○	○	○
遺物	○	○	○	○

1 遺構の概要

当遺跡の調査で、円墳、方形周溝墓、溝状遺構、墓坑、集石遺構、土坑を確認した。検出した遺構数は、第4表のとおりである。

第4表 検出遺構数

遺跡名	遺構	遺構略号	遺構数
小洞西1号古墳	埋葬主体部	S Z	3
	周溝	S D	1
	土坑	S K	2
小洞遺跡	方形周溝墓周溝	S D	2
	中世墓	S Z	7
	溝状遺構	S D	3
	集石遺構	S I	2
	土坑	S K	51
合計遺構数			71

①小洞西1号古墳

調査地西部で確認した円墳である。小洞西1号古墳に関連する遺構として、埋葬主体部(S Z)3基、周溝(S D)1条、土坑(S K)2基がある。土坑は墳頂部で確認しており、埋葬儀礼に使用した土器を埋納した遺構と考えられる。

②小洞遺跡

方形周溝墓2基、方形周溝墓の周溝(S D)2条、中世墓(S Z)7基、溝状遺構(S D)3条、集石遺構(S I)2基、土坑(S K)51基がある。方形周溝墓の墳丘はどちらも流失しており、確認できなかった。土坑は、遺物が出土したものについてはその遺物により時期を決定したが、多くのものは時期不明である。

2 遺物の概要

土器類が1,149点、石器・石製品類が5点、金属器類が45点出土した。

(1) 土器類

土器は、出土点数、個体数¹⁾を第5表にまとめた。なお、出土点数は、接合前の破片数である。

第5表 土器類出土量

	弥生土器 土師器	須恵器	中世陶器	山茶碗	合計
出土点数（点）	859	220	34	36	1149
口縁部残存率（x/12）	87.0	314.6	5.8	23.0	430.4

①土師器

859点出土した²⁾。廻間I式～II式頃のものが占める。編年は赤塚次郎氏の研究成果（赤塚1990, 1994）を参考にした。中世土師器皿については井川祥子氏の研究成果（井川1997）を参考にした。

器種の細分類については、出土点数が少ないため行っていない。甕、壺（パレス壺、長頸壺、広口壺）、高坏、鉢、皿（中世）がある。

②須恵器

220点出土した³⁾。編年は渡邊博人氏の研究成果（渡邊1996）を参考にした。

＜坏蓋＞3点出土した。すべて蓋につまみを持たないものである。

＜坏身＞1点出土した。受部を持つものである。

＜高坏＞無蓋長脚高坏をA類、有蓋短脚高坏をB類とした。高坏B類の中で脚柱部に透かしを持つものをB1類、持たないものをB2類に細分した。

＜高坏蓋＞67点出土した。高坏B類に伴うものである。

＜壺＞出土点数が少ないため一括した。脚付長頸壺、小型壺がある。

③中世陶器

34点出土した⁴⁾。すべて壺である。

④山茶碗

36点出土した⁵⁾。すべて碗である。

(2) 石器・石製品類

5点出土した。点数が少ないと種別分類のみした⁶⁾。

①石鏃

鋭利な先端部と柄に装着するための基部を作り出した小型の石器で、1点出土した。

②打製石斧

略長方形の形態で、ほぼ全周を二次加工し、長軸の一端に刃部を持つ石器で、1点出土した。

③五輪塔

五輪塔は上から空輪、風輪、火輪、水輪、地輪で構成される。当遺跡で出土したものは火輪1点で、他は確認できなかった。

④剥片類

剥離作業によって生じた剥片や碎片などをまとめて剥片類とした。二次加工や微細な剥離痕が確認できなかったもので、2点出土した。石材は2点ともチャートである。

(3) 金属器類

45点出土した⁷⁾。すべて鉄製品で、1号古墳埋葬主体部からの出土である。

①鉄鎌

鉄製の鎌で、41点出土した。接合の結果18個体となった。鎌身部と頭部の長さがほぼ同じか短いものを短頭鎌、鎌身部より頭部が長いものを長頭鎌とした。さらに、鎌身部の形状をA、B、Cに分類した（第7図）。

②刀子

ナイフ・小刀の形状を持つもので、4点出土した。出土点数が少ないため、一括した。

(4) その他の遺物

炭化物、骨片⁷⁾が出土した。ほとんどが中世墓と判断した遺構からの出土である。

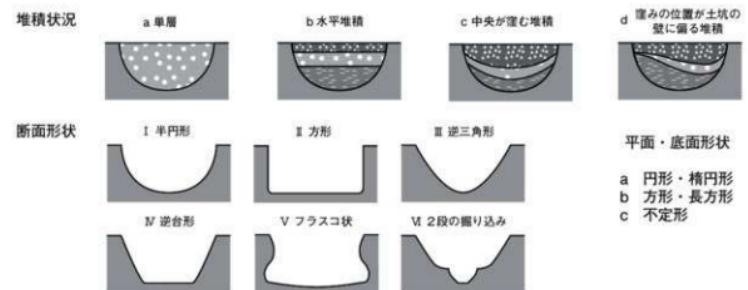
注

- 1) 個体数の計測方法は、口縁部計測法（宇野1992）を用いた。
- 2) 土師器に関しては、赤塚次郎氏の指導を得た。
- 3) 須恵器に関しては、渡邊博人氏の指導を得た。
- 4) 中世陶器、山茶碗に関しては、藤澤良祐氏の指導を得た。
- 5) 石器に関しては、長屋幸二氏の指導を得た。
- 6) 金属器に関しては、高田康成氏の指導を得た。
- 7) 骨片に関しては、武内康雄氏の指導を得た。

3 遺構一覧表、土器観察表、石器一覧表、金属器一覧表、遺構実測図、遺物実測図について

(1) 遺構一覧表

- グリッドは、遺構を検出したグリッドで、複数のグリッドにまたがる場合は「～」で結んだ。
- 検出層位は基本層序と検出面で表し、Ⅱ層上面で検出した遺構の場合「Ⅱ層上面」と表記した。
- 堆積形状は、a：単層、b：水平堆積、c：中央が窪む堆積、d：窪みの位置が遺構の壁に偏る堆積



第8図 土坑分類模式図

とした（第8図）。

○断面の形状は、「I」～「VI」の6種類に分類した（第8図）。

○遺構の平面形状・底面形状は、掘形の上端・下端における形状とした。「円形」・「楕円形」を「a」、「方形」・「長方形」を「b」、あてはまらない場合は「不定形」とし「c」とした。

○遺構の大きさの単位は「m」であるが、（ ）で示したものは、全形が確認できなかったため、残存長を計測した。

○出土遺物は、以下の略号によって表示した。

H - 土師器 P - 須恵器 T - 中世陶器 Y - 山茶碗 S - 石器 I - 金属器

C - 炭化物 B - 骨片

(2) 土器観察表・石器一覧表・金属器一覧表

○「掲載No」は、本文中の掲載番号である。

○「地区・遺構」は、遺物が出土した調査区画若しくは遺構で、複数の地区や遺構から出土した遺物が接合した場合には、すべての地区や遺構を記入した。

○「層位」は、遺物包含層出土の場合は基本層序番号（I・II・IIIなど）を、遺構出土の場合は上層と下層に分け、それぞれ「1」「2」と記入した。

○土器の観察表にある、「口径」・「器高」・「底径」・「最大径」の単位は「cm」である。

○「口縁部残存率」は、口縁部残存率（X/12）を計測（宇野1992）したもので、1/12以下については1/12に切り上げた。

○「胎土」に記載した含有物は、肉眼で識別した。

○「石材」の鑑定は、肉眼で識別した。

○「長さ」・「幅」・「厚さ」の単位は「cm」である。また、「質量」の単位は「g」である。欠損している場合は、（ ）内に残存値を記入した。

(3) 遺構実測図

○遺構掘形など、図化できなかつたものについては想定線を破線で表示した。

○土層断面図中の斜線は、原則として疊を表す。

(4) 遺物実測図

○弥生土器、土師器の調整の重なる部分に関しては、原則として最も新しい調整を図化した。

○沈線が多く、図化に当たって潰れが懸念される場合は、沈線上端2本のうち下部を省いた。

○須恵器で、ナデとケズリの調整が重なる場合は、重なる部分を実線で表した。

○石器の自然面はドットで表した。

○石器の摩耗痕や線状痕の有無は、ルーペ（×10）により行った。

第2節 小洞西1号古墳

1 概要

1号古墳は、調査区北西部に位置する。岡市教育委員会による試掘確認調査では、藏骨器や五輪塔を伴う中世墓群や中世陶器の出土を確認したことから、中世の墳墓と想定していた。調査中に、墳頂部の土坑から須恵器が一括出土し、木棺直葬と考えられる埋葬主体部を検出したことから、円墳であることが判明した。遺物は墳丘、墳頂部の土坑、埋葬主体部、周溝から出土している。

2 墳丘（第9図）

墳形は円形である。斜面下方に半円状に並ぶ外護列石を、斜面上方に半円状の周溝を確認した。外護列石から想定できる墳丘の規模は直径約9.5mである。

墳丘の元来の高さについては土砂の流失により不明である。第6南北トレンチの壁面観察から、現存する墳頂部は、旧表土（Ⅱ層）上面から約0.9mの高さになる。

南北土層図（N-S）から構築順は、①基盤の盛土（26層→25層→24層→23層→22層→21層）②斜面下方の旧表土（Ⅱ層）上に周堤状の盛土を構築（20層→19層）③盛土を繰り返して墳丘の完成（18層→10層→17層→27層→13層→7層、16層）と考えられる。周堤状の盛土は、東西土層図（E-W）では確認できることから、最大でも墳丘の3分の1程度までに留まると考えられる。また、この盛土は土層の継まり具合から、崩落を防ぐために固められていたと考えられる。墳丘構築土中に含まれる礫はすべて角礫で、墳丘の構築の際に採取したⅢ層及びⅣ層に含まれていたものと考えられる。墳丘構築土は外護列石まで認められる¹⁾。

3 外表施設

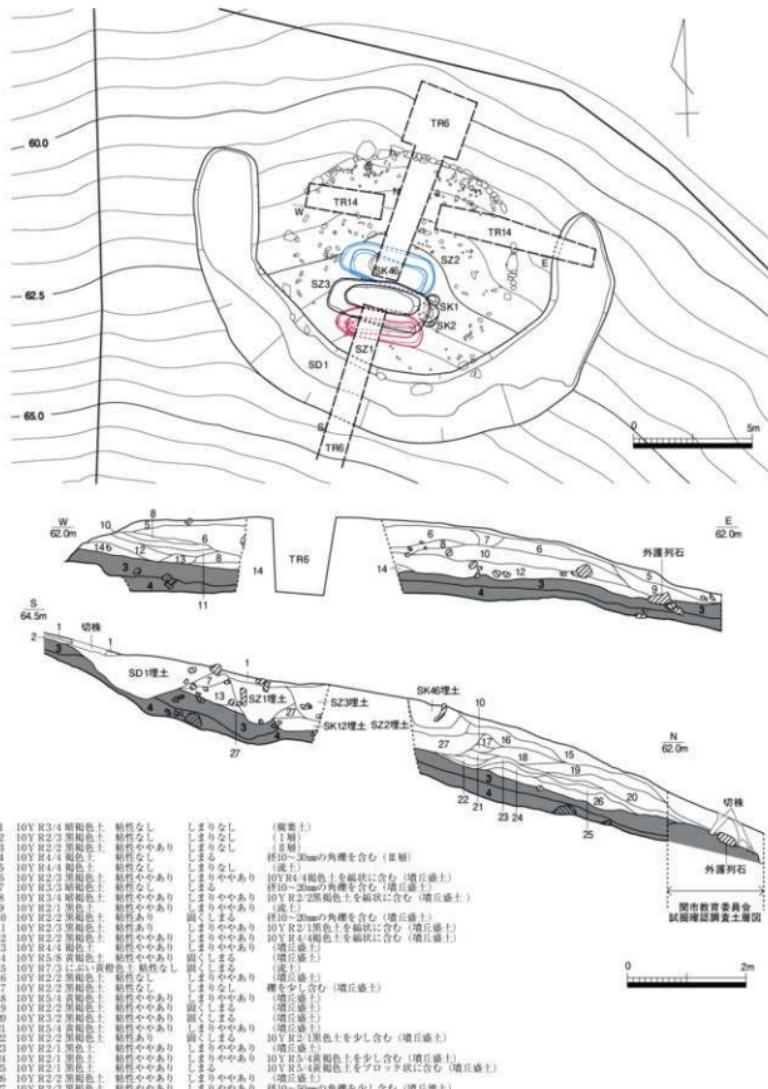
（1）周溝（SD1）（第9、10、11図）

周溝は、墳丘の山側西-南-東部にかけての斜面上部で確認した。斜面下方に向かうにつれ、徐々に浅くなり収束する。周溝の幅は一番広いところ（B-B'）で約3.2mで、全体では幅約2~3m、最も深いところで約0.7mである。旧表土から基盤層（Ⅱ～Ⅳ層）を掘削し、墳丘を盛り上げる。埋土は、まず斜面上方と墳丘から土砂が流れ込み、その後窪んだ部分に土砂がほぼ水平に堆積している。

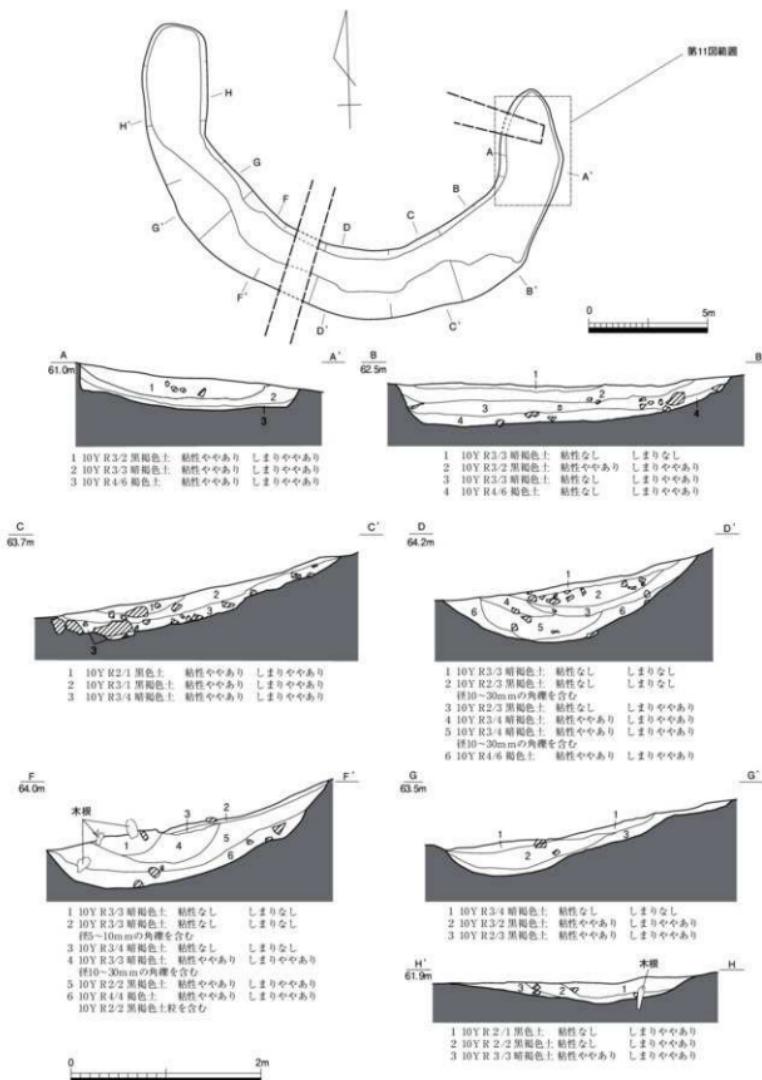
周溝出土遺物は、墳丘からの流土中に多く含まれる。遺物は周溝が収束する東側下方で多く出土した。須恵器の高杯、高杯蓋や土器器が出土した。どれも細片だが、完形に復元できるものが多い。この周溝から出土した須恵器は、墳頂に位置するSK1及びSK2出土遺物と比較するとやや時期がさかのぼり、6世紀後半の須恵器で占める。全体的に作りが粗雑である。有蓋短脚高杯の脚部に透孔が認められるが、杯部は小さくなりつつあることから、6世紀後半の技法の過渡期に製作されたもの可能性が考えられる。これらのことから、初葬のSZ1の埋葬儀礼に使用されたものの可能性が考えられる。

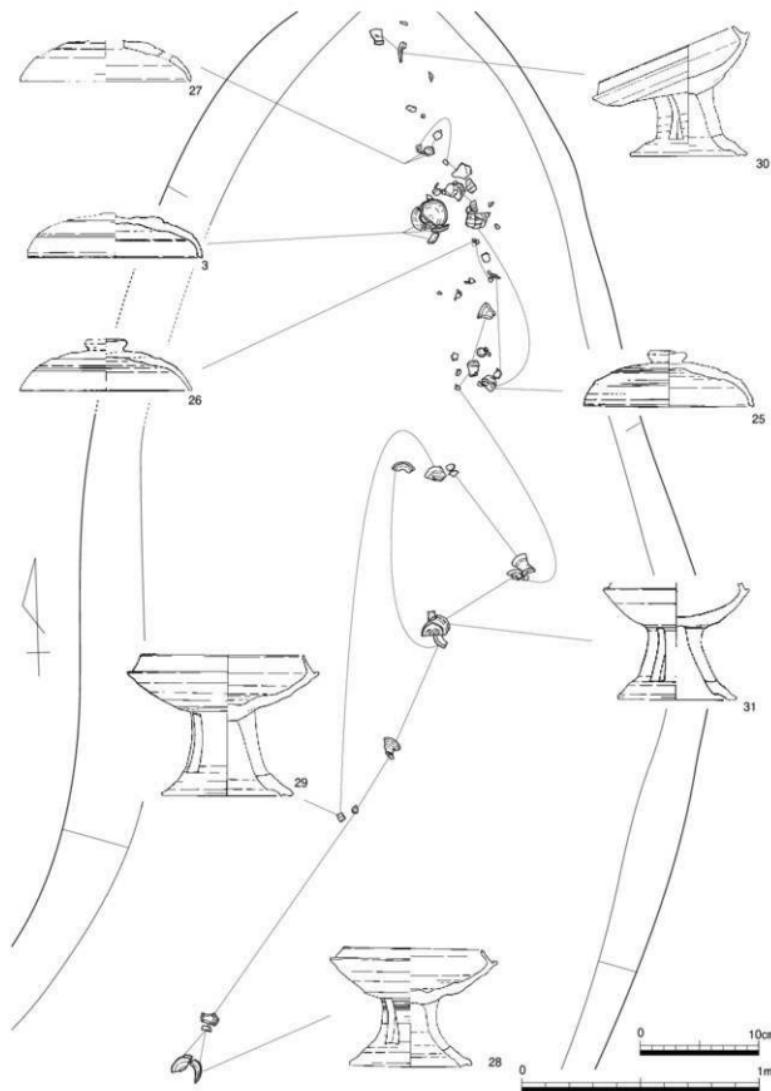
（2）外護列石（第9図）

墳丘の末端部、東-北-西部にかけてのはば半周部分で外護列石を確認した。東-南-西には、角礫は点在するものの、列石と判断できる大きさの礫や礫の配置は確認できなかった。使用された石材は拳大のものから長辺が1m程のものもあるが、平均して0.5m~0.8mのものが多い。石材は、墳丘



第9図 小洞西1号古墳 (S=1/200,1/80)





第11図 SD 1遺物出土状況図 (S=1/20, 1/4)

裾部の円周方向に長辺をそろえて並べられているが、積み上げられた形跡は認められなかった。墳丘の末端部分でのみ確認できることから、墳丘が流失するのを防ぐ目的で構築されたと考えられる。また、盛土が崩落するのを防ぐように石材と石材の隙間がないように密に敷き詰められていた。使用された石材はどれも角礫で、周囲から集められたものと思われる。また、この列石は土層岡北端から旧表土（Ⅱ層）上に並べられ、外護列石上には墳丘流水が堆積することから、墳丘構築時には墳丘外面に露出していたと考えられる。

4 埋葬主体部

埋葬主体部を3基確認した²⁾。3基ともに木棺直葬である。斜面に対してほぼ直交して構築される。現地の発掘調査で、S Z 1はS Z 3に、S Z 2はS Z 3に切られると判断した。S Z 1とS Z 2は切り合わないが、整理作業の段階で、S Z 2の掘形から出土した平底甕（1）の破片が墳丘部でまとまって出土したものと接合したことから、S Z 2構築以前に埋葬主体部が存在していたと考えられ、S Z 1の構築時期がさかのばると判断した。これらの切り合い関係及び遺物出土状況から、主体部の構築順はS Z 1→S Z 2→S Z 3と考えられる。墳丘中央部からやや南に寄るが、斜度や周溝、外護列石の位置から推測すると、墳丘の最も高い位置に初葬のS Z 1を構築し、その後、S Z 1の北にS Z 2を構築したと考えられる。これは、S Z 1の南には周溝が迫るため、北にしか構築できなかつたためと考えられる。その後、S Z 1とS Z 2の間に切り合うようにしてS Z 3を構築したと考えられる。

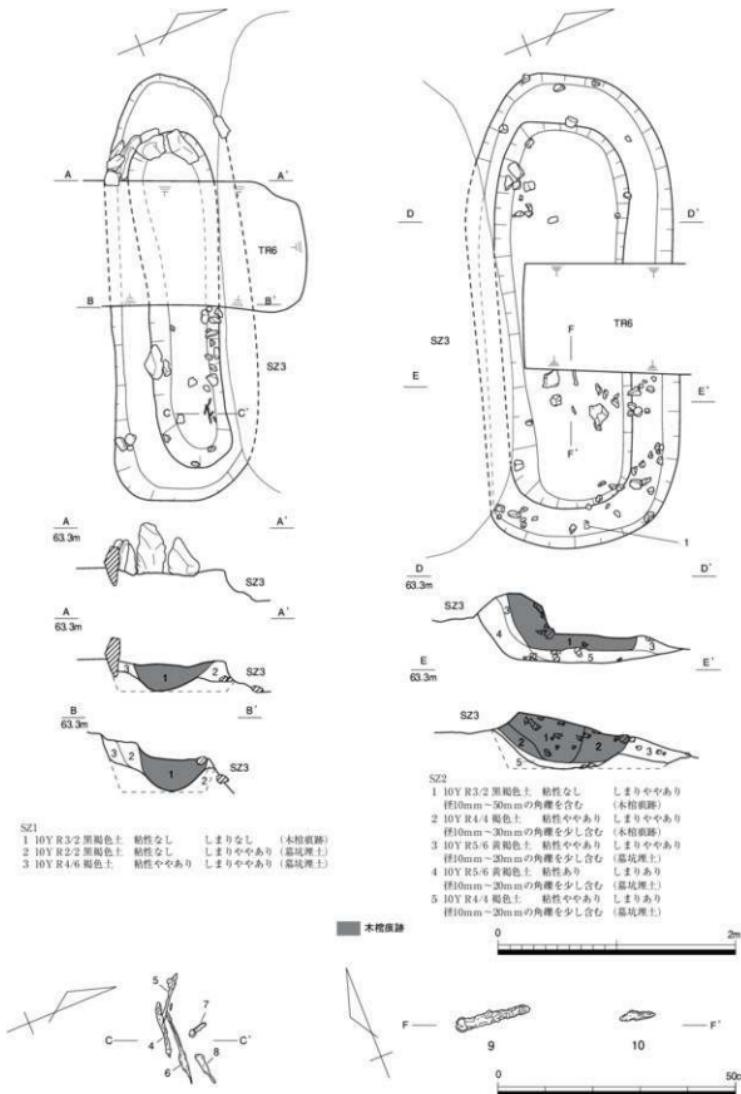
（1）S Z 1（第12図）

1号古墳の中で、最初に構築されたと考えられる主体部である。S Z 3に切られる。掘形の平面形は隅丸長方形だが、他の主体部と比較すると西部がかなり丸く、辺をなさない。掘形の大きさは、残存長で長軸3.6m、短軸1.12m、深さ0.3mを測る。木棺痕跡の大きさは、残存長で長軸2.84m、短軸0.71m、深さ0.28mを測る。主軸方位はN-79°-Wである。木棺痕跡は長楕円形で、他の主体部とは平面形が異なる。木棺痕跡の長軸の西端に、大小8個の角礫を立てて配置する。被葬者の頭部に置いたものと考えられる。この墓坑底面は、丸木を半分に割ったような船底形の形状をしており、さらに周囲に固く締まった粘土状の埋土があることから、粘土塊によって割竹形木棺を安定させたと考えられる。

遺物は、木棺痕跡の東部から鉄鎌5個体（4～8）が出土した。鉄鎌は掲載番号8以外は鎌身部を東に向けており、茎部を西に向かうように副葬されたと考えられる。なお、出土した鉄鎌はすべて長頸鎌に分類できる。また、S Z 2の掘形埋土中に平底甕（1）の破片が混入していたことから、この平底甕はS Z 1の埋葬儀礼に関わる遺物と考えられる。破片の多くがS Z 2北部の墳丘盛土から出土しているため、主体部北部分で埋葬儀礼を行っていた可能性が考えられる。

（2）S Z 2（第12図）

1号古墳の中で、2番目に構築されたと考えられる主体部である。S Z 3に切られる。掘形の平面形は隅丸長方形で、掘形の大きさは、残存長で長軸4.01m、短軸1.62m、深さ0.56mを測る。木棺痕跡の大きさは、残存長で長軸3.26m、短軸1.12m、深さ0.46mを測る。主軸方位はN-73°-Wである。木棺痕跡の底面は西に平らで東に向かうに従って丸くなる。墓坑の底部が平らなことから、掘形を掘削し、平らにならした後に木棺を埋めたと考えられる。4、5層は固く締まった粘質土が確認でき、平面的にも、木棺痕跡の東部から北東部にかけて広がる粘質土を確認したことから、墓坑掘削後、底面を平らに整地していたと考えられる。また、北東角で確認した縱置きの角礫は、木棺の裏込めに使



第12図 S Z 1・2 (S=1/40, 1/10)

用されたものと考えられる。

遺物は、木棺痕跡中央部やや東寄りで、刀子2点（9、10）が出土した。S Z 1のように、頭部を西にして埋葬していたのであれば、ちょうど腰の位置に当たる場所である。また、墓坑埋土（5層）から平底甕（1）の破片が出土した。この平底甕はほぼ完形に復元でき、この破片以外はS Z 2の北の墳丘上層部から多く出土していることから、S Z 1の埋葬儀礼に使用され、その後S Z 2構築の際に墓坑埋土に破片が混入した可能性が高いと考えられる。

（3）S Z 3（第13図）

1号古墳の中で、最も新しく構築されたと考えられる主体部である。S Z 1、S Z 2を切る。掘形の平面形は隅丸長方形だが、やや西部が丸い。掘形の大きさは、残存長で長軸4.14m、短軸1.97m、深さ0.41mを測る。木棺痕跡の大きさは、残存長で長軸3.04m、短軸1.55m、深さ0.34mを測る。主軸方位はN-79°-Wである。底部は平らで、木棺痕跡の北部と東南部で粘質土を確認したことから、墓坑掘削後、底面を平らに整地していたと考えられる。

遺物は、木棺痕跡中央部から刀子（12）1点、西部から鉄鎌（22）1点が出土した。これらは、木棺の中に入れてあったか、木棺の上に置かれていたものと考えられる。また、墓坑掘形から刀子1点（13）、鉄鎌9点（18、24、19、15、14、16、20、17、21）がまとまって出土した。鉄鎌はすべて鎌身部を東に向けており、茎部が西へ向かうように副葬されたと考えられる。なお、出土した鉄鎌はすべて短頭鎌に分類できる。

また、墓坑掘形から骨片が5点出土した。管状骨の細片のため部位は判別できないが、人骨である可能性が高いと考えられる。

5 土器埋納遺構

墳頂部で、須恵器が一括出土した土坑を確認した。S K 1はS K 2に切られるため、やや時期がさかのばると考えられる。

（1）S K 1（第14図）

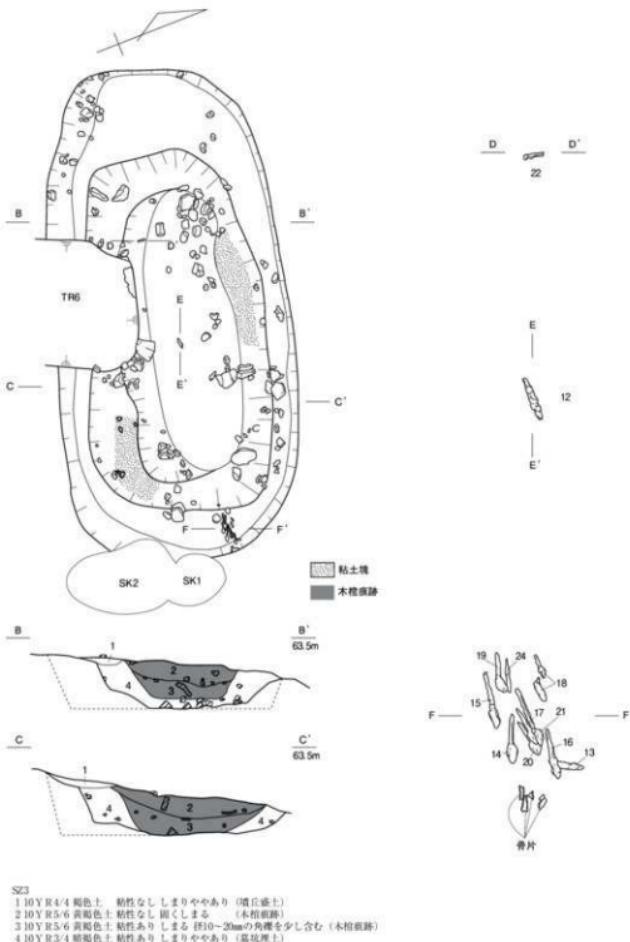
墳頂部の埋葬主体部東側で確認した円形の土坑である。残存長で、長軸0.56m、短軸0.42m、深さ0.9mを測る。土坑南部でS K 2に切られる。S K 2土層観察用ベルト除去後、墳丘覆土をやや下げた時点で検出した。検出状況からS Z 3よりさかのばると考えられる。このことから、S Z 2の埋葬儀礼に使用した土器を埋納した遺構と考えられる。

出土状況は、脚付長頸壺の脚部部分に小型壺、高坏A類の坏部に小型壺、高坏B類に高坏蓋をのせたように出土した。

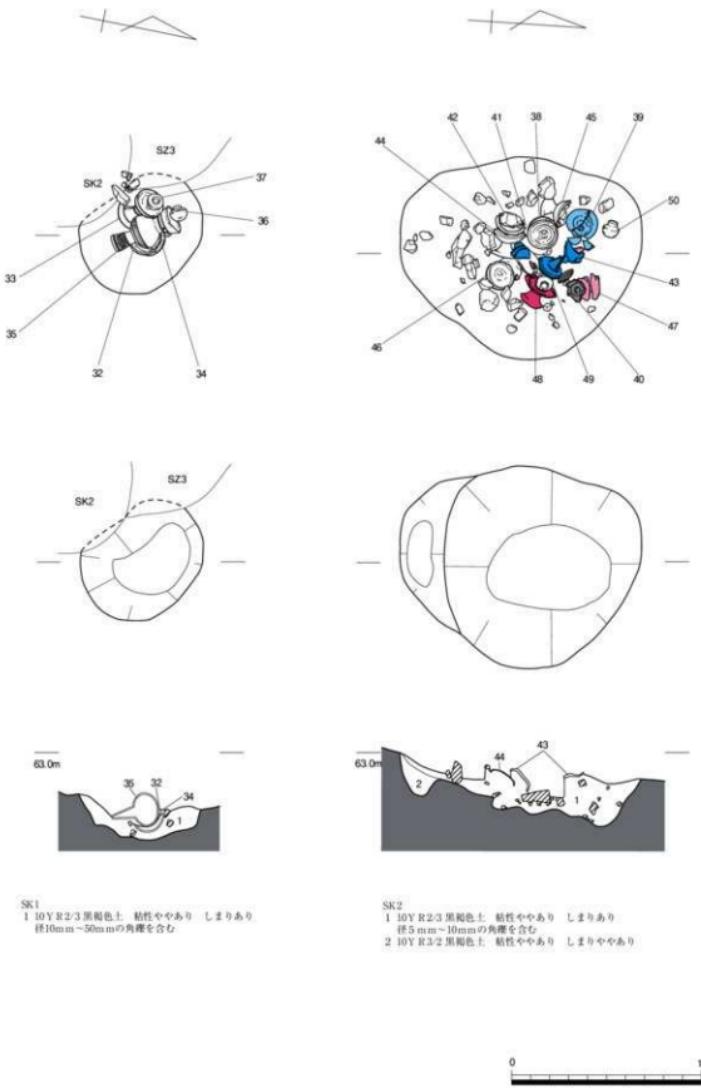
遺物は、須恵器の脚付長頸壺、高坏A類、高坏B 2類、坏蓋各1個体、小型壺2個体が出土した。出土状況から、脚付長頸壺と小型壺、高坏A類と小型壺、高坏B 2類と坏蓋をそれぞれまとめて埋納したか、あるいはそれぞれ一対として供献されていた可能性も考えられる。この高坏B 2類の脚部が太いことや、坏部の立ち上がりが外反しながら立つことなど、S K 2出土高坏B 2類と比較するとや古い様相が認められる。6世紀末から7世紀初頭のものと考えられる。

（2）S K 2（第14図）

墳頂部の埋葬主体部東側で確認した円形の土坑である。長軸1.08m、短軸0.74m、深さ0.17mを測る。土坑北部でS K 1を、西部でS Z 3を切る。S Z 3を切ることから、S Z 3の埋葬儀礼に使用した土



第13図 S Z 3 (S=1/40, 1/10)



第14図 SK1・2 (S=1/20)

器を埋納した遺構と考えられる。

出土状況は、SK1と比較すると破損した土器が多く、セットになる高環B2類と高環蓋がやや離れており、使用時の状況を判断できない。このことから、無作為に埋納した可能性を考えられる。

遺物は、須恵器の高環A類1個体、高環B2類5個体、环身1個体、环蓋1個体、高環蓋3個体、小型壺2個体が出土した。高環B2類には、脚の太いものとやや細いものが認められる。高環蓋はそれぞれ脚の細い高環B2類3個体とセットになる。SK1出土高環B2類と比較すると、脚が細いという点で、より新しい様相を持つ。小型壺はSK1出土小型壺よりも一回り大きく、やや古い様相を持つ。新旧の様相を持つものが混在することから、SK1とSK2の時期差は小さいと考えられる。

6 出土遺物

土器類は、墳丘出土遺物と周溝出土遺物のほとんどが6世紀後半、SK1・2は6世紀末から7世紀初頭のものと考えられる。このことから、墳丘出土遺物と周溝出土遺物はSZ1の、SK1出土遺物はSZ2の、SK2出土遺物はSZ3の埋葬儀礼に関連する遺物であると考えられる。

金属器類は、SZ3出土鉄鎌はすべて短頸鎌で、SZ1出土鉄鎌はすべて長頸鎌である。

(1) 墳丘出土遺物（第15図）

1は土師器の平底壺である。外面のハケは粗く、後期古墳の玄室内に置かれる例が多い器種である。一部の破片がSZ2の墓坑埋土から出土した。2は土師器の長頸壺である。頸部外面を口縁に向かって削り、その後、上半部を横方向に撫でる。内面は横方向に撫でる。6世紀後半のものではない可能性がある。3は高環蓋である。天井部と肩部にそれぞれ1条の凹線を巡らせる。端部は2段構造で、外部分をつまみ出す。全体的に浅く、扁平な作りである。

(2) SZ1出土遺物（第15図）

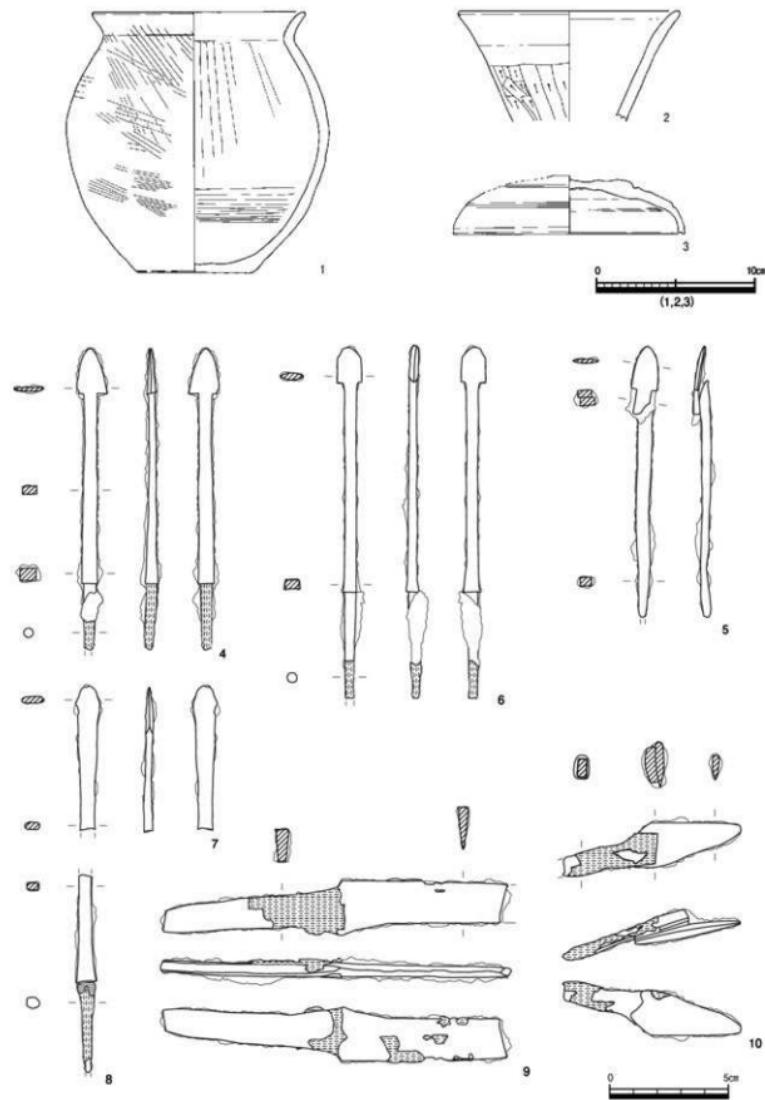
4、5は長頸鎌A類である。鎌身部にかえりがない。頸部は頸部中央に向かってやや細くなり、中央から関部に向かってやや開く。4の茎部に木質が認められる。6、7は長頸鎌B類である。6は関部が開く。茎部下方に木質が認められる。7は頸部下半と茎部を折損する。片刃が長く作られ、刃部と頸部との境が不明瞭である。

(3) SZ2出土遺物（第15図）

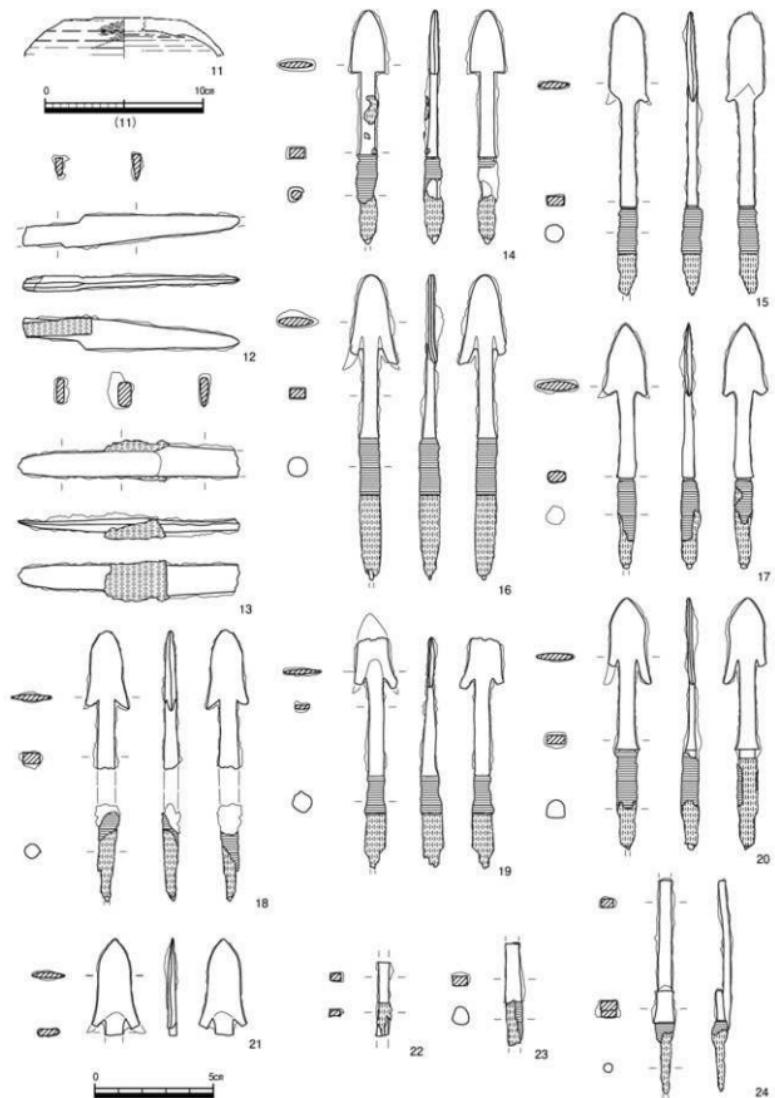
9、10は刀子である。9は切先が折損している。柄部と刃部の一部に木質が認められる。刃部に残る木質は鞘の可能性がある。10は刃部で折損し、鞘により柄部と接着する。やや小型の刀子である。

(4) SZ3出土遺物（第16図）

11は环蓋である。天井部外面にハケ状の痕跡が認められる。重量感があり、丁寧に製作された畿内系のものである。掘形から出土しているため、SZ3構築以前に破損していた可能性が高い。12、13は刀子である。12は片闇である。柄部に木質が認められる。やや小型の刀子である。13は刃部の一部が折損する。柄部に木質が認められる。14は短頸鎌A類である。頸部に木質が認められるが、刃子13と重なるように出土していることから、刀子の木質が付着したと考えられる。15、16、17は短頸鎌B類である。17はかえりが短く、明らかにC類とは違う意識で製作されたものと考えられる。18、19、20、21は短頸鎌C類である。20、21は比較的鎌身部が大きく、頸部が短い。



第15図 塗丘・SZ1・SZ2出土遺物 (S=1/3, 1/2)



第16図 S Z 3出土遺物 (S=1/3, 1/2)

(5) SD 1出土遺物 (第17図)

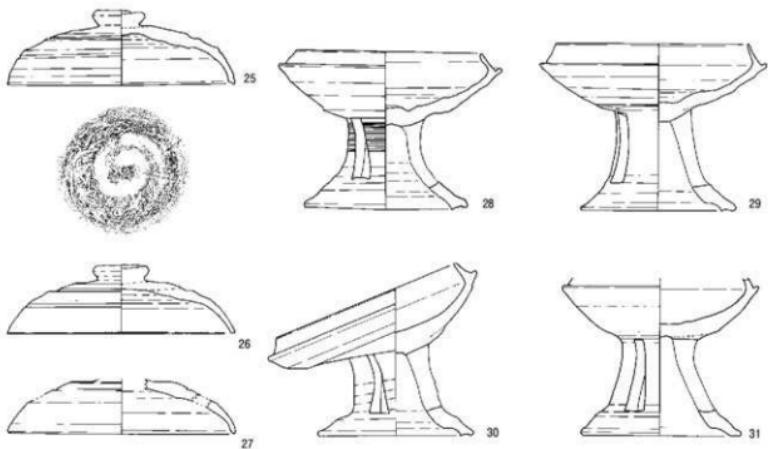
25、26、27は高壺蓋である。天井部と肩部にそれぞれ1条の凹線を巡らせる。端部は肥厚し、外部分をつまみ出す。浅く扁平な作りで、25は内面に当て具痕が残る。6世紀後半のものと考えられる。27は25や26と同じ作りと思われ、つまみの接合部がかすかに残る。28、29、30、31は高壺B 1類で1段3方向の透孔を持つ。28は脚部にカキ目が残る。裾端部内面は平らに作った後、先端の丸い工具で撫でて窪みを作る。口縁端部は内傾して立ち上がる。29の透孔はほぼ長方形である。裾端部は28と同じように平らに作った後、先端の丸い工具で撫でて窪みを作るが、内側の窪みの幅が広い。壺部と脚部の胎土が異なる。30は焼け歪みのため脚の屈曲部から大きく傾く。透孔はほぼ長方形だが、傾きとともに脚中央部で屈曲する。裾端部は29と似る。胎土は粗く、固い質感を持つ。31は壺内面が赤茶色を呈する。

(6) SK 1出土遺物 (第18図)

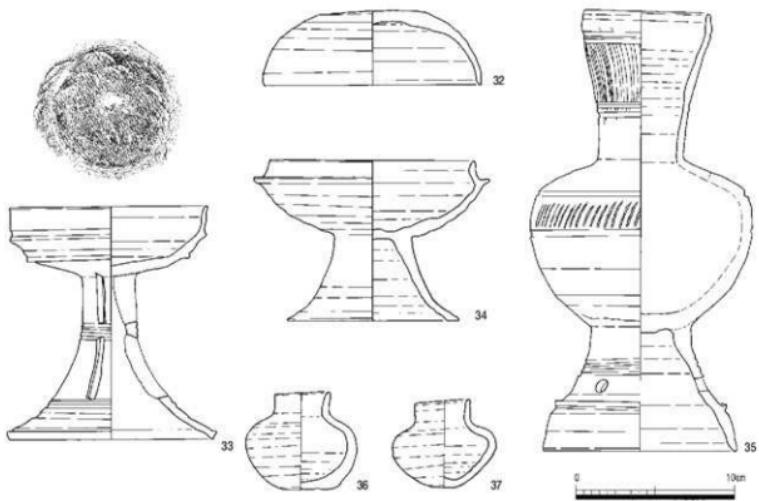
32は壺蓋である。端部は内側に面を持つ。33は高壺A類である。壺部外面中央と下部に突帶を巡らせる。2段3方向の透孔を持ち、透孔下にはそれぞれ3条の沈線を巡らせる。透孔は外から切り開ける。壺底部内面には静止ハケが認められる。34は高壺B 2類である。口縁端部は外反しながら立つ。裾部が大きく広がり、脚部も太い。また、脚部外面にはかすかではあるが右回転の絞り込み痕が確認できる。裾端部はつまみ出しが弱く、丸い。焼成はやや甘い。35は脚付長頸壺である。口頸部はやや直線的に広がりながら立ち上がり、口縁部がわずかに内彎する。体部の最大径は中央や上寄りにある。脚部は裾部に向かってやや外反しながら広がり、突帶部分から内彎する。頸上部から中央下寄りに先端の尖った工具で縱方向の平行線を施し、その線の上下端にそれぞれ2条の沈線を巡らせる。体上部と中央部にそれぞれ1条ずつのやや深い沈線を巡らせ、その間に櫛状工具による斜方向の列点文を施す。櫛状工具は、12本を1単位とする。脚上部に沈線を3条、中央部にかえり状の突帶を巡らせる。その間に1段3方向の円形の透孔を持つ。口頸部に絞り込み痕が確認できる。口頸部の縱線や脚部の透孔など、粗雑な部分が認められる。36、37は小型壺である。体下半部は回転ヘラケズリ、上半部はナデを施す。口径はほぼ同じだが、器高は36が高い。37はやや傾く。

(7) SK 2出土遺物 (第19図)

38、39は高壺蓋である。器高が高く丸みを帯びた形状で、口縁端部は内面にわずかな面を持たせて外反する。40は高壺蓋である。38と比較するとやや浅い作りで、口縁端部の外反も認められない。41は壺蓋である。器高が高く丸みを帯びた形状で、口縁端部は丸く収めながらわずかに外反する。42は壺身である。底部から受け部に向かって直線状に広がり、口縁部は低く内傾する。43は高壺A類である。壺部外面中央と下部に突帶を巡らせる。2段3方向の透孔を持ち、透孔下にはそれぞれ3条の沈線を巡らせる。透かしは外から切り開ける。44、45、46は高壺B 2類である。脚部外面にはかすかではあるが右回転の絞り込み痕が確認できる。裾端部は横へつまみ出す。47、48は高壺B 2類である。44、45、46と比較すると脚裾が大きく広がり、脚部も太い。脚部外面にはかすかではあるが右回転の絞り込み痕が確認できる。裾端部はつまみ出しが弱く、丸い。49、50は小型壺である。比較すると口径や体部幅はほぼ同じであるのに対し、50のほうが高さがあり、口縁部内面に沈線状の痕跡が残る。



第17図 SD 1 出土遺物 ($S = 1/3$)



第18図 SK 1 出土遺物 ($S = 1/3$)

7 時期

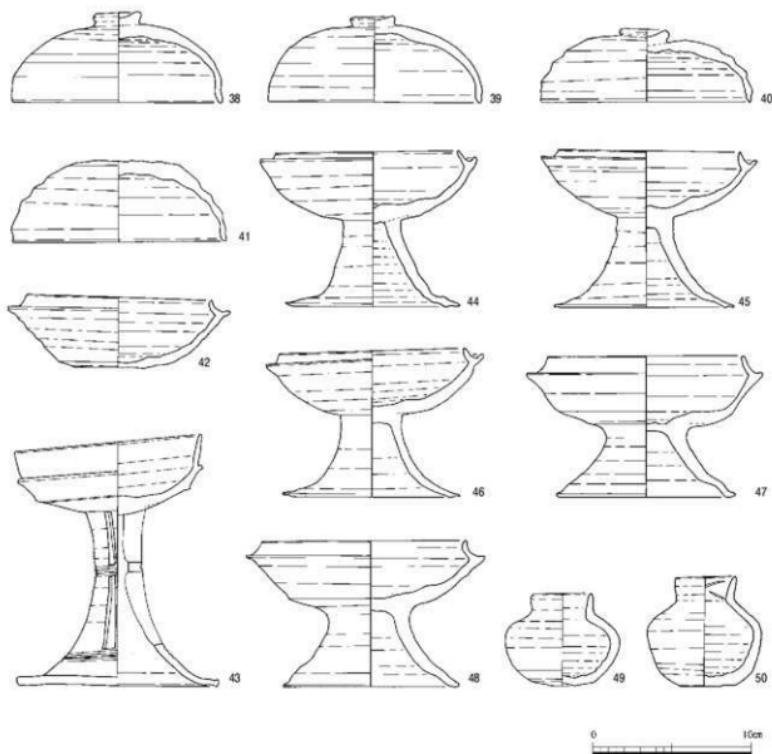
埋葬主体部の切り合い関係や出土遺物から、1号古墳は、6世紀後半に初葬が行われ（S Z 1）、6世紀末～7世紀初頭に2回目（S Z 2）、3回目（S Z 3）の埋葬が行われたと判断した。

第6表 小洞西1号古墳関連遺構

遺構番号	検出グリッド	検出層位	遺構属性				大きさ（m）				切り合い関係		出土遺物	備考		
			堆積状況	断面形状	平面形状	上端		下端		深さ	<	>				
						長径	短径	長径	短径							
SZ1	D	3	古墳盛土上面	c	IV	a	a	3.60	(1.12)	3.43	(0.91)	0.30	SZ3	I	第1主体部	
SZ2	C	3	古墳盛土上面	c	IV	b	b	4.01	(1.62)	3.83	(1.45)	0.56	SZ3 SK46	I, H	第2主体部	
SZ3	C～D	3	古墳盛土上面	c	IV	b	b	4.14	1.97	4.00	1.82	0.41	SK2	SK1 SZ1 SZ2	I, P, B	第3主体部
SD1	C～E	2～5	II層上面	c	I	c	c	26.70	3.20	26.50	2.90	0.57		H, P	肩溝	
SK1	D	4	古墳盛土上面	a	I	a	c	0.56	(0.40)	0.35	0.21	0.09	SZ3 SK2	P	土器埋納遺構	
SK2	D	4	古墳盛土上面	d	VI	a	a	1.08	0.86	0.54	0.36	0.20		SZ3 SK1	P	土器埋納遺構

注

- 1) 墳丘の南北土層図北部分を図化していなかったため、関市教育委員会の試掘確認調査時の図面を借用、合成した。
- 2) なお、土層断面図の図化に当たって、各主体部は南北ベルトを残した状態で5cmほど下げ、木棺痕跡を平面的に確認した時点で木棺痕跡部分の掘削に入った。その後、木棺痕跡部分をベルトを残し完掘した時点で断面図を図化したため、掘形はやや下げた状態の土層図のみになっている。そのため、掘形の断面図は平面図からの想定線を破線で表している。



第19図 SK 2出土遺物 (S = 1/3)

第3節 小洞遺跡

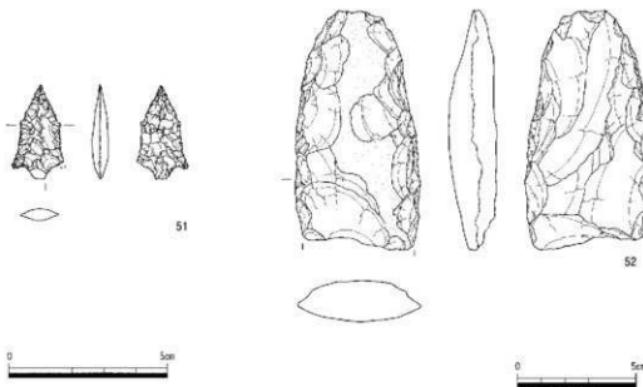
当遺跡で確認した遺構や遺物のうち、小洞西1号古墳に関連する以外のものについて扱う。第4章第1節で設定した時期区分に従って記述する。

1 小洞I期（縄文時代）

この時期の遺構は確認できていない。遺物は石器4点が出土しており、内訳は石鎌1点、打製石斧1点、フレイク2点である。

51は石鎌で、石材はチャートである。基部は凸状だが、一部欠損する。側縁部に角を持ち、角部分に突起を持つ。調整時から意図的に突起部を作り出す。脚端部から先端部に向かって調整剥離をし、最後に脚部と基部の間を抉る。表には調整剥離の打点が残る。先端角は42°である。形状から、縄文時代後期から晩期以降のものの可能性が高いと考えられる。

52は打製石斧で、石材は濁飛流紋岩である。小型の円礫を割り、周辺を調整して作り出す。表面に円礫時の自然面が残る。側縁は刃部に向かって徐々に開き、長軸3分の2程度からすぼむ形状となる。この形状は、調整前の円礫の形状に制限されたためと考えられる。刃部は折損し、再加工や再使用の痕跡は認められない。また、装着痕も確認できない。



第20図 小洞I期の遺物 (S=2/3, 1/2)

2 小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）

当該期の遺構は、方形周溝墓2基、溝状遺構3条、集石遺構1基、土坑7基がある。

（1）1号方形周溝墓（第21、22図）

概要 1号方形周溝墓は、調査区南東部に位置する。試掘確認調査の11トレンチで周溝を検出した。この溝が屈曲し方形状になることが判明したため方形周溝墓と判断した。また、周溝の収束部を結ぶように礫が集中している部分が確認できた。この集石遺構から土器器が数点出土している。

墳丘の元来の高さについては、土砂の流失により不明である。墳丘盛土と考えられる土層が3層確認できた（AA'土層断面図）。II層（6層）上に黒褐色土層（3層）、暗褐色土層（4層）、褐色土層（5層）が堆積する。II層は旧表土で、その上に堆積するため盛土と判断した。埋葬主体部は確認できなかった。

周溝（SD2） 墳丘の山側北西～南西～南東部にかけての斜面上部で確認した。谷側にコ字状に開放する形状である。斜面下方に向かうにつれ、徐々に浅くなり収束する。周溝の幅は一番広いところで約3mで、全体では約1.5～3mである。深さは最も深いところで約0.6mである。旧表土から基盤層（II～IV層）を掘削し、墳丘を盛り上げたと考えられる。埋土は、斜面上方から土砂が流れ込み、その後窪んだ部分に土砂がほぼ水平に堆積している。墳丘からの流れ込みはほとんどなく、低墳丘であった可能性が高い。

集石遺構（SI1） 周溝の収束する部分を結ぶように、北西～南東方向にベルト状の集石遺構SI1を確認した。方墳の斜面上部の周溝に平行するように礫が認められる。調査終盤にこの集石遺構を解体し、集石の下部にII層の堆積を確認した。周溝埋土に墳丘からの流水が認められないことから低墳丘墓の可能性を指摘したが、低墳丘の裾部分の土留め的な機能を持っていた可能性が考えられる。遺物はSI1の斜面上方に寄りで出土しており、墳丘から転落してきたもの可能性が高い。

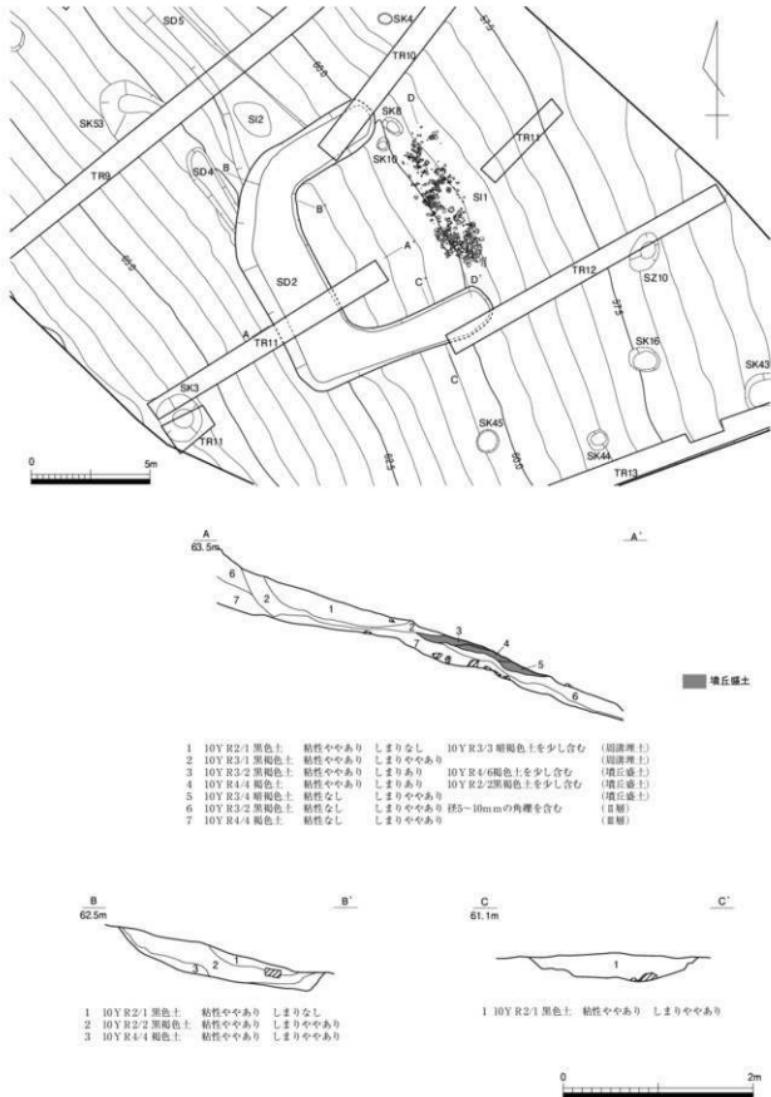
出土遺物（第23図）

53は広口壺の口縁部から体上半部で、SI1から出土した。口縁部を上にした状態で出土したが、下半部は確認できなかった。出土状況は、斜面上方から転落し、礫で止まったように見える。口縁部はかすかに外反しながら聞く。体上半部外面を横ナデの後、斜方向に磨く。内面は横方向の板ナデで、口縁部と頸部の接合部に指押さえ痕が残る。54は壺の体下半部から底部で、SI1から出土した。53と同様、転落し礫で止まったような出土状況である。器面の摩耗が激しく、調整は不明である。55は壺の体部片で、SI1から出土した。列点が確認できる。最下段列点と思われることから、廻間II式を下らないと考えられる。摩耗が激しく、調整は不明である。

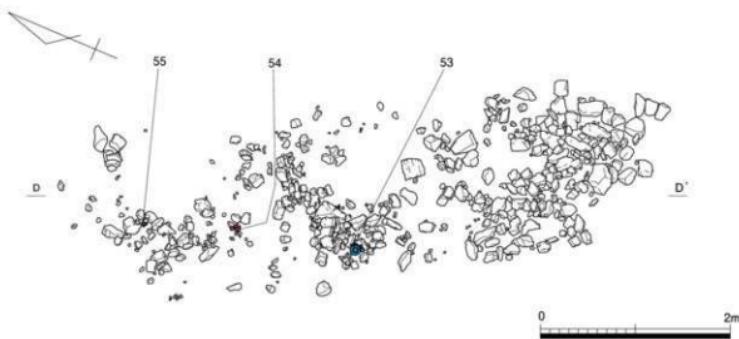
時期 出土遺物から小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）である可能性が高いと考えられる。

第7表 1号方形周溝墓関連遺構

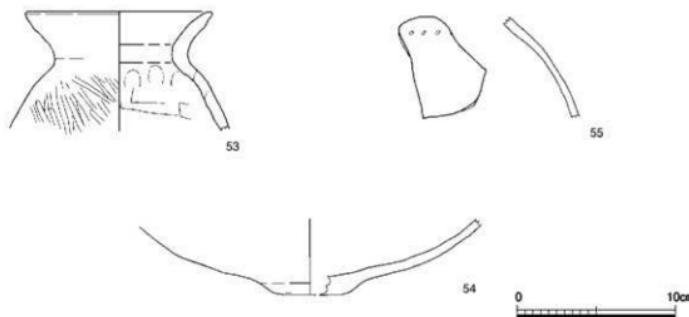
遺構番号	検出グリッド		検出層位	遺構属性				大きさ(m)				切り合せ関係	出土遺物	備考		
	南北	東西		堆積状況	断面形状	平面形状	底面形状	上端		下端		深さ	<	>		
								長径	短径	長径	短径					
SI1	I	II	II層上面	-	-	c	-	6.52	2.26	-	-	-	H		集石遺構	
SD2	H-J	9	II層上面	c	I	c	c	20.70	3.10	20.40	2.10	0.38	SD5 SD6	H	周溝	



第21図 1号方形周溝墓 (S=1/200, 1/50)



第22図 S I 1 (S=1/50)



第23図 S D 2・S I 1 出土遺物 (S=1/3)

(2) 2号方形周溝墓（第24、25図）

概要 調査区北西部、小洞西1号古墳の東側（南北H～Jグリッド、東西5～7グリッド）のII層上面で検出した。試掘確認調査では周溝部分を確認していた。斜面のため、墳丘や埋葬主体部は流失しており確認できなかった。墳丘中央部で確認したSK22は、主体部としては深すぎることから別時期の遺構と判断した。

周溝（SD3） 南北H～Jグリッド、東西5～7グリッドで谷側にコ字状に開放する形態の周溝を確認した。墳丘部の周囲を巡っていないが、周溝中から弥生末～古墳初頭の壺類が出土したため方形周溝墓と判断した。周溝の最大幅は1.95m、最大の深さは0.49mである。旧表土（II層）及び基盤層（III層）を掘削し、墳丘を盛り上げたと考えられる。土層断面により、斜面上方からもたらされた土砂によって、掘形に対し平行に埋没したと考えられる。

遺物は周溝の底面に近い部分で出土するものが多い。G-G'付近で出土したバレス壺（56）は周溝に沿って約2mの範囲で出土した。最上方では体上半部が内面を上に向けて出土し、そのすぐ下方で口縁部が正位の状態で出土した。ここでは、底面との間にほとんど土砂を挟まないが、下に行くにつれ、内外面の向く方向がばらばらとなり、底面との間に挟む土砂の量が増える。このことから、内面を上にして出土した場所（最上方）にバレス壺が転落して壊れ、破片が流土とともに斜面下方に流されていったと考えられる。H-H'付近で出土した長頸壺（57）は、周溝の底面から浮いた状態で、横位で出土した。口縁部が破損するが、ほぼ原形を保つ。底面との間に土砂を挟むことから、ある程度周溝が埋まってから転落した可能性が高い。その他の周溝から出土した土器は高壺と壺で、甕は存在しない。

出土遺物（第26図）

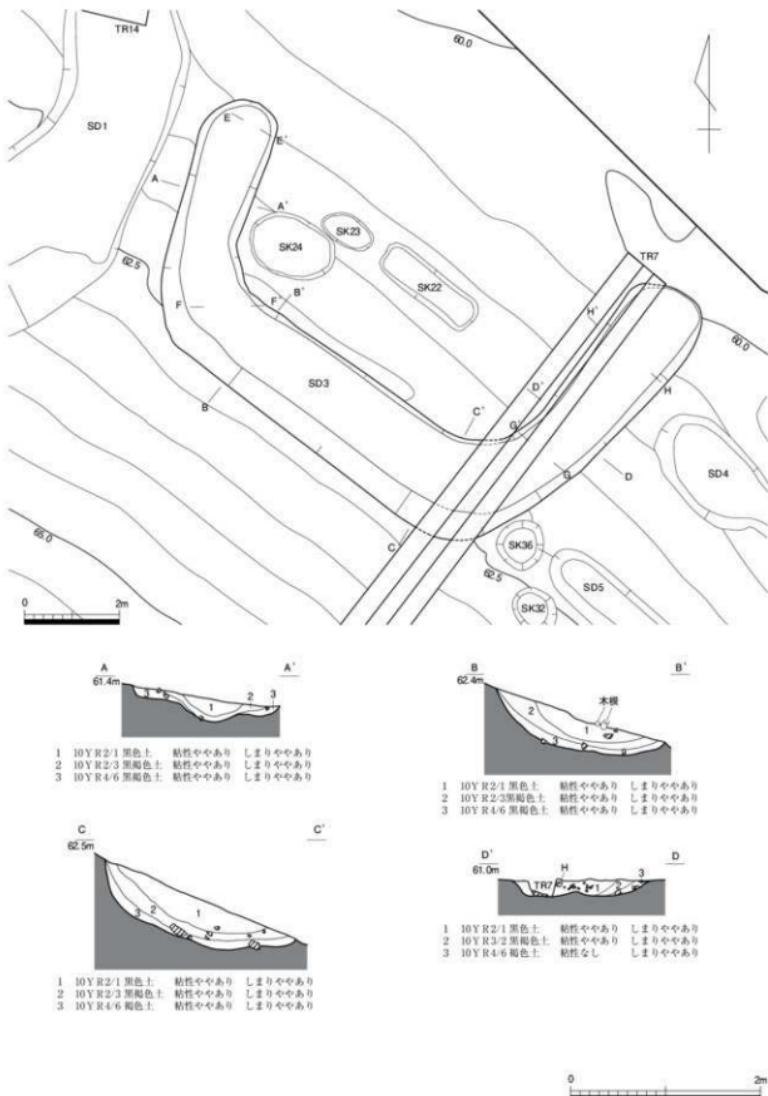
56はバレス壺で、SD3から出土した。口縁部が外反し、端部を肥厚させ擬凹線文を巡らせる。口縁部内面には羽状文を施す。頸部外面にハケ、内面にミガキを施す。頸部の突帯には斜方向梢円形の刺突を施す。体部には上から横線文12条、波状文12条、横線文12条が巡る。下部の横線文12条のうち上の6条は、体部を1周した後、下の6条を切るように流線文状に曲がって収束する（写真3）。下部横線文の下に刺突文が巡る。突帯部分の刺突文と大きさ、幅がほぼ同じであることから、同一工具によるものと考えられる。体下半部外面にミガキ、内面にハケを施す。頸部内外面と体部外面の刺突



写真3 56流線文状沈線



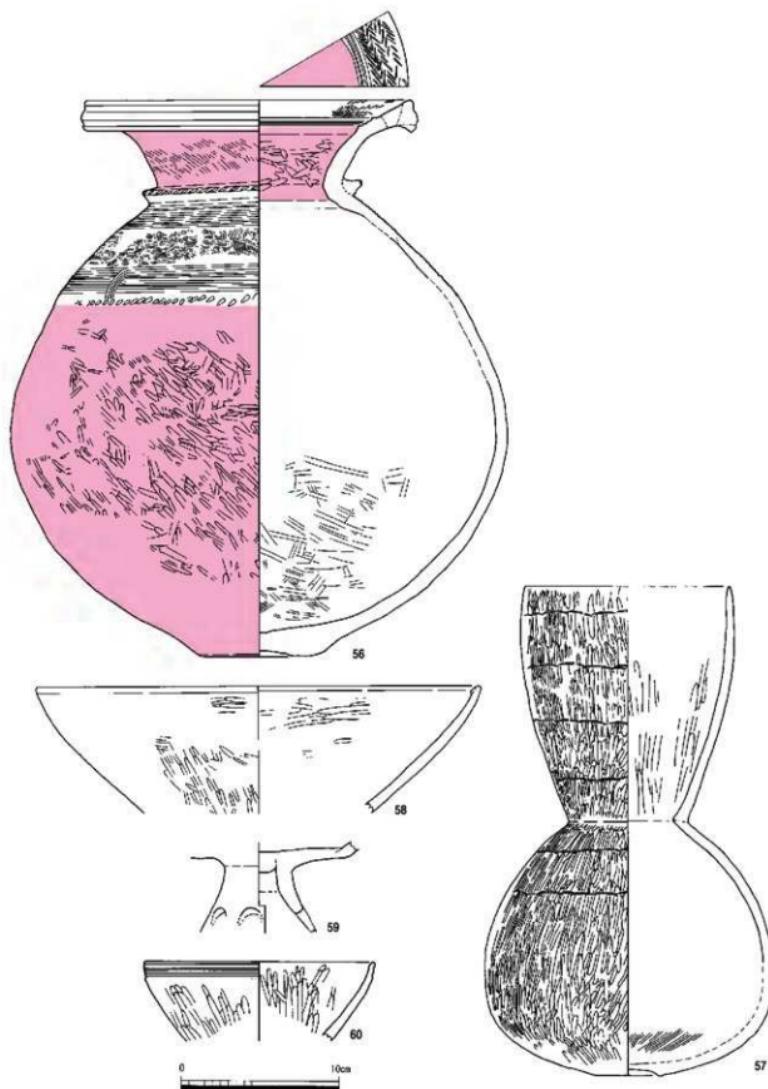
写真4 57貝殻文



第24図 2号方形周溝墓 (S=1/100, 1/50)



第25図 SD 3 遺物出土状況図 (S= 1 /20)



第26図 SD 3 出土遺物 ($S = 1/3$)

文から底部まで赤彩が認められる。廻間遺跡壺 A 1 類（廻間 I 式）に比定できる。57は長頸壺で、S D 3 から出土した。長頸壺の中ではかなり大型である。口部は内擣し、端部はほぼ垂直に立つ。体部の最大径は下方にあり、緩やかにふくらむ。底部外面は皿状に窪む。口縁部内外面と体部外面に縱方向のミガキを施す。体部内面は完形のため調整の確認ができないが、底部近くにハケ状の調整が認められる。外面に 6 段の連続貝殻文を巡らす（写真 4）。口縁端部から、1.6cm、3.3cm、3.3cm、3.3cm、4.5cm、2.7cm の間隔である。工具を地面に対して水平にして器面に当てており、貝殻文 1 単位の形状は、口縁端部から 1 ~ 3 段は下弦状、4 段目のみ上弦状、体部 2 段は下弦状となる。廻間遺跡壺 C 3 類（廻間 I 式）に比定できる。58は高環の环部で、S D 3 から出土した。环部外面は縱方向のミガキを施し、口縁端部のみ内外面に横方向のミガキを施す。廻間遺跡高环 A 2 類（廻間 I 式）に比定できる。59は高环の环底部から脚上半部で、S D 3 から出土した。透孔は位置から考えると 4 方向である。环底部は平らで段を持つ、いわゆる有段高环である。廻間遺跡高环 A 2 類（廻間 I 式）に比定できる。58と 59は胎土や焼成、出土位置などから同一個体である可能性がある。60は高环の环部で、S D 3 から出土した。口縁端部外面に沈線を 5 条施す。内外面は縱方向のミガキを施す。廻間遺跡高环 C 類（廻間 I 式）に比定できる。

時期 周溝から出土した遺物が廻間 I 式併行のものと考えられることから、小洞 II 期（弥生時代末～古墳時代初頭）の遺構とした。

第8表 2号方形周溝墓間遺構

遺構番号	検出グリッド		検出層位	遺構属性			大きさ (m)				切り合い関係		出土遺物	備考	
	南北	東西		堆積状況	断面形状	平面形状	上端		下端		深さ	<	>		
							長径	短径	長径	短径					
SD3	S D ~ E	5 ~ 7	II 層上面	c	I	c	17.50	2.90	17.10	1.90	0.48			H	

(3) 溝状遺構

当該期の溝状遺構は、調査地中央部、1・2号方形周溝墓の間で確認した。3条は平行し、斜面に直交する。

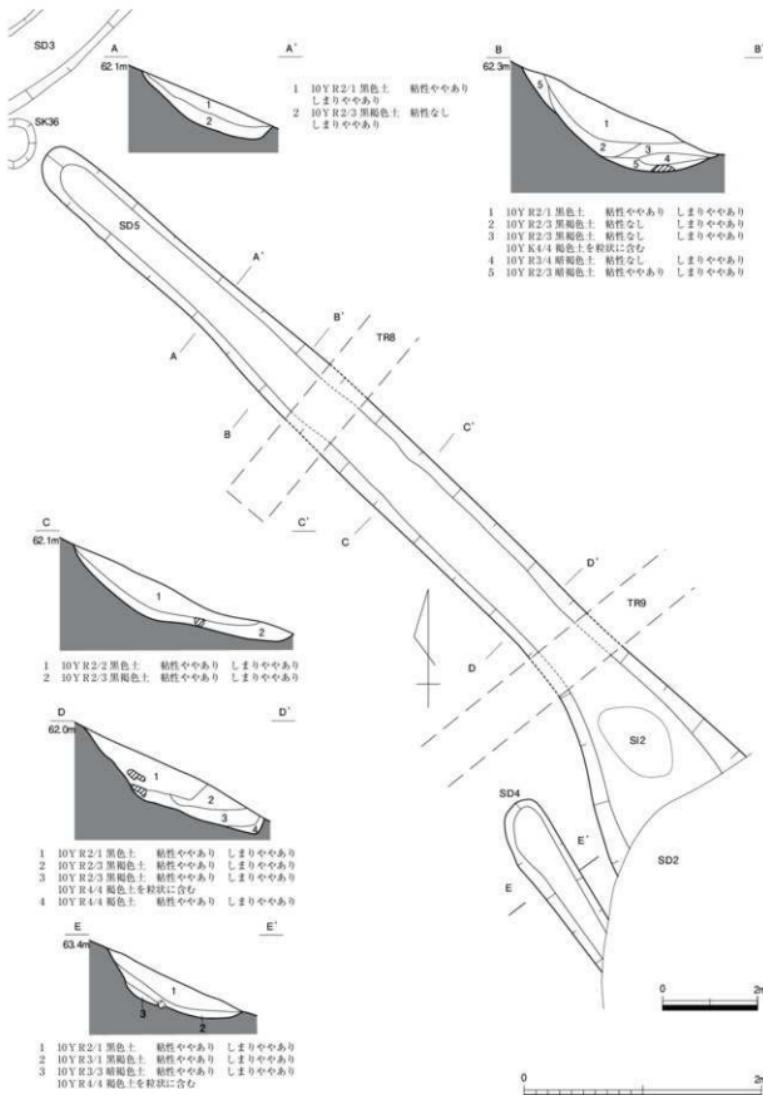
S D 4 (第27図)

検出状況 調査区中央部斜面上方で確認した溝状遺構である。南東部を 1 号方形周溝墓の周溝 S D 2 に切られることから、当該期の遺構と判断した。残存長は長軸上端で約3.6mである。深さは0.34mである。斜面に対して直交する。S D 5、S D 6 と平行する。底面はほぼ平らで、やや締まる程度である。通水の痕跡もなく、溝というよりも墓道あるいは段切造成の可能性が高いと考えられる。出土遺物はなかった。

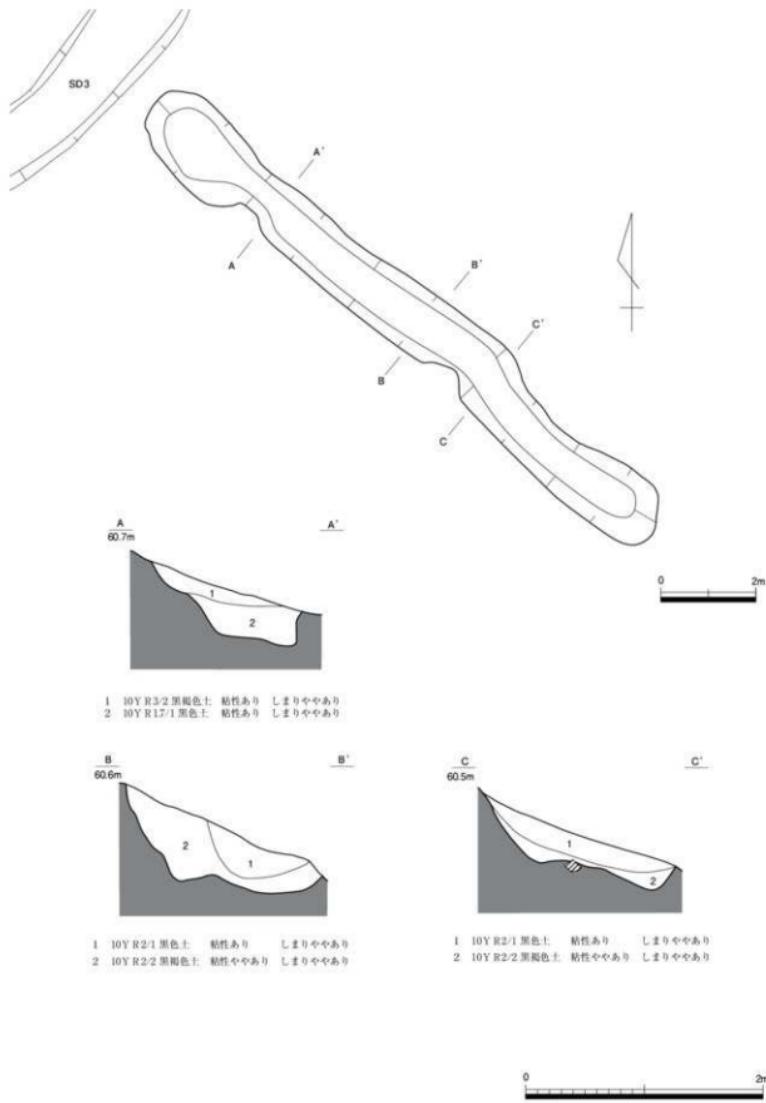
時期 1号方形周溝墓に切られることから、小洞 II 期（弥生時代末～古墳時代初頭）の遺構とした。

S D 5 (第27図)

検出状況 調査区中央部斜面上方で確認した溝状遺構である。南東部を小洞西 1 号方形周溝墓の周溝 S D 2 に切られることから、当該期の遺構と判断した。残存長は長軸上端で約19mである。深さは0.4mである。斜面に対して直交する。S D 4、S D 6 と平行する。底面はほぼ平らで、やや締まる程度である。南東部の底面で、S I 2 を確認した。S I 2 から土師器片が出土していることから、小洞 II 期には底面が露頭している状態であったと考えられる。通水の痕跡もなく、溝というよりも墓道



第27図 SD 4・5 (S=1/100, 1/40)



第28図 S D 6 (S=1/100, 1/40)

あるいは段切造成の可能性が高いと考えられる。出土遺物はなかった。

時期 1号方形周溝墓に切られること、底部でS I 2を確認したことから、小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）の遺構とした。

S D 6（第28図）

検出状況 調査区中央部斜面上方で確認した溝状遺構である。長さは約14m、深さは0.34mである。斜面に対して直交する。S D 4、S D 5と平行する。底面はほぼ平らで、やや縮まる程度である。通水の痕跡もなく、溝というよりも墓道あるいは段切造成の可能性が高いと考えられる。

出土遺物（第32図）

61は高壙である。緩やかに内灣し、端部は肥厚する。形状や口径から、有稜高壙の壙部と考えられる。廻間I～II式併行と考えられる。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）の遺構と判断した。

第9表 小洞Ⅱ期の溝状遺構

遺構番号	検出グリッド		検出層位	遺構属性				大きさ(m)				切り合い関係			出土遺物	備考
				堆積状況	断面形状	平面形状	底面形状	上端	下端	長径	短径	深さ	<	>		
	南北	東西														
SD4	H～I	9	II層上面	c	I	c	c	(3.60)	1.05	(3.40)	0.70	0.34	SD2	なし		
SD5	F～H	7～9	II層上面	c	I	c	c	(19.10)	3.70	(18.60)	2.50	0.40	SD2 SI2	なし		
SD6	E～F	7～9	II層上面	c	IV	c	c	13.80	2.55	13.10	1.45	0.60		H		

（4）集石遺構

S I 2（第29図）

検出状況 H 9グリッド、S D 5の底面において検出した長軸約1.9mの楕円形の集石遺構である。S D 5の底面に礫が流入した可能性も考えられるが、S D 5底面の他の部分では、礫が散在することから、S I 2は意図的に集石したものと考えられる。斜面下方に径20～50cmの礫を配置し、その内部を径10cm程度の小礫で充填するように見える。南部は礫が散在し、斜面上部の礫が転落してきた可能性がある。S D 5底面に構築されることから、S D 5に付属する遺構である可能性が考えられる。

遺物は集石内部と東部から土師器片が39点出土した。壺の口縁部・体部・底部片で、胎土や焼成から同一個体であると考えられる。礫の下部に土坑は確認できなかった。性格は不明である。

出土遺物（第32図）

62は広口壺の口縁部である。口縁部は受け口状で、端部を上方へつまみ出す。63は平底壺である。摩耗が激しく、調整は不明である。形状から廻間I式後半からII式前半に比定できる。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）の集石遺構と判断した。

第10表 小洞Ⅱ期の集石遺構

遺構番号	検出グリッド		検出層位	遺構属性				大きさ(m)				切り合い関係			出土遺物	備考
				堆積状況	断面形状	平面形状	底面形状	上端	下端	長径	短径	深さ	<	>		
	南北	東西														
SI2	H	9	SD5底面	-	-	a	-	1.88	1.19	-	-	-	SD5	H		

(5) 土坑

当該期の土坑は、調査地の北東部、1号方形周溝墓の下方に多く確認できる。

S K 3 (第30図)

検出状況 J 8 グリッドにおいて検出した径約2mの円形の大型土坑である。土坑南部はテラス状になつておらず、パレス壺(64)の底部が出土した。土坑の底部の最も低い位置である北寄りに角礫が出土した。斜面上方からの転石か意図的に置かれたかは判断できなかった。土層断面図では、3、4、5、6層の堆積を1、2層が切っており、2基の土坑が切り合っていた可能性が高い。性格は不明である。

出土遺物 (第32図)

64はパレス壺である。外面のほぼ底部まで赤彩が認められる。内面は横方向の板ナデを施す。廻間遺跡壺A 1類(廻間I式後半～II式前半)に比定できる。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅱ期(弥生時代末～古墳時代初頭)以降の土坑とした。

S K 4 (第30図)

検出状況 G10グリッドにおいて検出した径約0.6mの円形の土器埋設遺構である。土色の類似により平面形が不明瞭だったことからやや掘り下げて検出したため、本来はもっと深いと考えられる。底部は平坦である。この土坑からパレス壺(65)が出土した。土圧により潰れていたが、ほぼ完形である。土坑南部で底部片(青網の破片)が出土し、西部で口縁部片(赤網の遺物)が出土した。底部片と口縁部片の間で出土した遺物のはんどが内面を上に向けて出土した。口縁部より北東部で出土した遺物は表裏様々である。口縁部を北にして横位に埋設していた可能性が高いが、北東部の土器が表裏様々で出土したことから、壊れた土器を埋納した可能性もある。

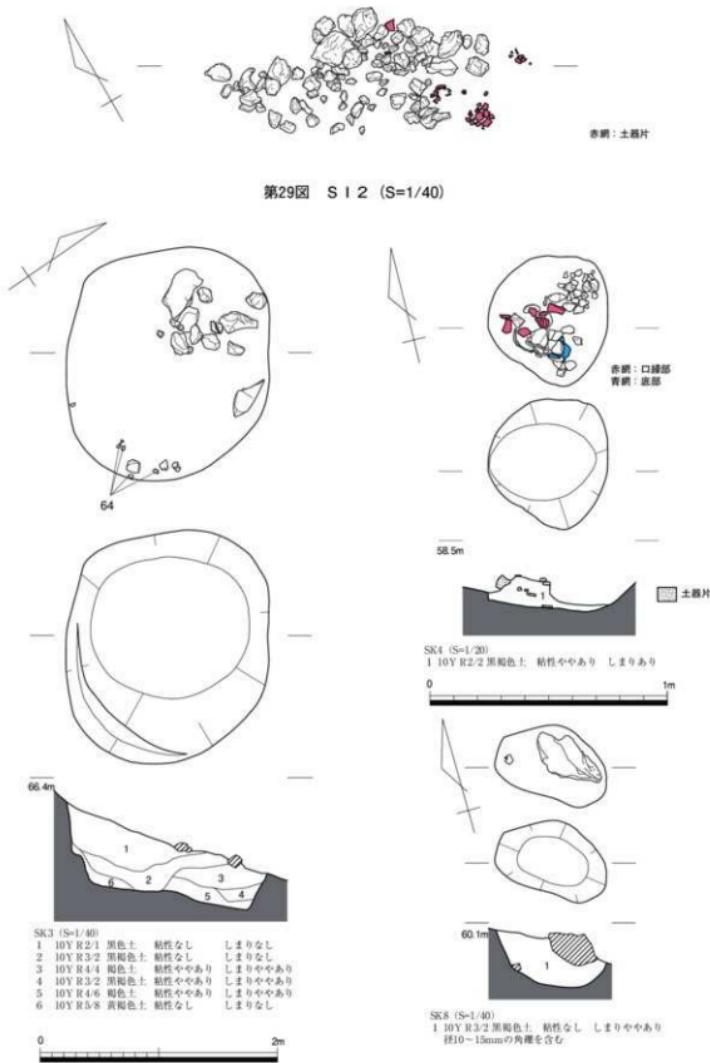
出土遺物 (第32図)

65はパレス壺である。外面は摩耗のため赤彩の剥がれが激しいが、口縁部から底部まで、ところどころ残ることから、全体に赤彩が施されていたと考えられる。最大幅が下方にある、いわゆるしもぶくれ型である。口縁部は外反し、端部を肥厚させ擬四線文を巡らせる。棒状浮文の痕跡が残る。口縁部内面には柳状文と沈線4条を施す。体上部外面は、沈線8条、柳状文、波状沈線1条を施す。沈线下は横方向のミガキを施す。体部内面は横方向の板ナデが認められる。形状は廻間遺跡壺A 3類(廻間II式)に比定できるが、典型的なパレス壺ではなく在地色が強いため、パレス壺の形状が確立する時期(廻間I式後半)以前に製作された可能性が考えられる。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅱ期(弥生時代末～古墳時代初頭)の土坑とした。

S K 5・S K 6 (第31図)

検出状況 S K 5はG10グリッドにおいて検出した径約0.4mの円形の土坑である。深さは0.04mの浅い土坑で、底部はほぼ平坦である。S K 6はG10グリッドにおいて検出した長軸1.3mの楕円形の土坑である。深さは0.1mの深い土坑である。底面は平坦で、やや北に下る。S K 5とS K 6の距離は約0.5mである。これらの土坑からパレス壺(66)が出土した。出土した遺物の向く方向は表裏様々で、埋土上部に浮遊した状態である。S K 5とS K 6から出土した遺物が接合した。このため、S K 5とS K 6は同時期に埋没したと考えられる。どちらの土坑も性格は不明である。



出土遺物（第32図）

66はバレス壺である。SK 5・6からは部片も複数出土しているが復元するには至らず、口縁部のみ復元した。外面は摩耗のため赤彩は確認できない。口縁部は外反し、端部を肥厚させ擬凹線文を巡らせる。棒状浮文が残る。口縁部内面には櫛状文を羽状に配置する。口頸部には縱方向のハケを施す。廻間遺跡壺A 3類（廻間I式後半～II式前半）に比定できる。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）以降の土坑とした。

SK 7（第31図）

検出状況 E 8 グリッドにおいて検出した長軸約1.6mの楕円形の大型土坑である。角礫が散漫とした状態で出土した。礫は底部ではあまり認められず、埋土中に浮遊しているものが多い。このことから、埋没過程で混入した可能性が高いと考えられる。土坑の壁は開く。底部は平坦で、やや北東に下る。高環の脚部（67）が出土した。埋土中から出土しているため、埋没過程で混入したものと考えられる。性格は不明である。

出土遺物（第32図）

67は高環の脚部である。破片の下端に透孔の一部が認められる。摩耗のため、内外面の調整は不明である。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）以降の土坑とした。

SK 8（第30図） SK 10（第31図）

検出状況 SK 8はH10グリッドにおいて検出した長軸約0.9mの楕円形の土坑である。長軸約70cmの角礫が埋土中に浮遊した状態で出土した。斜面上方からの転石か意図的に置かれたかは判断できなかった。土坑の壁面は斜めで、底部は丸い。SK 10はH10グリッドにおいて検出した長軸約0.5mの円形の土坑である。深さは約0.4mで、壁は直立し、底部は平らである。これらの土坑から、高環の脚部（68）が出土した。検出面及び埋土上層から出土しているため、埋没過程で混入したものと考えられる。性格は不明である。

出土遺物（第32図）

68は高環の脚部である。透孔の一部が確認できる。位置的に4方向の透孔と考えられる。内面は横方向のナデで調整する。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）以降の土坑とした。

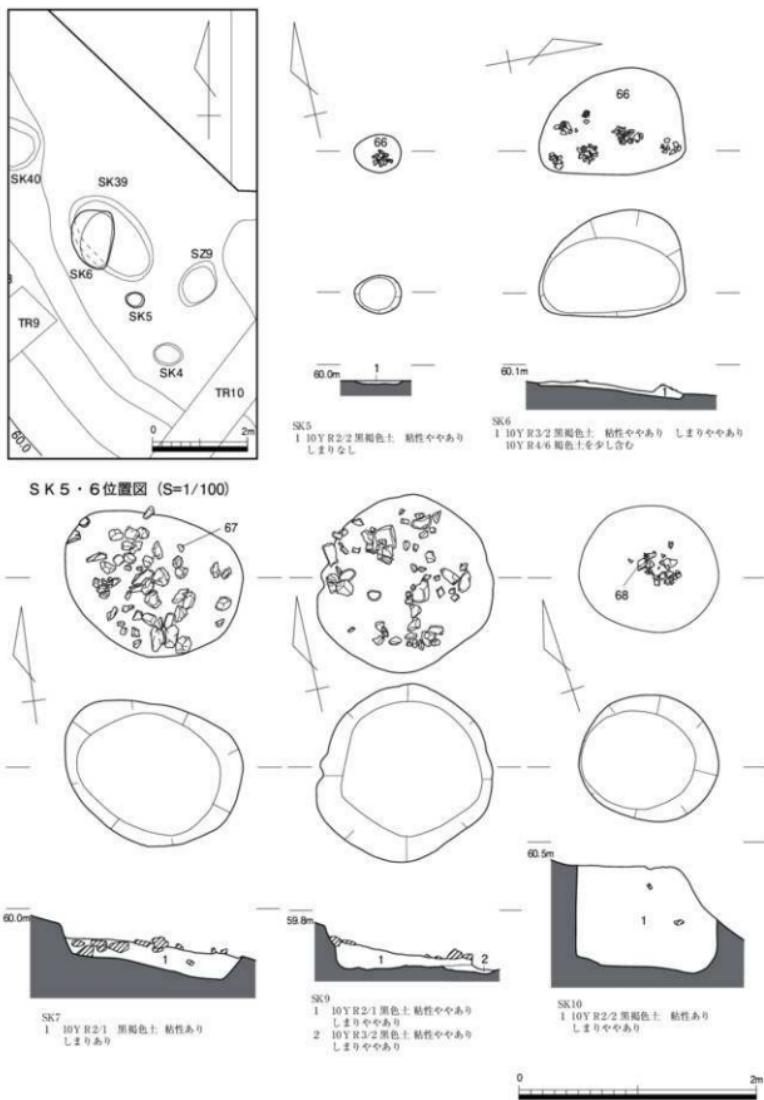
SK 9（第31図）

検出状況 F 9 グリッドにおいて検出した径約1.5mの円形の大型土坑である。角礫が散漫とした状態で出土した。礫は底部ではあまり認められず、埋土中に浮遊しているものが多い。このことから、埋没過程で混入した可能性が高いと考えられる。土坑の西壁は立ち、底部は平坦である。鉢の底部（69）が出土した。埋土上層から出土しているため、埋没過程で混入したものと考えられる。性格は不明である。

出土遺物（第32図）

69は平底の小型の鉢の底部である。底部内面にかすかに平坦面が認められる。摩耗のため、内外面の調整は不明である。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代初頭）以降の土坑とした。



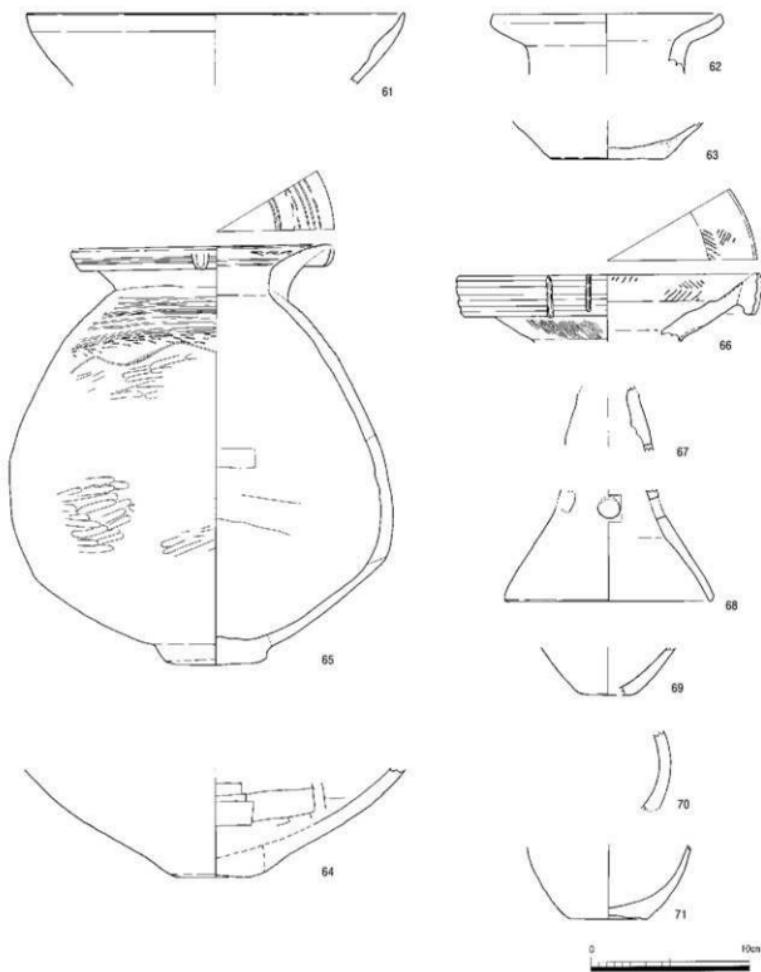
第31図 小洞Ⅱ期の土坑② (S=1/40)

第11表 小洞Ⅱ期の土坑

遺構番号	検出グリッド		検出層位	遺構属性			大きさ (m)				切り合ひ関係		出土遺物	備考		
	南北	東西		堆積状況	断面形状	平面形状	上端		下端		深さ	<	>			
							長径	短径	長径	短径						
SK3	J	8	II層上面	d	IV	a	a	2.08	1.74	1.22	1.34	0.58			H	
SK4	G	10	III層上面	a	II	a	a	0.54	0.50	0.35	0.34	0.12			H	
SK5	G	10	III層上面	a	I	a	a	0.40	0.32	0.29	0.27	0.03			H	
SK6	G	10	III層上面	a	IV	a	a	1.27	0.92	1.14	0.61	0.10	SK39		H	
SK7	E	8	II層上面	a	IV	a	a	1.52	1.20	1.21	0.93	0.21			H	
SK8	H	10	II層上面	a	I	a	a	0.95	0.60	0.59	0.37	0.39			H	
SK9	F	9	II層上面	b	IV	a	a	1.47	1.35	1.10	1.20	0.21			H	
SK10	H	10	II層上面	a	II	a	a	0.58	0.53	0.38	0.39	0.42			H	

(6) 遺物包含層出土遺物（第32図）

70は壺の体部片で、F 10グリッドから出土した。形状から、小振りな壺であると考えられる。71は平底壺の体部から底部で、G 11グリッドから出土した。形状から、小振りな壺であると考えられる。時期的にはどれも廻間Ⅰ式後半からⅡ式前半に比定できる。



第32図 小洞Ⅱ期の遺物 ($S = 1/3$)

3 小洞Ⅲ期（古墳時代後期）

当該期の遺構は、土坑2基がある。

(1) 土坑

S K11（第33図）

検出状況 B2～3グリッドにおいて検出した長軸約2.7mの不定形の大型土坑である。埋土上層で角礫が散漫とした状態で出土した。この角礫は浮遊しているものが多いことや、土坑埋土が中央が窪む形状で自然堆積の可能性が高いことから、埋没過程で混入した可能性が高いと考えられる。土坑の東壁面は直立し、西壁面は開く。底部は平坦である。坏蓋（72）が出土した。埋土上層から出土しているため、埋没過程で混入したものと考えられる。性格は不明である。

出土遺物（第33図）

72は坏蓋である。やや浅いドーム型である。ほぼ直線的に立ち、端部は内に面を持つ。

時期 出土した遺物から、小洞Ⅲ期（古墳時代後期）以降の土坑とした。

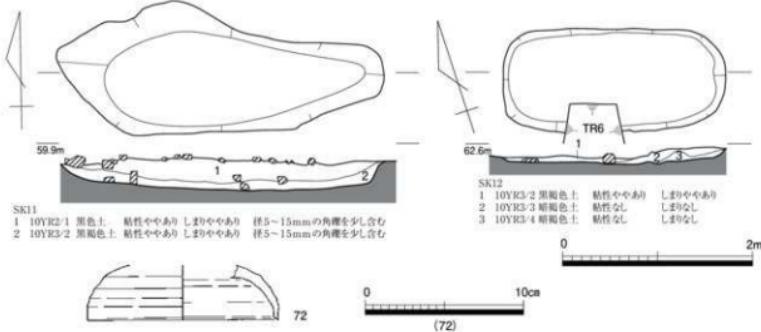
S K12（第33図）

検出状況 1号古墳の墳丘の除去後、D～C3グリッドにおいて検出した長軸約1.8mの隅丸方形の大型土坑である。1号古墳主体部の形状とよく似るが、墳丘断面や土層観察から、1号古墳に関係するものではなく、旧表土上の土坑と判断した。底部は平坦である。土坑は斜面下方の北東部から埋没している。また、埋土中に角礫が散漫とした状態で出土した。これらのことから、自然埋没した可能性が高いと考えられる。性格は不明である。

時期 1号古墳墳丘盛土下で確認したことから、小洞Ⅲ期（古墳時代後期）以前の土坑とした。

第12表 小洞Ⅲ期の土坑

遺構番号	検出グリッド		検出層位	遺構属性		大きさ(m)				切り合ひ関係	出土遺物	備考				
	南北	東西		堆積状況	断面形状	平面形状	上端		下端							
							長径	短径	長径	短径						
SK11	B	2～3	II層上面	c	I	e	2.73	1.14	2.18	0.80	0.27	P				
SK12	C～D	3	II層上面	d	I	b	1.86	0.86	1.72	0.78	0.11	SZ3	なし			



第33図 小洞Ⅲ期の土坑及び遺物(S=1/40,1/3)

4 小洞Ⅳ期（中世）

当該期の遺構は、中世墓7基、土坑5基がある。

（1）中世墓

S Z 4（第34図）

検出状況 B 3 グリッドにおいて検出した円形の大型土坑である。第6トレンチ内で確認した。関市教育委員会の試掘確認調査では長軸約1.8mの土坑としていたが、再検出の結果、長軸約1.5mとなった。また、この調査では、S Z 5と切り合っていたが、接する程度となった。検出面で角礫が出土した。土坑底部にやや大振りな角礫が置かれ、その上から骨片が出土した。壁面は斜めで、底部は平らである。出土した骨片は人骨である。骨片に有機質が残っておらず、石灰化が著しく進んでいることから火葬されたものであると考えられる。扁平骨と管状骨が細片となって混じる。人骨が出土したことと礫の配置から墓坑と考えられる。

時期 土坑の形状や出土遺物から中世の墓坑とした。

S Z 5（第34図）

検出状況 B 4 グリッドにおいて検出した円形の大型土坑である。第6トレンチ内で確認した。関市教育委員会の試掘確認調査では長軸約1.9mの土坑としていたが、再検出の結果、長軸約1.3mとなった。また、この調査では、S Z 4と切り合っていたが、接する程度となった。土坑北部で中世陶器（73）が正位で出土し、大小様々な角礫でそれを囲む。中世陶器に南に接する部分で川原石が出土した。中世陶器は土坑底部に接することから、穴を掘った後、藏骨器として中世陶器を置き、穴を埋めたと考えられる。中世陶器中及びその周囲から、骨片が出土した。藏骨器の内と外の骨片に差は認められない。藏骨器外から出土した骨片は、藏骨器の破断面側だけに集中することから、藏骨器の破断によつて藏骨器内にあった骨片が散らばったと考えられる。出土した骨片は人骨である。骨片に有機質が残っておらず、石灰化が著しく進んでいることから火葬されたものであると考えられる。全体的に骨が大きく太いものが多いため、大人の骨である可能性が高い。扁平骨と管状骨が細片となって混じる。扁平骨は頭骨である可能性が考えられる。管状骨は脛骨、腓骨、尺骨などの部位が確認できる。上顎骨の破片もあり、中切歯あるいは犬歯の抜けた痕跡が認められる。人骨が出土したことから墓坑と考えられる。ただし、藏骨器1個体を埋納するための土坑にしては大きすぎるため、切り合う遺構を一つの遺構として掘削したか、あるいは平断面で藏骨器埋設のための掘形を確認できなかつた可能性が高い。土坑の壁面は斜めで、底部は平らである。

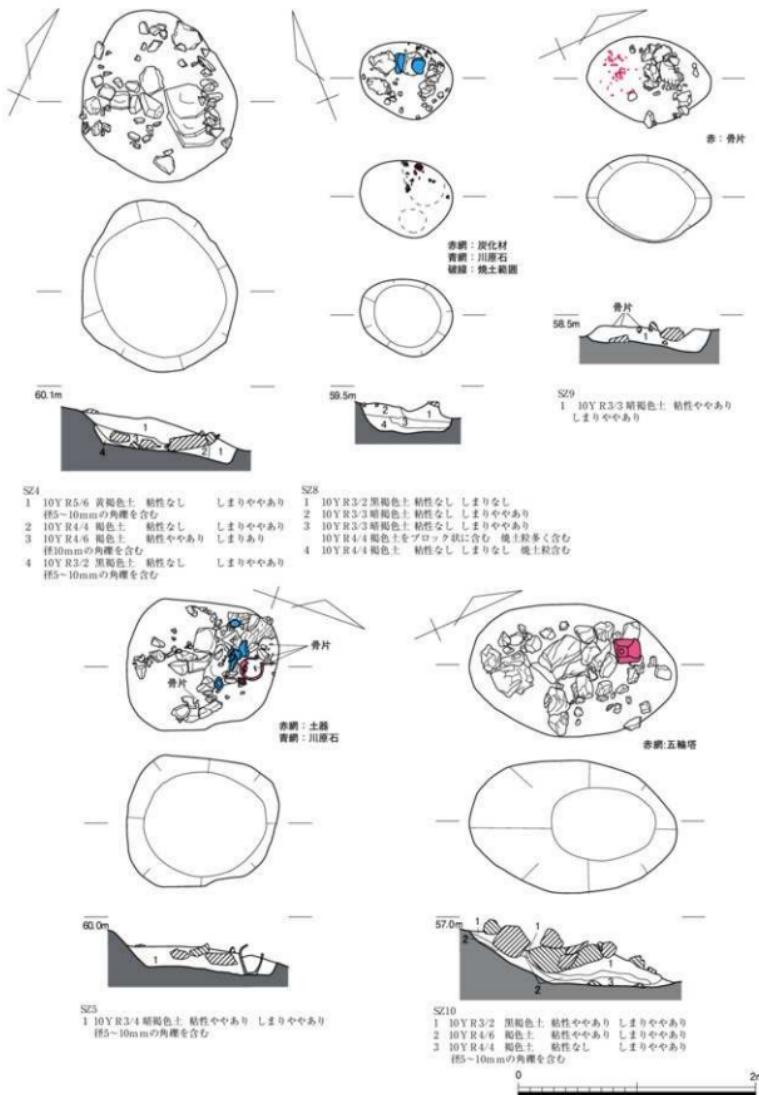
出土遺物（第37図）

73は古瀬戸の三耳壺である。内外面を回転ナデで調整し、外面に灰釉を施す。高台は四角い。口縁部から頸部が欠損する。底部に穿孔が1箇所認められる。古瀬戸中Ⅳ期（14世紀中頃）に比定できる。

時期 土坑の形状や出土遺物から中世の墓坑とした。

S Z 6（第35図）

検出状況 B 4～5 グリッドにおいて検出した長軸約2.4mの長楕円形の大型土坑である。土坑の壁面は斜めで、底部は二段構造となる。土坑中央部西寄りで礫の間から中世陶器（74）の破片が散在した状態で出土した。中世陶器は土坑底部から上層部まで認められ、土坑内部の広範囲から出土した。また、土坑全体から礫が出土した。礫の多くは角礫だが、中央部と北部で川原石が出土した。土坑底



第34図 S Z 4 · 5 · 8 · 9 · 10 (S= 1/40)

部から少量の炭が出土した。この炭は、土坑内に焼土が認められないことから、他の場所から混入したものもあるいは葬骨器に残っていたものの可能性が考えられる。斜面下方では平板な角礫が土留めをするように据えられていた。面的には一つの土坑として掘削したが、本来の墓坑は、土層断面図中の平板な礫以西のみの可能性がある。底部穿孔の可能性を持つ中世陶器が出土したことから墓坑と考えられる。

出土遺物（第37図）

74は古瀬戸の三耳壺である。外面を回転ナデで調整し、外面に灰釉を施す。底部外面は回転糸切り痕が確認できる。底部の割れ面に打ち欠いたような痕跡が確認でき、底部穿孔の可能性が考えられる。73と比較すると小型である。古瀬戸後Ⅳ期古段階（15世紀）に比定できる。

時期 土坑の形状や出土遺物から中世の墓坑とした。

S Z 7（第35図）

検出状況 E 8 グリッドにおいて検出した長軸約2mの隅丸方形の大型土坑である。検出面で礫が散在し、土坑南部で山茶碗2個体（75、76）が出土した。葬骨器が確認できないことから、副葬品として埋納されたものである可能性が考えられる。礫の多くは角礫だが、川原石が混じっていた。土坑下層中央部の径1mの範囲で焼土、炭、骨片が出土した。径20~30cmの礫を円形に配置し、その内部に焼土が残る。また、出土した骨片は人骨である。骨片に有機質が残っておらず、石炭化が著しく進んでいることから火葬されたものであると考えられる。扁平骨と管状骨が細片となって混じる。これらのことから、墓坑あるいは火葬跡と考えられる。

出土遺物（第37図）

75、76は北部系の山茶碗である。胎土は均質で、高台は小さく潰れ、底部内面中央部を指で撫でる。75の口縁部は直線的に聞く。76の口縁部は直線的に聞くが、端部がやや肥厚する。大畑大洞窯式に比定できる。

時期 土坑の形状や出土遺物から中世の墓坑あるいは火葬跡とした。

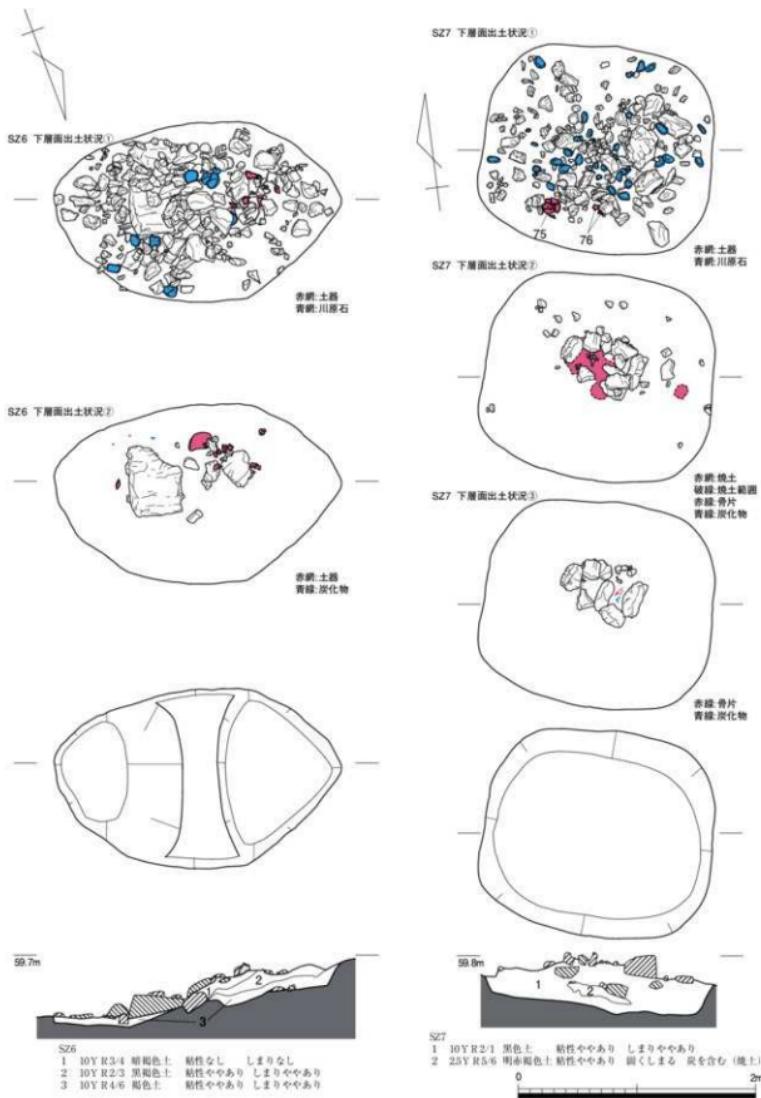
S Z 8（第34図）

検出状況 F 9 グリッドにおいて検出した径約0.8mの円形の土坑である。検出面で炭が出土した。下層に行くにしたがって量が増え、底部では焼土を確認した。壁面は斜めで、底部は平らである。第34図中の川原石直下に炭化材、焼土を確認していることから、径20cm前後の礫と川原石を組み合わせ、その下部で火を使用した可能性が考えられる。骨片は出土しなかった。火葬跡の可能性が高いと考えられる。

時期 土坑の形状や炭、焼土を確認したことから中世の火葬跡とした。

S Z 9（第34図）

検出状況 G 10 グリッドにおいて検出した長軸約1mの梢円形の大型土坑である。土坑南西部の検出面で、骨片がまとまって出土した。出土した礫はすべて角礫で、斜面下方に配置している。これは、埋納した人骨が流失しないように土留め的な役割として配置した可能性が考えられる。壁面は斜めで、底部は平らである。出土した骨片は人骨である。骨片に有機質が残っておらず、石炭化が著しく進んでいることから火葬されたものであると考えられる。骨は全体的に小さく細いものが多い。下顎の臼歯が確認でき、臼歯の根が短いことから10歳前後の幼児であると考えられる。人骨が出土したことか



第35図 S Z 6・7 (S=1/40)

ら墓坑と考えられる。

時期 土坑の形状や出土遺物から中世の墓坑とした。

S Z 10 (第34図)

検出状況 I 12グリッドにおいて検出した長軸約1.7mの楕円形の大型土坑である。検出面で五輪塔の火輪(78)が出土した。礫はすべて角礫である。完掘時、土坑底部から中世土師器の皿が出土した。

出土遺物 (第37図)

77は土師器の小皿である。外面は無調整で、不明瞭ではあるが指頭痕が残る。口縁端部が厚い。井川分類のC 2類、15世紀後半に比定できる(井川1997)。78は五輪塔の火輪である。石材は花崗岩で、自然面は長期間の風化のためか明瞭でない。

時期 土坑の形状や出土遺物から中世の墓坑とした。

第13表 小洞IV期の墓坑

遺構番号	検出グリッド	検出層位	遺構属性			大きさ(m)				切り合い関係			出土遺物	備考		
			堆積確認状況	平面形状	底面形状	上端		下端		深さ	<	>				
						長径	短径	長径	短径							
SZ4	B	3	II層 上面	c	IV	a	a	1.48	1.21	1.17	1.01	0.27		SK15B		
SZ5	B	4	II層 上面	a	IV	a	a	1.26	1.12	1.02	0.88	0.19		T, B		
SZ6	B	4~5	II層 上面	c	IV	c	c	2.45	1.52	2.30	1.34	0.24		SK14 T, C		
SZ7	E	8	II層 上面	a	IV	b	b	1.91	1.76	1.71	1.34	0.42		Y, B, C 火葬跡?		
SZ8	F	9	II層 上面	d	IV	a	a	0.80	0.64	0.58	0.52	0.23		B, C 火葬跡		
SZ9	G	10	II層 上面	a	IV	a	a	1.04	0.72	0.81	0.64	0.20		B, C		
SZ10	I	12	II層 上面	c	IV	a	a	1.76	1.12	0.74	0.53	0.26		H, S		

(2) 土坑

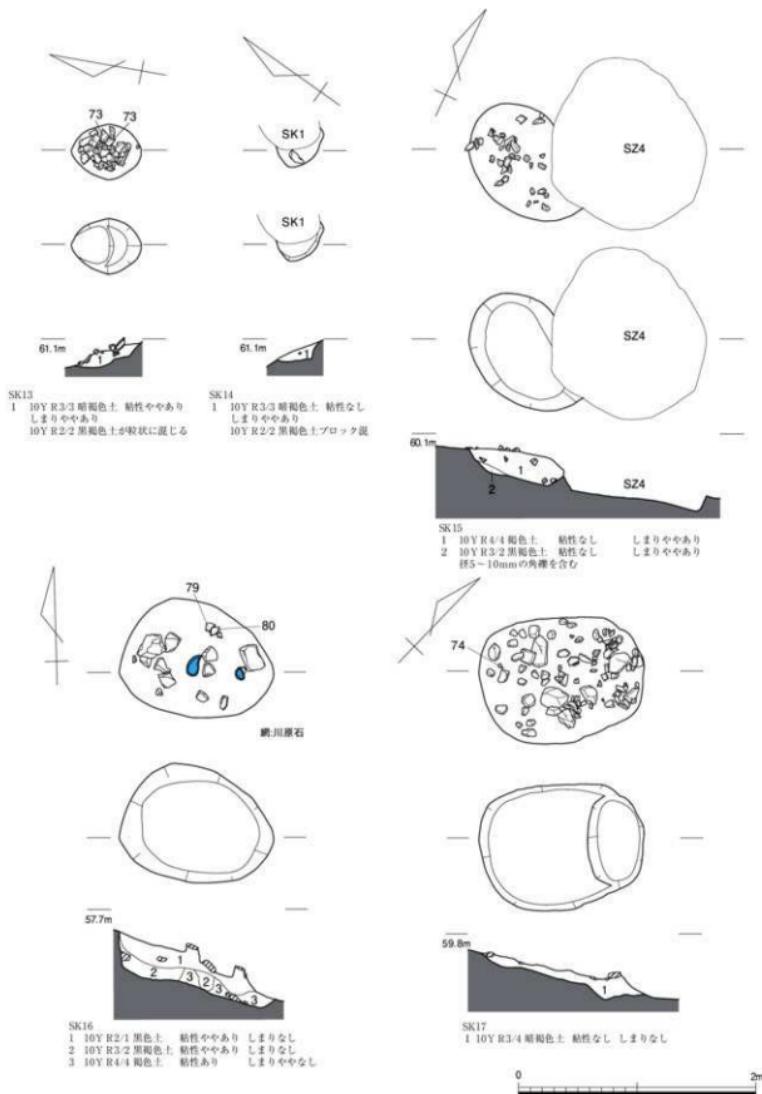
S K 13 (第36図)

検出状況 C 3グリッドにおいて検出した土坑である。第6トレンチ内で確認した。関市教育委員会の試掘確認調査では長軸約0.6mの土坑としていたが、再検出の結果、長軸約0.5mとなり平面形もやや変わった。また、この調査ではSK14に切られていたが、SK14を切ると判断した。検出面の土坑中央部に角礫がまとまって出土し、その東部から中世陶器2点が出土した。この中世陶器は関市教育委員会の試掘確認調査で出土した位置よりも南南西に約5cmずれているため、原位置を保っていない。礫は検出面と埋土上層ではまとまって出土したが、埋土下層には含まれていなかった。中世陶器はSZ5出土遺物(73)と接合した。SK13はSZ5よりも斜面上方に位置すること、SZ5出土遺物はほぼ完形であることから、この陶器は流れ込みではなく、意図的に置かれた可能性がある。骨片は出土しなかつたため性格は不明としたが、蔵骨器の破片2点を集石部に意図的に置いていることから、墓坑の可能性も考えられる。

時期 出土遺物から、小洞IV期(中世)の土坑としたが、前述のとおり、中世の墓坑の可能性もある。

S K 14 (第36図)

検出状況 C 3グリッドにおいて検出した長軸約0.4mの土坑である。第6トレンチ内で確認した。関市教育委員会の試掘確認調査ではSK13を切っていたが、SK13に切られると判断した。斜面上方の壁は残るが、斜面下方は壁が流失している。底面は平らである。性格は不明である。



第36図 小洞IV期の土坑 (S=1/40)

時期 SK13に切られることから、小洞Ⅳ期（中世）以前の土坑とした。

S K15（第36図）

検出状況 B 3 グリッドにおいて検出した長軸約1.2mの土坑である。中世の墓坑SZ4に切られる。径10cm前後的小砾が散漫とした状態で出土した。検出面でも埋土中でも散在することから、意図的に配置されたとは考えにくい。底部は平坦で北東にやや下る。性格は不明である。

時期 SZ5に切られることから、小洞Ⅳ期（中世）以前の土坑とした。

S K16（第36図）

検出状況 J 12 グリッドにおいて検出した長軸約1.3mの大型土坑である。壁面は開く。底面は平らで、北東に向かってやや下る。埋土中に砾が散在し、角砾に混じって川原石も数点出土した。川原石は、土坑埋土最上部で確認できる。このことから、SZ8のような火葬跡も想定されたが、焼土や炭化材は出土しなかった。また、中世陶器2点（79、80）が出土した。胎土、焼成、施釉などから同一個体である可能性が高いと考えられる。性格は不明であるが、川原石が出土したことから火葬跡の可能性も考えられる。

出土遺物（第37図）

79と80は中世陶器の壺の体部片である。外面に釉薬が施される。古瀬戸前Ⅰ期（12世紀末～13世紀初頭）の可能性がある。

時期 出土遺物から、小洞Ⅳ期（中世）の土坑としたが、前述のとおり火葬跡の可能性もある。

S K17（第36図）

検出状況 B 4 グリッドにおいて検出した長軸約1.5mの大型土坑である。底部は斜面下方に向かって下り、浅い。窪地であった可能性も考えられる。大小様々な角砾が散在し、土坑南西部から中世陶器1点が出土した。この中世陶器はSZ6出土遺物（74）と接合した。SK16とSZ6との距離は約0.5mで、SZ6より斜面下方に位置することから、土砂の流入とともに混じり込んだ可能性が高いと考えられる。性格は不明である。

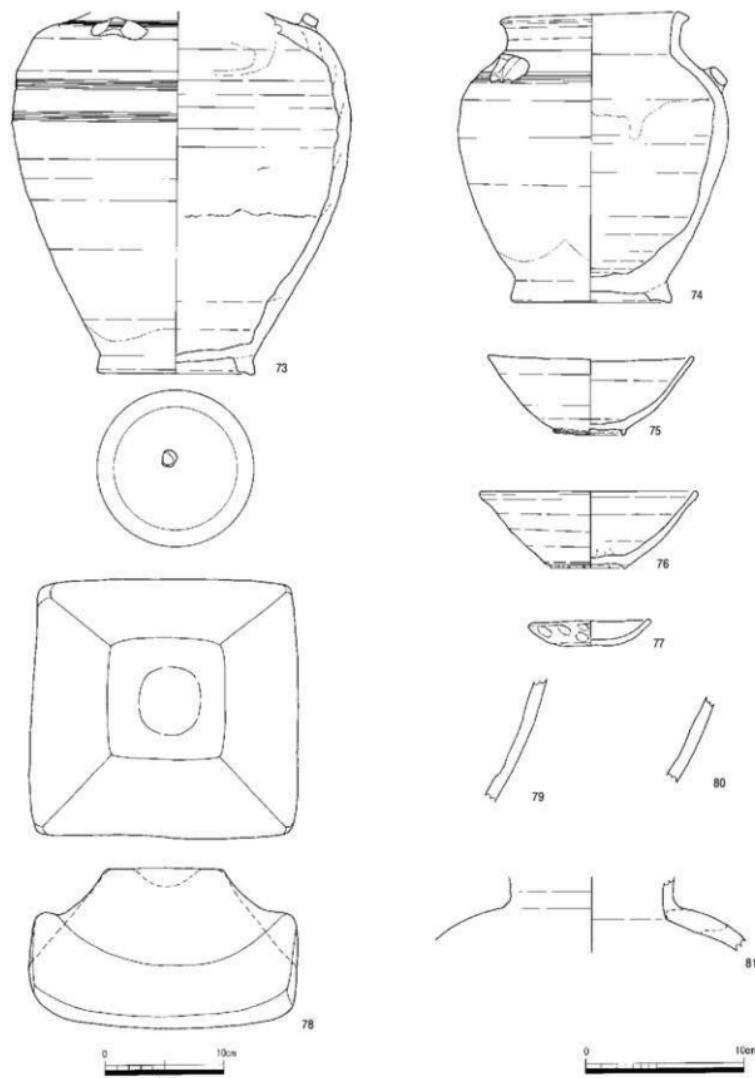
時期 出土遺物から、小洞Ⅳ期（中世）以降の土坑とした。

第14表 小洞Ⅳ期の土坑

遺構番号	検出グリッド		検出層位	遺構属性				大きさ(m)				切り合い関係			出土遺物	備考	
	南北	東西		堆積状況	断面形状	平面形状	底面形状	上端		下端		深さ	<	>			
								長径	短径	長径	短径						
SK13	C	3	古墳盛土上面	a	I	a	a	0.60	0.48	0.35	0.33	0.12			SK14	T	
SK14	C	3	古墳盛土上面	a	IV	c	c	0.42	(0.22)	0.36	(0.16)	0.09	SK13				
SK15	B	3	II層上面	d	IV	c	c	1.16	(0.78)	0.86	0.58	0.24	SZ4				
SK16	J	12	II層上面	e	IV	a	a	1.28	1.02	0.99	0.76	0.31			T		
SK17	B	4	II層上面	a	I	a	a	1.38	1.05	1.22	0.94	0.17			T		

（3）遺物包含層出土遺物（第37図）

81は常滑三筋壺の頸部から体上部でI 12 グリッドから出土した。体上部の肩は張り、口頸部はほぼ直立する。外面に自然釉が付着する。絵筒の内容器や骨壺として利用されるものである。12世紀後半のものである。



第37図 小洞IV期の遺物 ($S = 1/3, 1/4$)

5 時期不明の遺構

切り合い関係や出土遺物がなく、時期が判断できなかった遺構は土坑38基がある。

(1) 土坑（第38～43図）

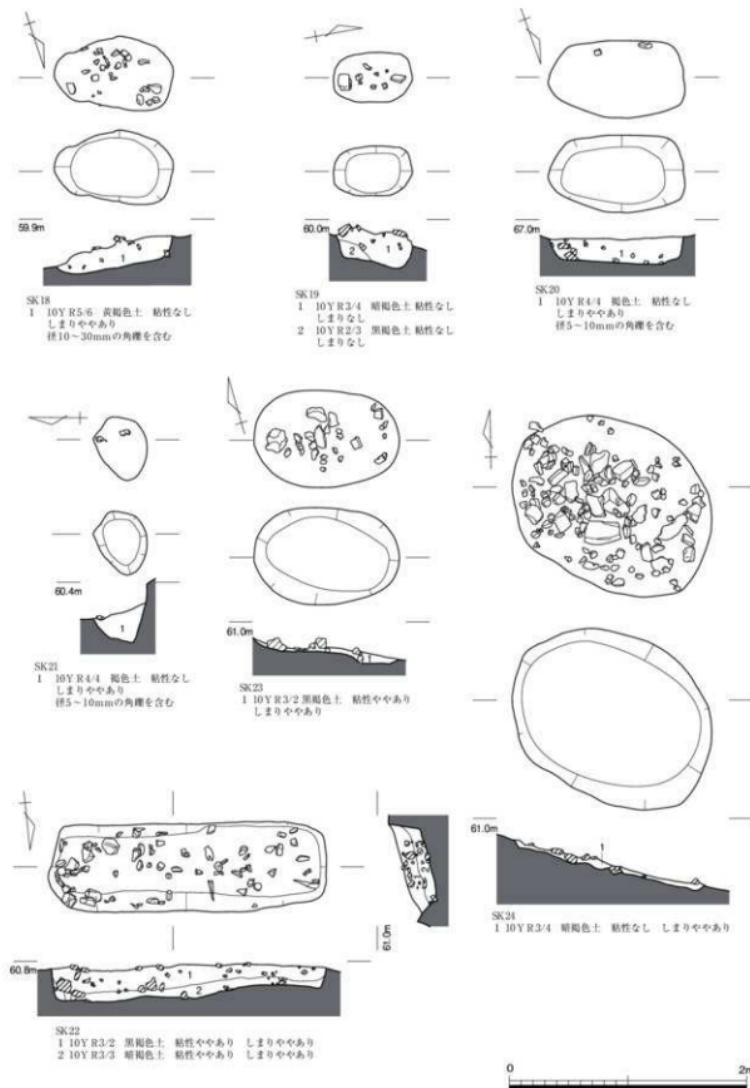
土坑は、平面形は全体的に小さいものが多い。大きい土坑には礫が混じるが、検出面や埋土に浮遊する。断面形は底部が水平に近いものと斜面に対し平行するものとに分けられる。前者は深いものが多く、後者は浅いものが多い。浅く、底部が斜面に平行するものは礫の崩落などできた窪みに土砂が流れ込んだ痕跡の可能性もある。以下、時期不明の土坑の中でも特徴的なものについて記述する。

S K22（第38図）

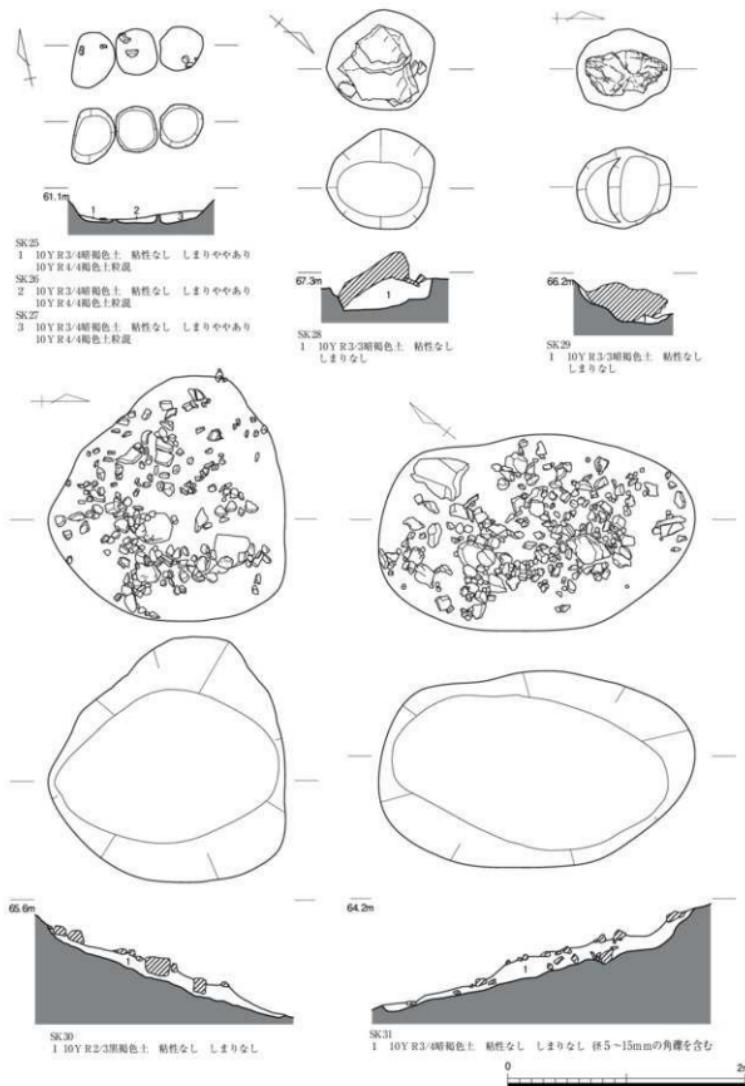
検出状況 D 6 グリッドにおいて検出した長軸約2.3mの方形の大型土坑である。方形周溝幕の内部に位置することから主体部の可能性が考えられたが、Ⅱ層上面で検出したこと、墳丘が存在していたならば、主体部としては深すぎることなどから主体部ではないと判断した。埋土中に角礫が散在する。底部はほぼ平らである。性格は不明である。

S K50（第43図）

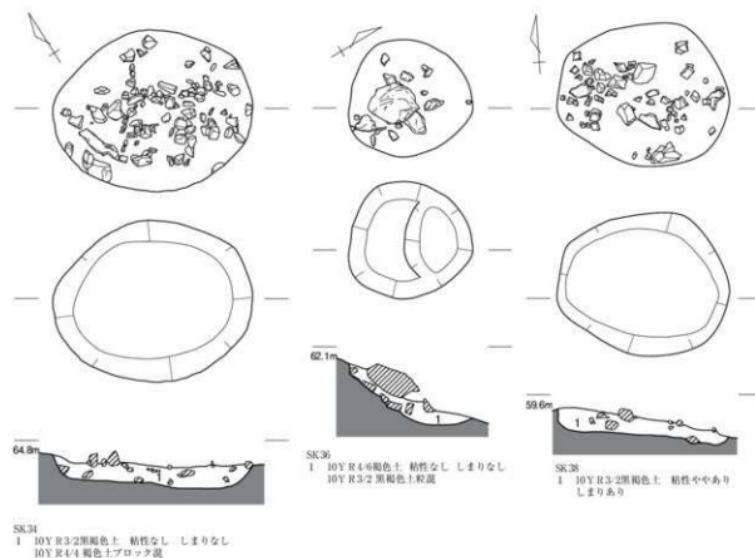
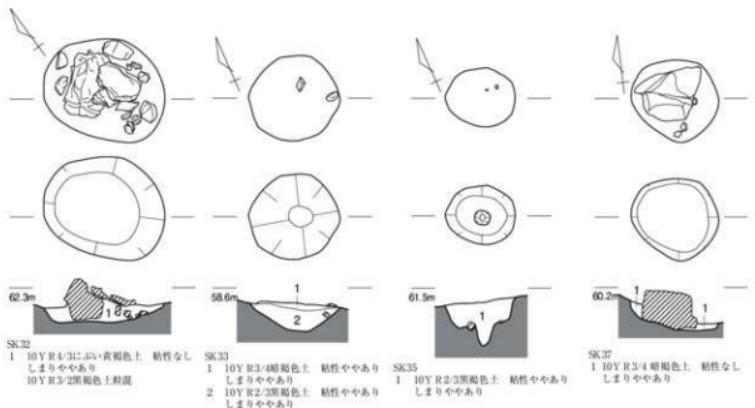
検出状況 G 4 グリッドにおいて検出した長軸約1.8m、深さ約0.4mの方形の大型土坑である。扁平な礫が検出面北西部辺に沿うように立って出土した。立石の掘形は確認できなかったことから、埋没途中で礫を据えた可能性が考えられる。出土遺物もなく時期性格とともに不明であるが、形状から墓坑の可能性も考えられる。



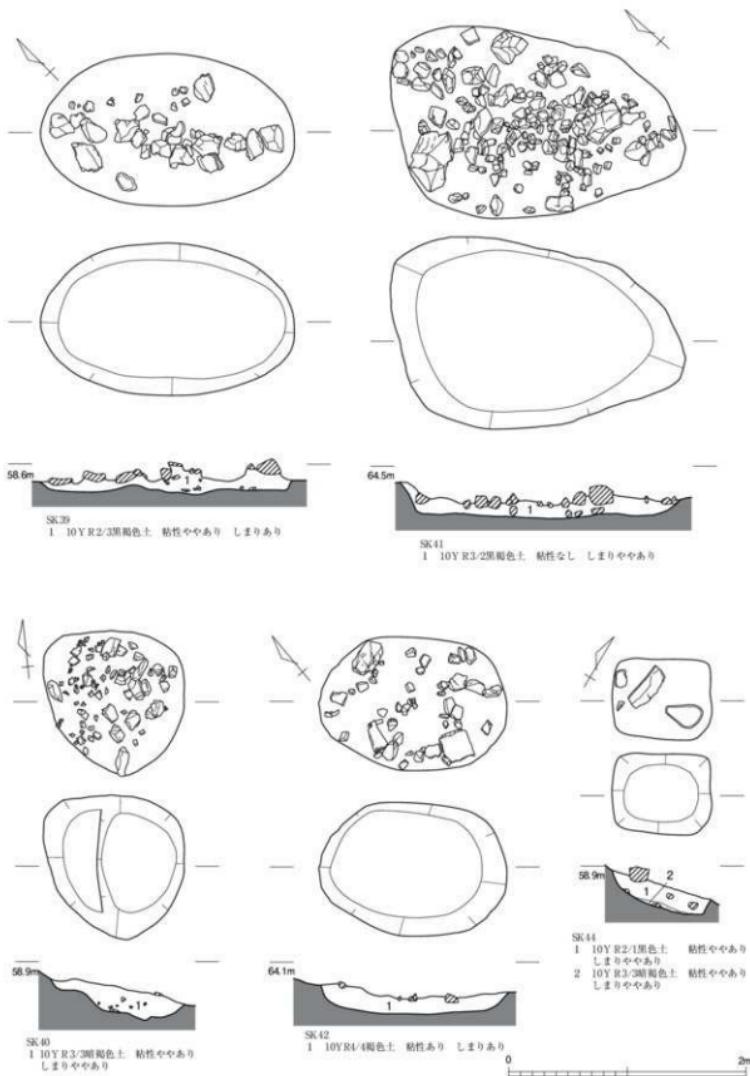
第38図 時期不明の土坑① (S= 1 / 40)



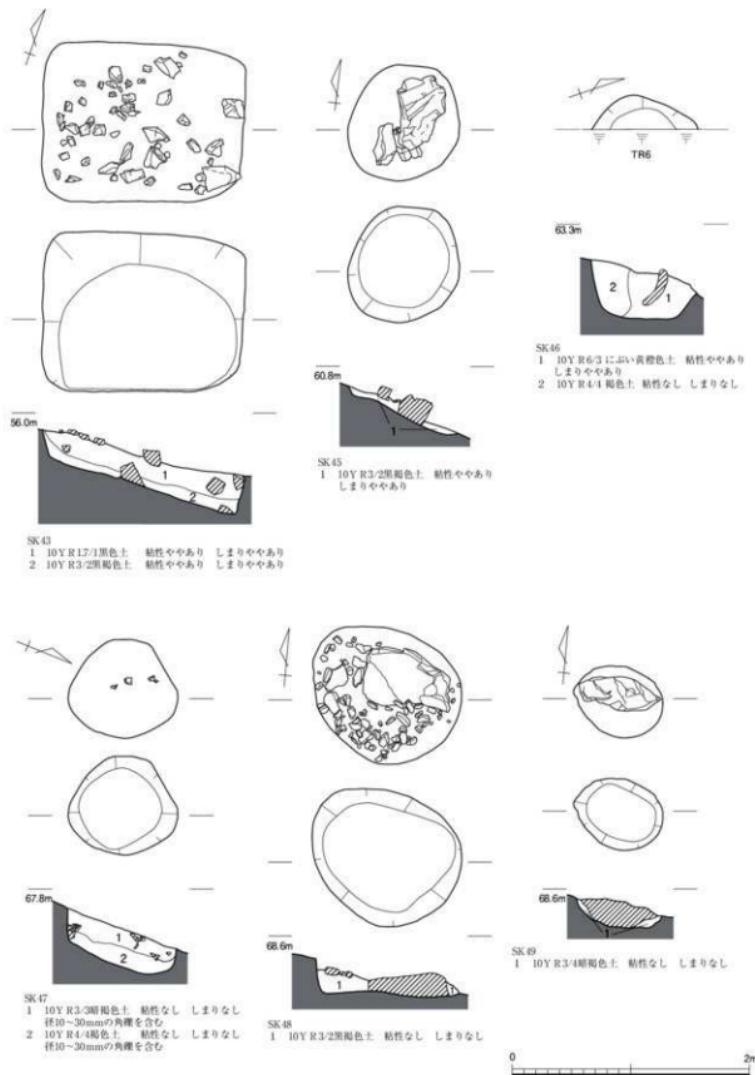
第39図 時期不明の土坑② (S= 1 / 40)



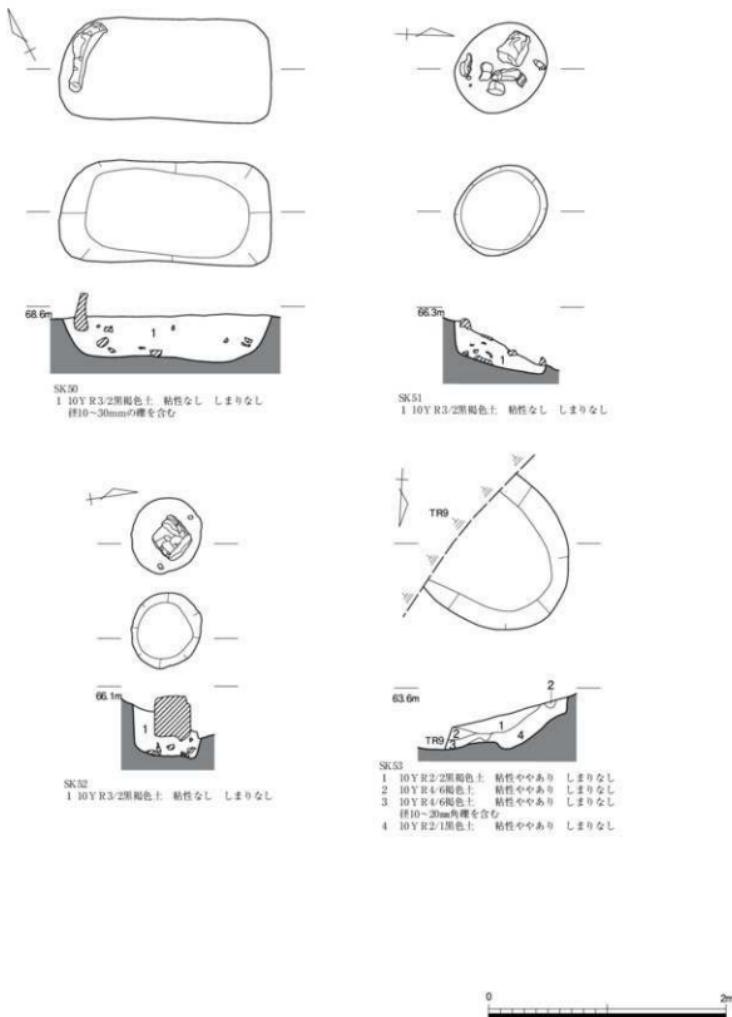
第40図 時期不明の土坑③ (S=1/40)



第41図 時期不明の土坑④ (S=1/40)



第42図 時期不明の土坑⑤ (S=1/40)



第43図 時期不明の土坑⑥ (S=1 / 40)

第15表 時期不明の土坑

遺構番号	検出グリッド		検出層位	遺構属性				大きさ (m)				切り合いまき			出土遺物	備考	
				堆積状況	断面形状	平面形状	底面形状	上端		下端		深さ	<		>		
	南北	東西						長径	短径	長径	短径		<		>		
SK18	B	5	II層上面	a	I	a	a	1.01	0.62	0.74	0.49	0.25					なし
SK19	B	5	II層上面	d	IV	a	a	0.66	0.41	0.48	0.34	0.30					なし
SK20	E	1	II層上面	a	IV	a	a	1.12	0.64	0.86	0.48	0.22					なし
SK21	B	3	II層上面	a	III	a	a	0.55	0.41	0.40	0.28	0.27					なし
SK22	D	6	II層上面	b	II	b	b	2.34	0.74	2.22	0.58	0.28					なし
SK23	D	6	III層上面	a	I	a	a	1.22	0.82	1.02	0.60	0.09					なし
SK24	D	5~6	III層上面	a	IV	a	a	1.80	1.38	1.54	1.10	0.08					なし
SK25	B	3	古墳盛土上面	a	IV	a	a	0.42	0.36	0.36	0.28	0.03					なし
SK26	B	3	古墳盛土上面	a	II	a	a	0.38	0.34	0.25	0.27	0.05					なし
SK27	B	4	古墳盛土上面	a	IV	a	a	0.41	0.34	0.32	0.27	0.08					なし
SK28	G	5	Ⅲ層上面	a	IV	a	a	0.87	0.84	0.50	0.62	0.25					なし
SK29	G	5	Ⅲ層上面	a	I	a	a	0.76	0.69	0.68	0.55	0.06					なし
SK30	G	6	Ⅲ層上面	a	IV	a	a	2.08	2.01	1.30	1.17	0.14					なし
SK31	F	6	Ⅲ層上面	a	IV	a	a	2.66	1.65	2.16	1.36	0.18					なし
SK32	F	7	Ⅲ層上面	a	I	a	a	1.08	0.85	0.73	0.59	0.19					なし
SK33	F	9	Ⅲ層上面	c	IV	a	a	0.76	0.72	0.21	0.18	0.23					なし
SK34	G	6	Ⅲ層上面	a	IV	a	a	1.68	1.36	1.36	0.99	0.18					なし
SK35	C	4	Ⅲ層上面	a	VI	a	a	0.58	0.48	0.42	0.32	0.36					なし
SK36	E	6	Ⅲ層上面	a	I	a	a	1.03	1.01	0.71	0.70	0.18					なし
SK37	G	9	Ⅲ層上面	a	I	a	a	0.74	0.70	0.59	0.58	0.12					なし
SK38	G	9	Ⅲ層上面	a	II	a	a	1.46	1.20	1.14	0.91	0.20					なし
SK39	G	10	Ⅲ層上面	a	IV	a	a	2.14	1.28	1.92	1.00	0.22		SZ6			なし
SK40	F	10	Ⅲ層上面	a	I	a	a	1.29	1.14	0.99	0.92	0.23					なし
SK41	G	7	Ⅲ層上面	a	IV	a	a	2.59	1.60	2.02	1.40	0.16					なし
SK42	G	7	Ⅲ層上面	a	I	a	a	1.58	1.13	1.28	0.89	0.19					なし
SK43	J	13	Ⅲ層上面	b	II	b	a	1.68	1.34	1.49	1.07	0.34					なし
SK44	K	12	Ⅲ層上面	b	IV	b	a	0.83	0.67	0.63	0.49	0.19					なし
SK45	K	11	Ⅲ層上面	a	IV	a	a	1.03	0.91	0.90	0.73	0.10					なし
SK46	C	3	古墳盛土上面	d	IV	c	c	(0.42)	(0.12)	(0.28)	(0.05)	0.21		SZ2			なし
SK47	F	3	Ⅲ層上面	b	II	a	a	0.93	0.83	0.70	0.68	0.31					なし
SK48	G	3	Ⅲ層上面	a	II	a	a	1.32	1.09	0.99	0.90	0.19					なし
SK49	G	3	Ⅲ層上面	a	I	a	a	0.78	0.57	0.61	0.41	0.10					なし
SK50	G	4	Ⅲ層上面	a	IV	b	b	1.79	0.87	1.37	0.69	0.41					墓坑の可能性有
SK51	F	4	Ⅲ層上面	a	II	a	a	0.81	0.69	0.71	0.62	0.28					なし
SK52	F	5	Ⅲ層上面	a	II	a	a	0.65	0.53	0.48	0.46	0.36					なし
SK53	H	8	Ⅲ層上面	c	I	c	c	1.27	(1.01)	0.96	(0.86)	0.29					なし

第16表 土器観察表(1)

留置 No.	種別	器種	分類	地区 遺構	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	最大様 (cm)	口縁部 残在半 径1/2	胎土	焼成		成形・調整		備考	留 置 No.	固 定 No.			
												色調		成形・調整							
												内面	外面	外面	内面						
1	土師器	甕	-	1号墳	1-2	(133)	(70)	165	(165)	22	黒	直径1mm以下 の長石を少し含む	良	10YR7/3	10YR7/2	口縁部暗土テ 体部上半側方向 体部下半側方向 外観炭化物付 着	15	9			
2	土師器	甕	-	1号墳	1	(138)	-	-	-	7	黒	直径1mm以下 の長石を少し含む 其の長石、石乳、赤 母を多く含む	良	5YR7/8	5YR7/8	口縁部向右ケ リ	横ナメ	15	9		
3	須恵器	壺环 蓋	-	1号墳 SDI C2	1 2	(146)	-	37	(146)	2	黒	直径1mm以下 の長石を含む	良	SY5/1	SY5/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	15	9		
11	須恵器	壺环	-	SE3	1	-	-	-	-	-	黒	直径1mm以下 の長石をわざかに 含む	良	SY6/1	SY6/1	大井部一部ハケ	ナメ	16	9		
25	須恵器	壺环 蓋	-	SD1 1号墳	1	143	-	47	143	7.5	黒	直径5mm以 下の長石を多く含む	良	N6/0	N6/0	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	17	9		
26	須恵器	壺环 蓋	-	SD1	1	(142)	-	42	(143)	1	黒	直径1mm以下 の長石をわざかに 含む	普通	7SY6/1	7SY6/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	17	9		
27	須恵器	壺环 蓋	-	SD1	1	142	*	-	-	1	黒	直径1mm以下 の長石をわざかに 含む	普通	SYR5/3	SY6/2	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	17	9		
28	須恵器	壺环	BII	SD1	2	115	93	99	141	7.5	黒	直徑2mm以下 の長石をわざかに 含む	良	2SY6/1	10YR7/1	ナメ	ナメ	透孔1段3方 向	17	9	
29	須恵器	壺环	BII	SD1 1号墳	1 2	(120)	95	105	(140)	1	黒	直徑5mm以 下の長石をわざかに 含む	良	7SY5/1	7SY5/1	ナメ	ナメ	透孔1段3方 向	17	10	
30	須恵器	壺环	BII	SD1	1	(120)	95	110	143	5.3	黒	直徑5mm以 下の長石を含む	良	N5/0	N6/0	ナメ	ナメ	透孔1段3方 向	17	10	
31	須恵器	壺环	BII	SDH 1号墳	1 2	-	(99)	-	(124)	-	黒	直徑2mm以下 の長石をわざかに 含む	普通	SYR6/3	SY7/1	ナメ	ナメ	透孔1段3方 向	17	10	
32	須恵器	壺环	-	SK1	1	136	-	47	137	4.5	黒	直徑0.5mm以 下の長石をわざかに 含む	不良	10YR8/1	10YR8/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	18	10		
33	須恵器	壺环	A	SK1	1	124	128	146	132	12	黒	直徑1mm以下 の長石をわざかに 含む	良	2SY6/1	2SY6/1	ナメ	ナメ	透孔2段3方 向	18	10	
34	須恵器	壺环	B2	SK1	1	128	108	102	149	8.6	黒	直徑2mm以下 の長石をわざかに 含む	不良	10YR8/1	10YR8/1	ナメ	ナメ	18	10		
35	須恵器	甕	-	SK1	1	7.8	122	27.7	14.0	12	黒	直徑1mm以下 の長石をわざかに 含む	良	ZSY7/1	2SY7/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	透孔1段3方 向	18	10	
36	須恵器	甕	-	SK1	1	35	31	62	7.0	12	黒	直徑1mm以下 の長石をわざかに 含む	良	SY6/1	SY6/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	18	11		
37	須恵器	甕	-	SK1	1	34	15	5.6	6.5	11	黒	直徑3mm以下 の長石をわざかに 含む	良	2SY6/1	2SY6/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	18	11		
38	須恵器	壺环 蓋	-	SK2	1	132	-	57	132	10.3	黒	直徑1mm以下 の長石をわざかに 含む	良	ZSY7/1	2SY7/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	19	11		
39	須恵器	壺环 蓋	-	SK2	1	132	-	54	134	11	黒	直徑1.5mm以 下の長石をわざかに 含む	良	2SY8/1	2SY8/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	19	11		
40	須恵器	壺环 蓋	-	SK2	1	131	-	46	133	11.7	黒	直徑0.5mm以 下の長石をわざかに 含む	良	10YR7/1	10YR7/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	19	11		
41	須恵器	壺环	-	SK2	1	134	-	51	135	7.5	黒	直徑4mm以下 の長石をわざかに 含む	普通	10YR8/1	10YR8/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	19	11		
42	須恵器	壺身	-	SK2	1	116	4.4	4.6	14.1	12	黒	直徑1.5mm以 下の長石をわざかに 含む	良	2SY8/1	2SY8/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	透孔2段3方 向	19	12	
43	須恵器	壺环	A	SK2 1号墳	1	116	120	15.9	12.6	11.3	黒	直徑1mm以下 の長石をわざかに 含む	良	2SY6/1	2SY6/1	ナメ	ナメ	透孔2段3方 向	19	11	
44	須恵器	壺环	B2	SK2	1	113	11.0	9.9	13.5	11.8	黒	直徑3mm以下 の長石をわざかに 含む	良	2SY8/1	2SY8/1	ナメ	ナメ	19	12		
45	須恵器	壺环	E2	SK2	1	116	100	9.2	13.7	11	黒	直徑2mm以下 の長石をわざかに 含む	良	2SY8/2	2SY8/2	ナメ	ナメ	19	12		
46	須恵器	壺环	E2	SK2	1	127	10.3	9.2	15.0	6	黒	直徑1mm以下 の長石を少し含む	不良	10YR8/2	10YR8/2	ナメ	ナメ	19	12		
47	須恵器	壺环	E2	SK2	1	(121)	10.5	8.9	15.0	1.8	黒	直徑1mm以下 の長石をわざかに 含む	不良	10YR8/2	10YR8/2	ナメ	ナメ	19	12		
48	須恵器	壺环	E2	SK2	1	127	10.3	9.2	15.0	6	黒	直徑1mm以下 の長石を少し含む	不良	10YR8/2	10YR8/2	ナメ	ナメ	19	12		
49	須恵器	甕	-	SK2	1	37	17	3.9	7.2	11.2	黒	直徑1mm以下 の長石を少し含む	良	ZSY7/1	2SY7/1	大井部ケズリ 横ナメ	ナメ	19	13		

第17表 土器観察表(2)

器 種 No.	種別	形相	分 類	地 理 遺 構	層 段	口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 さ (cm)	最 大 様 式 x/12	口縁部 底存部 底	胎 土	色調		成形・調整		備 考	層 段 No.	回 数 No.
												内面	外面	外面	内面			
50 細底器 直	-	SK2	1	3.8	2.4	7.0	7.2	12	12	直 径0.5mm以 下の長石をわずかに 含む	良	2SY6/1	2SY6/1	底カズリ 底ナガ	ナデ		19	13
53 土師器 直	-	SI1	1	11.5	-	-	-	11	11	やや粗、直徑2mm以 下の長石を多く含む	普通	5YR7/6	5YR7/6	口縁部横ナゲ 外縁部方向板ナ 底粗ミガキ			23	13
54 土師器 直	-	SI1	1	-	(3.6)	-	-	-	直 径2mm以下 の長石を少し含む	普通	7.5YR5/4	7.5YR6/6	調整不明	調整不明		23	13	
55 土師器 直	-	SI1	1	-	-	-	-	-	やや粗、直徑2mm以 下の長石をわずかに 含む	普通	7.5YR6/6	7.5YR6/7	調整不明	調整不明		23	13	
56 土師器 直	-	SD3	1	20.2	(6.5)	25.1	(31.0)	6.9	直 径3mm以下 の長石を少く含む	良	10YR7/4	10YR7/4	口縁部横ナゲ 底粗斜面の方向ハ 体底下平ミガキ	赤彩		26	13	
57 土師器 直	-	SD3	1	12.9	3.9	25.9	143	7.5	直 径4mm以下 の長石、石英、ホ ウロバイトを多く 含む	良	5YR4/6	5YR4/6	横ナタ後端ミガ キ	口縁部横ナゲ後 端ミガキ	目註文6段	26	13	
58 土師器 番環	-	SD3	1	(27.9)	-	-	-	1	直 径2mm以下 の長石をわずかに 含む	良	10YR7/4	10YR7/4	横ナタ後端上部 ミガキ	横ナタ後端ミガ キ		26	14	
59 土師器 番環	-	SD3	1	-	-	-	-	-	直 径2mm以下 の長石、赤褐色化 した粒を少く含む	良	7.5YR7/4	7.5YR7/4	横ナデ	横ナデ	透孔1段4方 向	26	14	
60 土師器 番環	-	SD3	1	(14.4)	-	-	-	1.2	直 径2mm以下 の長石をわずかに 含む	良	2.5YR7/6	2.5YR7/6	横ナタ後端ミガ キ	横ナタ後端ミガ キ		26	14	
61 土師器 番環	-	SD6	1	(23.8)	-	-	-	-	やや粗、直徑3mm 以下の長石、石英 を多く含む	良	10YR6/3	7.5YR7/8	調整不明	調整不明		32	14	
62 土師器 曲	-	SI2	1	(14.3)	-	-	-	1	やや粗、直徑2mm 以下の長石、石英 を多く含む	良	7.5YR7/8	7.5YR7/8	調整不明	口縁部横ナゲ		32	14	
63 土師器 曲	-	SI2	2	-	(7.0)	-	-	-	やや粗、直 径3mm 以下の長石、石英 を多く含む	良	7.5YR7/6	7.5YR8/6	調整不明	調整不明		32	14	
64 土師器 曲	-	SK3	1	1	-	(4.4)	-	-	やや粗、直 径3mm 以下の長石、石英 を多く含む	良	2.5YR7/4	10R17/1	横ナゲ	横方向板ナゲ	赤彩	32	14	
65 土師器 曲	-	SK4	1	(15.5)	5.0	26.3	23.7	5	やや粗、直 径5mm 以下の長石を多く 含む	普通	10YR7/4	7.5YR7/8	口縁部調整不 明	口縁部横方向板 ナゲ	赤彩	32	14	
66 土師器 曲	-	SK5	1	1	(18.8)	-	-	5	直 径1.5mm以下 の長石をわずかに 含む	良	10YR5/3	10YR6/3	口縁部横ナゲ 底粗板ハケ	横ナデ		32	14	
67 土師器 番環	-	SK7	1	-	-	-	-	-	直 径0.5mm以 下の長石、石英 をわずかに含む	良	5YR7/6	7.5YR7/4	調整不明	透孔あり		32	14	
68 土師器 番環	-	SK8	1	1	(12.2)	-	-	-	直 径2mm以下 の長石、石英を少 し含む	良	10YR8/2	10YR8/2	調整不明	横ナデ	透孔1段4方 向	32	14	
69 土師器 路	-	SK9	2	-	(2.8)	-	-	-	直 径1mm以下 の長石をわずかに 含む	良	10YR6/2	7.5YR6/6	調整不明	調整不明		32	14	
70 土師器 曲	-	G11	1	-	-	-	-	-	直 径2mm以下 の長石、石英化 した粒を多く含む	良	10YR5/3	7.5YR7/6	調整不明	調整不明		32	14	
71 土師器 曲	-	I9	II	-	4.8	-	-	-	直 径2mm以下 の長石、石英化 した粒を多く含む	良	10YR6/7	2.5YR7/4	調整不明	調整不明		32	14	
72 細底器 番環	-	SK11	1	(12.0)	-	-	-	1	直 径2mm以下 の長石を少く含む	良	2.5YR1/4	5Y5/1	大脚部ケズリ 底ナゲ	ナデ		33	14	
73 中世 陶器	-	SK13	1	1	-	9.8	-	21.4	-	直 径1.5mm以下 の長石をわずかに 含む	良	10YR6/3	2.5YR7/4 2.5YR7/3	ナゲ	古瀬川 底部穿孔		37	15
74 中世 陶器	-	SK26	1-2	2	10.3	9.7	18	16.9	5.8	直 径2mm以下 の長石をわずかに 含む	良	5Y6/4	5Y6/4	ナゲ	古瀬川 底部穿孔		37	15
75 山系瓶 瓶	-	SZ7	2	12.8	4.3	5.0	13.0	12	直 径0.5mm以 下の長石をわずかに 含む	良	7.5YR1	10YR1/	ナゲ 回転串切削	ナゲ 底部削ナゲ		37	15	
76 山系瓶 瓶	-	SZ7	1-2	13.4	4.7	4.85	13.7	9	直 径1mm以下 の長石をわずかに 含む	良	2.5Y7/1	2.5Y8/1	ナゲ 回転串切削	ナゲ 底部削ナゲ		37	15	
77 土師器 瓶	-	SZ10	2	7.3	2.9	1.5	7.3	12	直 径0.5mm以 下の長石をわずかに 含む	良	10YR8/3	10YR8/3	胎胚後横ナゲ	ナデ		37	15	
79 中世 陶器	-	SK16	1	-	-	-	-	-	直 径0.5mm以 下の長石をわずかに 含む	良	2.5Y7/1	2.5Y6/2	ナゲ	ナデ	古瀬川	37	15	
80 中世 陶器	-	SK16	1	-	-	-	-	-	直 径0.5mm以 下の長石をわずかに 含む	良	2.5Y7/1	2.5Y6/2	ナゲ	ナデ	古瀬川	37	15	
81 中世 陶器	-	H12	II	-	-	-	-	-	直 径1mm以下 の長石、石英を少 し含む	良	5Y5/2	5Y5/2	ナゲ	電鑄		37	15	

第18表 石器、石製品一覧表

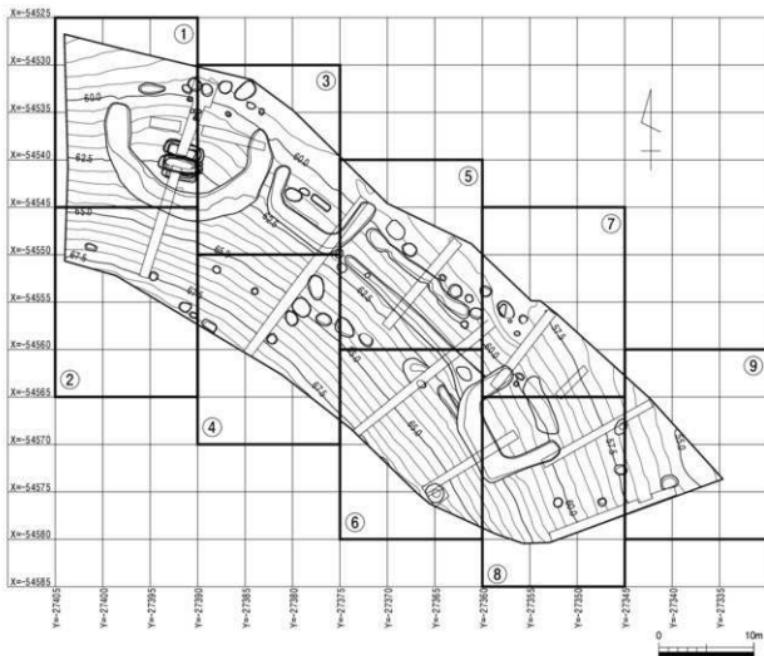
番号 No.	種別 Category	取上 番号 No.	地区 遺構 Category	局位 Position	大きさ Dimensions				石材 Material	備考 Remarks	種類 No. No.
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	質量 (g)			
51	石鏃	121	SZ3	2	(30.0)	(16.0)	5.0	18	チート	両側縁に突起	20/16
52	打製石斧	53	19号 盛土	1	(102.0)	53.0	20.0	117.5	漁鹿紋岩	刃部欠損、自然面残る	20/16
78	五輪塔(火輪)	107	SZ10	1	224.0	219.0	135.0	107000	花崗岩		37/16

第19表 鉄鎌一覧表

番号 No.	種別 Category	取上 番号 No.	地区 遺構 Category	局位 Position	大きさ Dimensions								備考 Remarks	種類 No. No.					
					全長 (cm)	刃身長 (cm)	刃身幅 (cm)	柄厚 (mm)	頭部長 (cm)	頭部幅 (cm)	頭部厚 (mm)	頭部幅 (cm)	頭部厚 (mm)	質量 (g)					
4	長頭鎌	A	602	SZ1	2	(13.7)	19	1.2	0.5	7.9	1.1	0.8	0.8	0.7	2.8	0.9	0.8	10.0	15/16
5	長頭鎌	A	603	SZ1	2	(11.4)	12	1.2	0.5	1.0	0.7	-	-	-	-	-	-	6.9	15/16
6	長頭鎌	B	604	SZ1	2	(19.9)	16	1.0	0.4	8.8	0.6	0.6	0.8	0.6	(4.5)	0.8	0.8	12.9	15/16
7	長頭鎌	B	606	SZ1	2	(6.0)	15	1.1	0.4	(4.5)	0.8	0.9	-	-	-	-	-	4.0	片刃長い、 頭部欠損
8	長頭鎌	-	605	SZ1	2	(8.3)	-	-	-	(4.5)	0.9	0.5	0.9	0.6	(3.9)	0.8	0.5	5.6	頭身部欠損
14	短頭鎌	A	629	SZ3	2	(9.8)	22	1.1	0.5	3.6	0.8	0.6	0.8	0.5	(3.7)	0.9	0.8	9.2	16/16
15	短頭鎌	B	628	SZ3	2	(12.0)	37	(1.7)	0.5	4.5	0.6	0.6	0.6	0.6	3.1	0.8	0.8	10.6	かくり短い
16	短頭鎌	B	630	SZ3	2	(12.9)	(3.8)	1.8	0.5	4.3	0.7	0.7	0.8	0.6	6.0	0.9	0.9	13.8	16/16
17	短頭鎌	B	633	SZ3	2	(10.3)	(3.1)	1.8	0.6	3.7	0.8	0.5	0.8	0.5	3.8	0.7	0.8	9.9	かくり短い
18	短頭鎌	C	625	SZ3	2	(11.4)	3.3	(1.8)	0.6	(2.9)	1.0	0.8	-	-	(4.1)	0.8	0.6	8.6	16/16
19	短頭鎌	C	626	SZ3	2	(9.5)	(2.0)	1.7	3.5	4.1	1.3	0.6	0.7	0.7	(3.9)	0.9	0.8	9.6	16/16
20	短頭鎌	C	628	SZ3	2	(10.6)	37	1.7	0.5	3.8	0.7	0.4	1.0	0.5	(4.2)	0.8	0.8	10.4	16/16
21	短頭鎌	C	634	SZ3	2	(4.0)	(3.7)	(2.0)	0.5	(0.9)	1.1	0.3	-	-	-	-	-	4.8	16/16
22	短頭鎌	-	615	SZ3	2	(3.1)	-	-	-	(1.7)	0.8	0.6	0.5	0.4	(1.4)	0.6	0.3	2.6	頭身部欠損
23	短頭鎌	-	634-3	SZ3	2	(4.3)	-	-	-	(2.5)	0.8	0.8	0.8	0.7	(1.9)	0.8	0.7	4.4	頭身部欠損
24	短頭鎌	-	626	SZ3	2	(9.1)	-	-	-	(6.1)	0.7	0.5	0.9	0.4	3.0	0.8	0.6	7.4	頭身部欠損

第20表 刀子一覧表

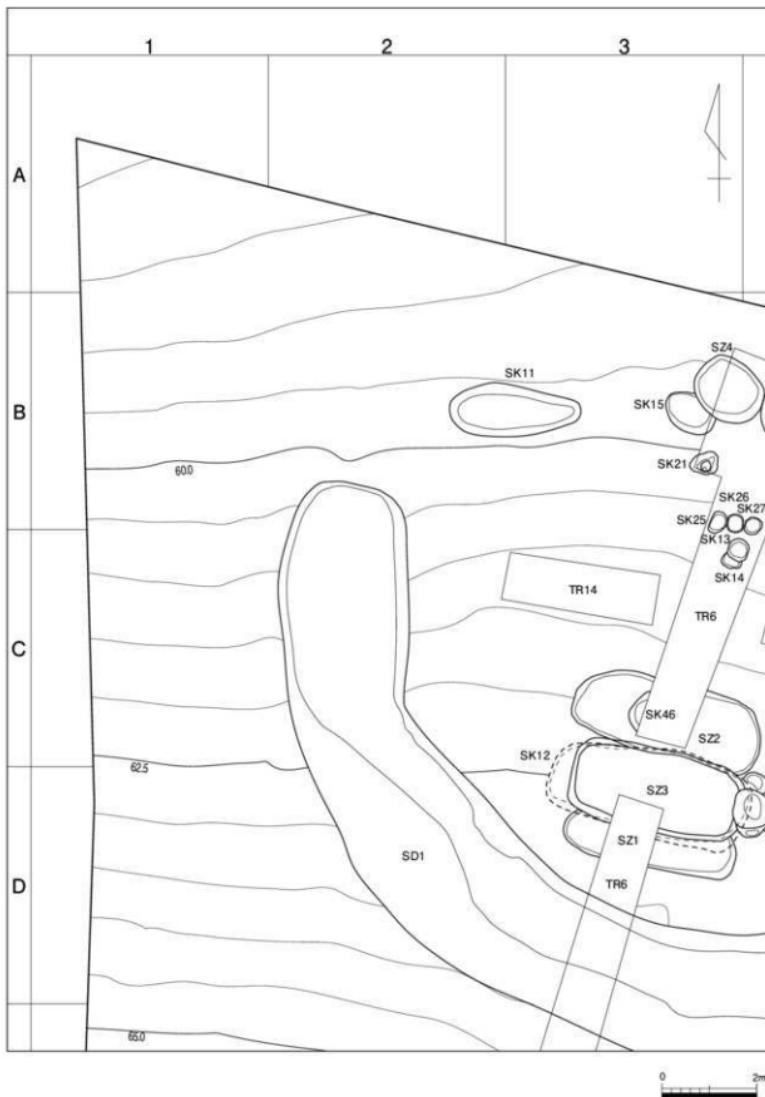
番号 No.	種別 Category	取上 番号 No.	地区 遺構 Category	局位 Position	大きさ Dimensions				備考 Remarks	種類 No. No.			
					全長 (cm)	刃部長 (cm)	刃部幅 (cm)	柄部幅 (cm)					
9	475	SZ2	2	(13.7)	(7.0)	2.3	1.0	(6.7)	2.0	1.1	36.5	刃部に木質 = 稲か?	15/16
10	476	SZ2	2	(7.5)	3.3	1.9	1.4	(3.8)	1.3	0.6	10.2	刃部で折損、柄部と茎により壊着	15/16
12	616	SZ3	2	(9.1)	(6.7)	1.4	0.6	(2.8)	1.0	0.7	11.1	刃部先端欠損	16/16
13	631	SZ3	2	(9.3)	(3.0)	1.4	0.8	6.0	1.2	0.7	16.3	刃部欠損	16/16



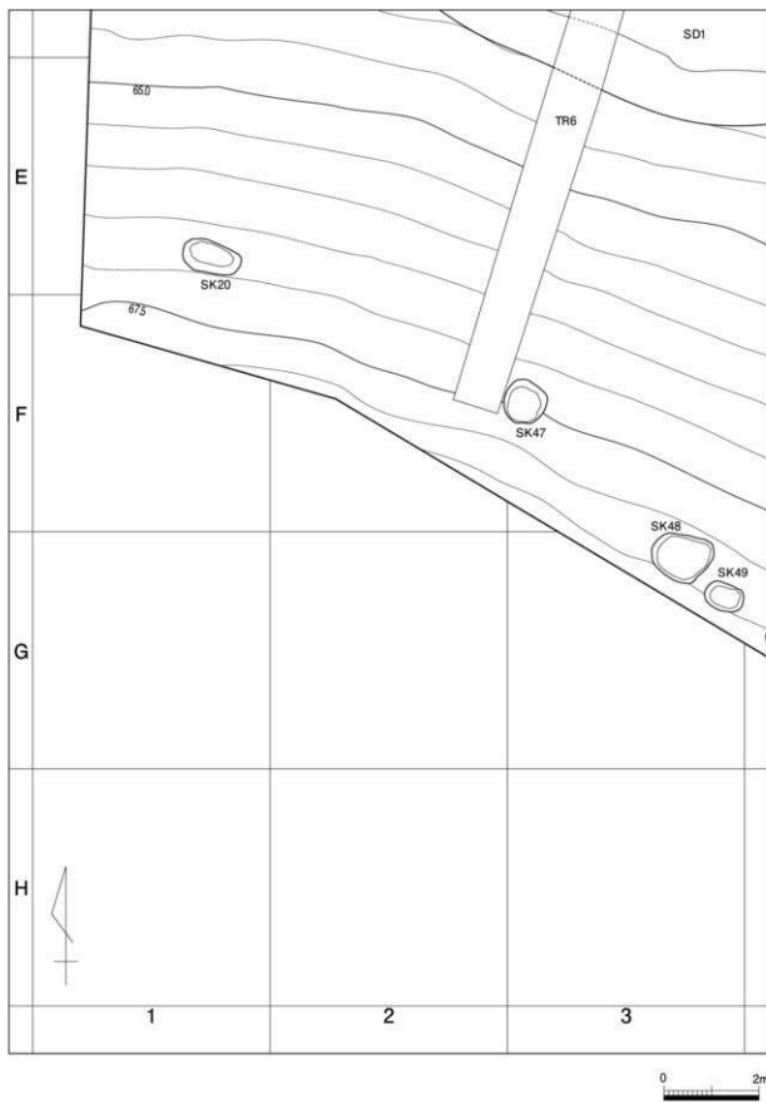
(凡例)

遺構上端	_____
遺構下端	_____
遺構間隙線	_____
搅乱上端	_____
調査区上端	_____
調査区下端	_____
試掘坑(TP)上端	_____
試掘坑(TP)下端	_____
サブトレンチ上端	_____
サブトレンチ下端	_____
計曲線	60.0
主曲線	_____

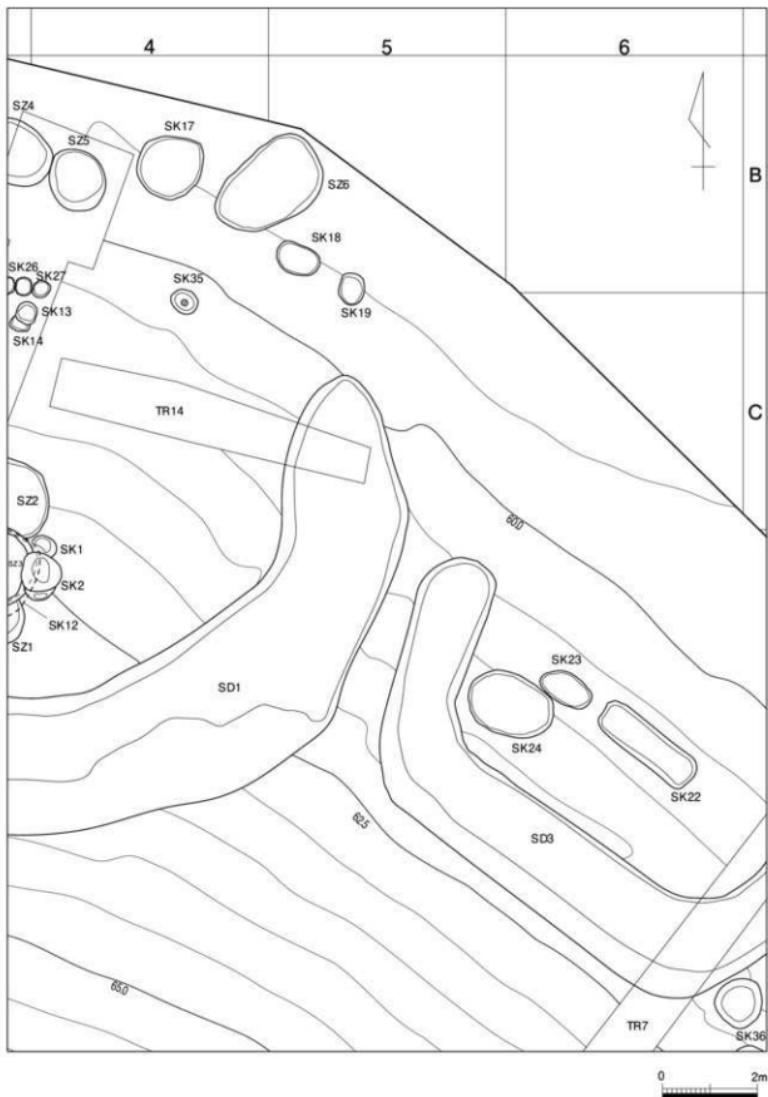
第44図 小洞遺跡遺構全体図割付図 (S=1/500)



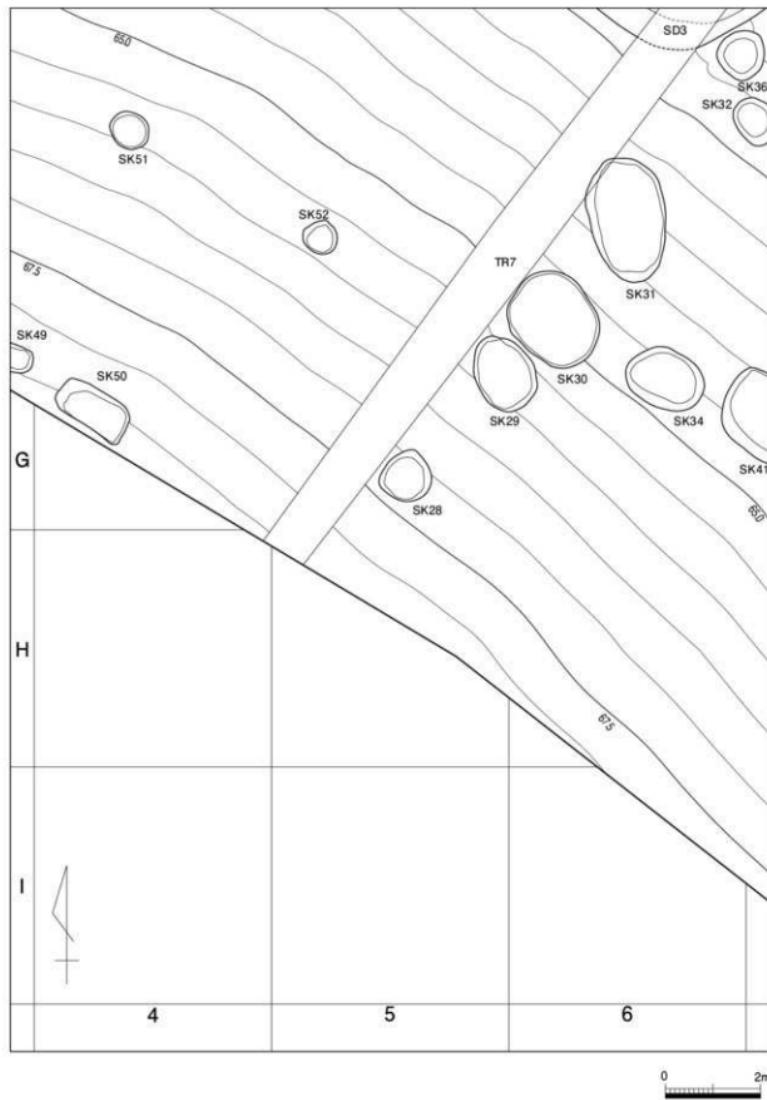
第45図 小洞遺跡全体図分割図① (S= 1 / 100)



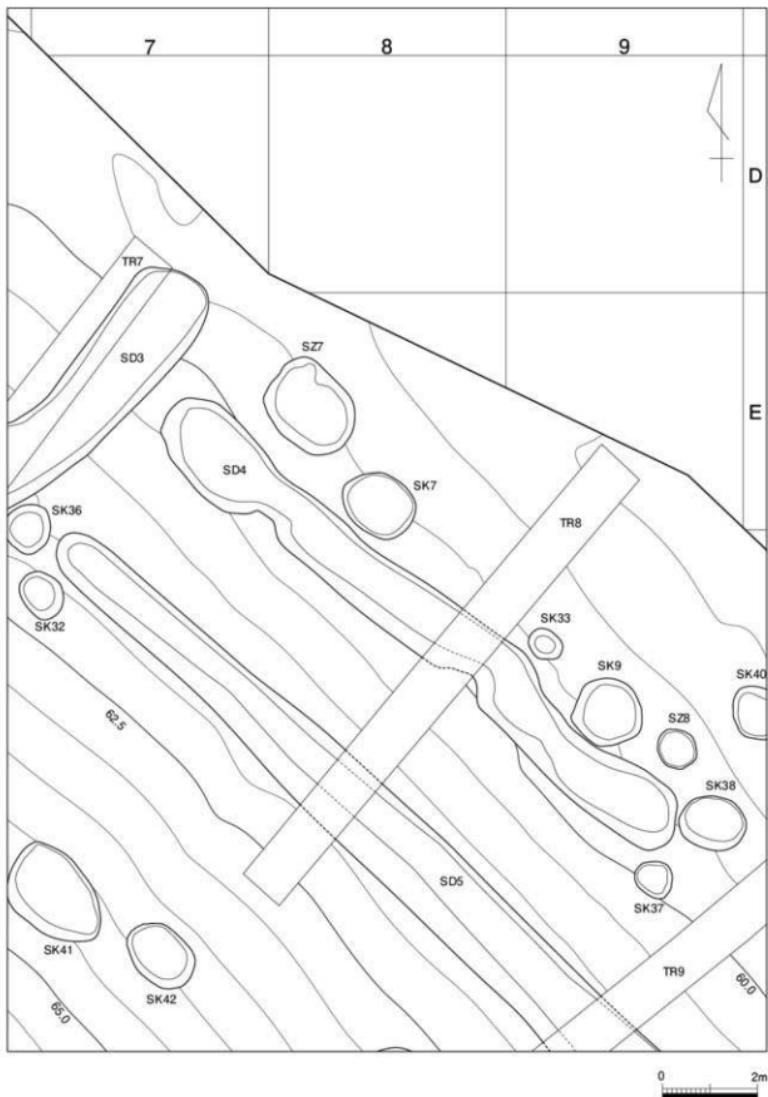
第46図 小洞遺跡全体図分割図② (S=1/100)



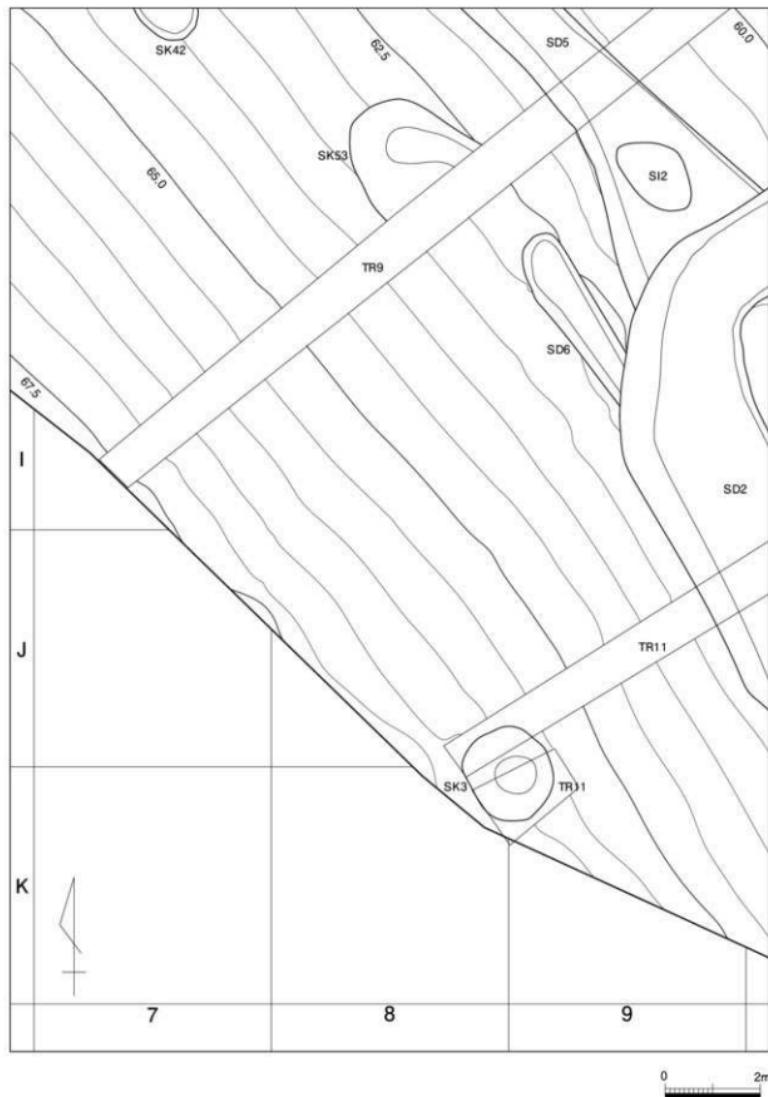
第47図 小洞遺跡全体図分割図③ (S= 1 / 100)



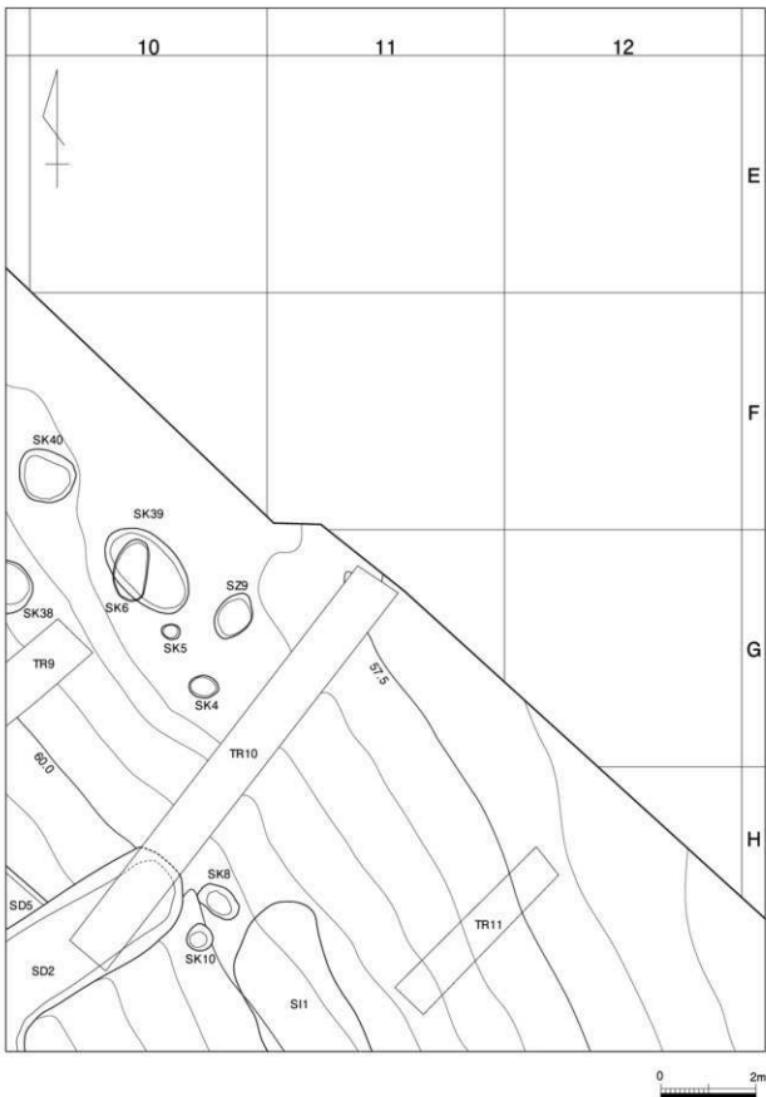
第48図 小洞遺跡全体図分割図④ (S=1/100)



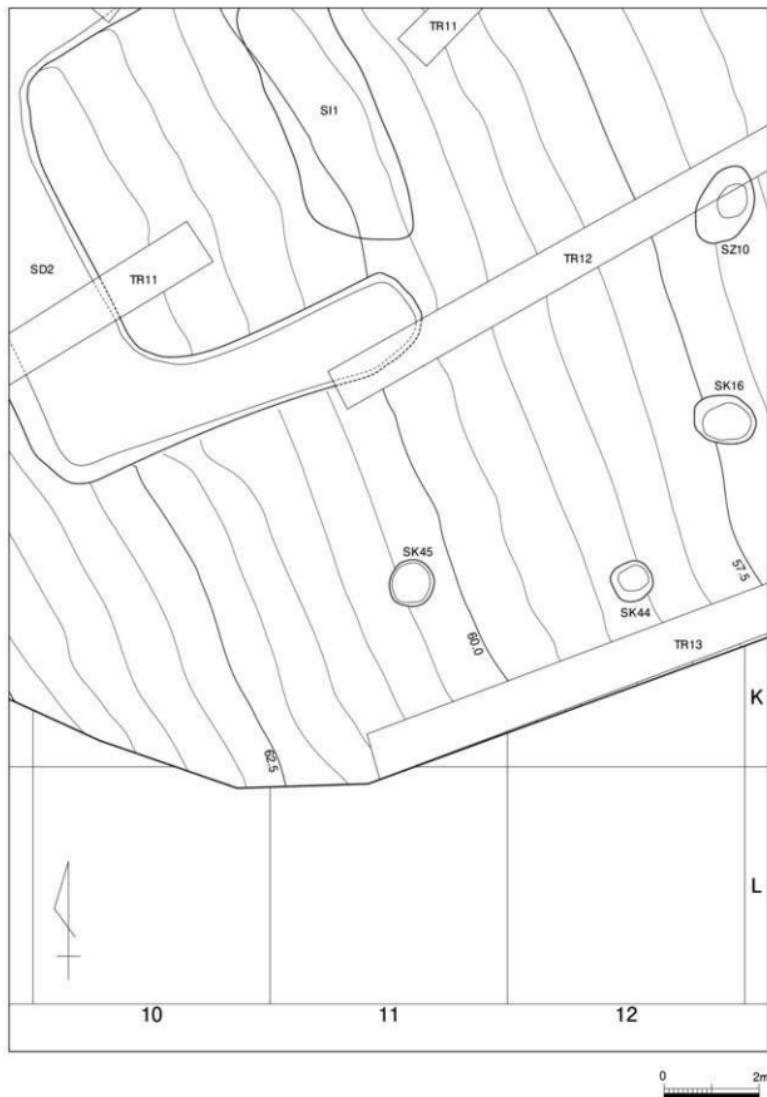
第49図 小洞遺跡全体図分割図⑤ (S= 1 / 100)



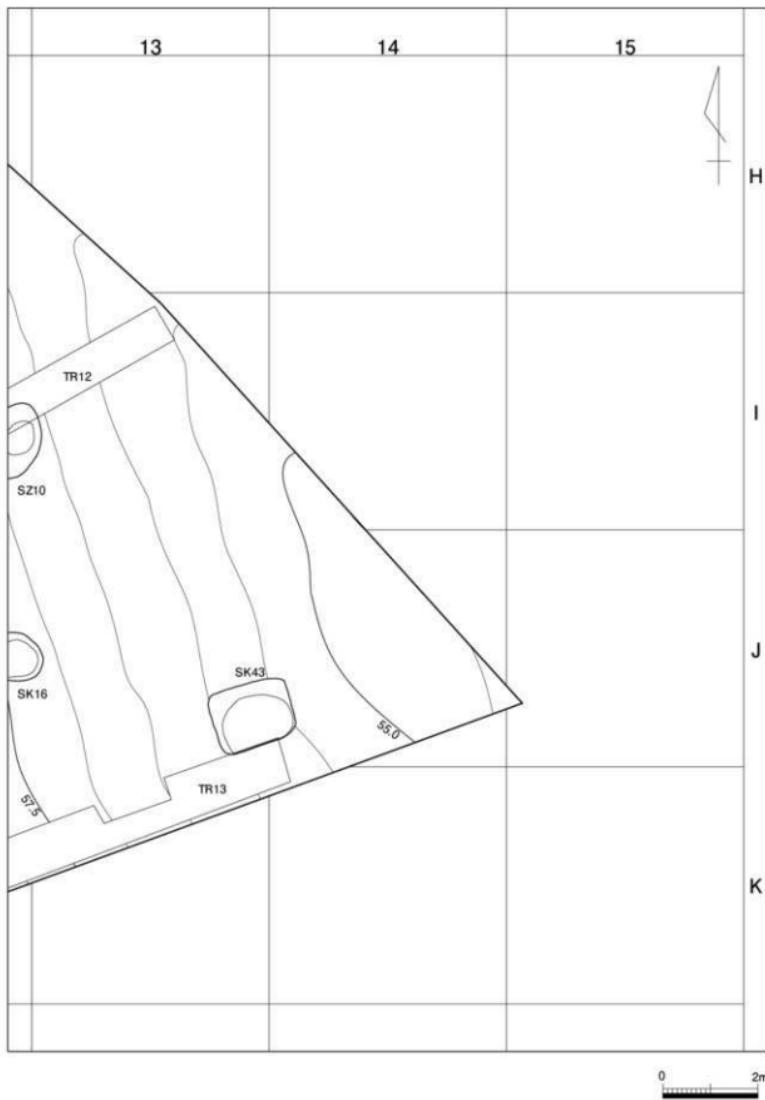
第50図 小洞遺跡全体図分割図⑥ (S=1/100)



第51図 小洞遺跡全体図分割図⑦ (S=1/100)



第52図 小洞遺跡全体図分割図⑧ (S=1/100)



第53図 小洞遺跡全体図分割図⑨ (S= 1 / 100)

第5章 自然科学分析

第1節 分析の概要

本節では、次節以降に記載する自然科学分析を実施した経緯と、結果の概要及び考察を述べる。

1 土器胎土分析（第2節）

実施の経緯 小洞西1号古墳土器埋納遺構（SK1・SK2）と周溝（SD1）出土の須恵器は、美濃須衛古窯跡群や尾張系古窯跡群で製作されたものとは技法が異なることが、八賀晋三重大大学名誉教授及び関連指導調査員らの指摘により明らかになった。この遺物は以前調査された国史跡丸山古窯跡群から出土した須恵器との共通点が認められる。また、地理的にも丸山古窯跡は当遺跡北約22kmという近い位置にある。当古墳出土須恵器が丸山古窯跡群で製作されていたとすれば、当遺跡を性格づける上で重要な手がかりになると考える。そこで、分析対象としてSK2出土須恵器3点、SK1出土須恵器1点、SD1出土須恵器3点と丸山南遺跡TR15出土須恵器5点を選定した。本来ならば丸山古窯跡出土須恵器を分析すると確実な成果を上げることができるが、丸山古窯跡出土遺物は分析できないため、丸山古窯跡に隣接する丸山南遺跡出土遺物の分析を行うこととした¹⁾。丸山南遺跡15区トレンチは丸山2号窯跡の南東直下に設定され、この窯跡の灰原と想定される遺構を確認している²⁾。この遺構から出土した須恵器片を分析するが、灰原である確証が得られていないことや、2号窯の操業は6世紀後半から8世紀代まで考えられることなどから、分析点数が少ないと搬入品や時期の異なるものを分析する可能性が高くなる。そのため、丸山南遺跡出土遺物は複数分析した。

結果の概要と考察 SK1・2出土須恵器4点及びSD1出土須恵器3点はそれぞれ組成がよく似ており、同じ材料を用いて製作されたと考えられる。SK1・2出土須恵器4点とSD1出土須恵器3点を比較すると、明らかに異なる組成を示し、胎土に違いがあることが判明した。丸山南遺跡出土須恵器5点は組成分布の範囲が広いが、定量元素については、SK1・2出土須恵器の組成と類似しており、SK1・2出土須恵器は丸山2号窯産である可能性が高い。微量元素についてはSK1・2、SD1出土須恵器とともに丸山南遺跡出土須恵器の分布範囲内に収まることから、SD1についても丸山古窯かあるいは近隣の窯で製作されたものである可能性が考えられる。

注

1) 丸山南遺跡の須恵器資料及び試掘調査坑位置図は美濃市教育委員会の提供による。

2) 清山健氏の御教示による。

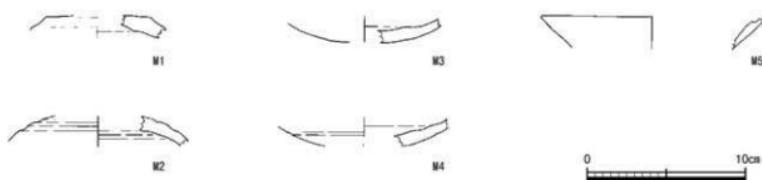
第2節 小洞西1号古墳関連遺構出土須恵器の胎土分析

1 はじめに

小洞西1号古墳では、3基の主体部が検出されており、時期は6世紀後半から7世紀初頭頃と考えられる。小洞西1号古墳から出土した須恵器について、波長分散型蛍光X線分析装置による元素分析



第54図 丸山南遺跡試掘確認調査トレンチ位置図 ($S=1/2,000$)



第55図 丸山南遺跡出土分析資料実測図 ($S=1/3$)

を行い、これら遺物の元素組成からみる材料的特徴を検討した。分析は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

分析対象資料は、小洞西1号古墳出土須恵器7点である。また、比較対象資料として丸山南遺跡から出土した須恵器5点も同時に分析した。小洞西1号古墳出土分析対象資料はSK1、SK2、SD1の3遺構からそれぞれ出土しており、SD1出土遺物が最も古く6世紀後半、SK2出土遺物が最も新しく6世紀末から7世紀初頭と見られる。丸山南遺跡第15区トレーナーでは、丸山2号窯の灰原の可能性がある遺構を検出しており、この遺構から出土した須恵器を比較対照資料とした。資料一覧を第21表に示す。

分析には各資料よりガラスピードを作成し、それを分析試料とするガラスピード法を用いた。

まず必要量を各資料より岩石カッターで切り取り、胎土以外の影響を排除するため、表面を十分に削った後、精製水にて超音波洗浄を行った。試料はセラミック乳鉢で粉末にしてつばに入れ、電気炉で750°C、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1,8000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム Li₂B₄O₇と、リチウムメタボライド LiBO₂を8:2の割合で調製した融剤3,6000gと十分に混合し、白金製るつばに入れ、ビードサンプラー（NT-2000型：㈱東京科学製）にて約750°Cで250秒間予備加熱、約1100°Cで150秒間溶融させ、約1100°Cで450秒間搅動加熱してガラスピードを作成した。

分析はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置 MagiX（PW2424型）にて、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター及び米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計15種類を用いた検量線法による定量分析を行った。定量元素は、酸化ナトリウム Na₂O、酸化マグネシウム MgO、酸化アルミニウム Al₂O₃、二酸化ケイ素 SiO₂、五酸化二リン P₂O₅、酸化カリウム K₂O、酸化カルシウム CaO、酸化チタン TiO₂、酸化マンガン MnO、酸化鉄 Fe₂O₃の主成分10元素と、ルビジウム Rb、ストロンチウム Sr、イットリウム Y、ジルコニウム Zr の微量元素4元素の計14元素である。

第21表 分析対象資料一覧

資料 No.	遺跡名	出土遺構	器種名	掲載 番号	部位	備考
1	小洞西1号古墳	SK2	無蓋長脚高杯	43	口縁部	
2			有蓋短脚高杯	47	受部	
3			高杯蓋	39	天井部	
4		SK1	有蓋短脚高杯	34	口縁部	
5			有蓋短脚高杯	28	柄部	
6		SD1	有蓋短脚高杯	31	杯部	
7			高杯蓋	26	杯部	
8	丸山南遺跡	TR15	环蓋？高杯蓋？	M1	天井部	美濃市教育委員会提供
9			环身	M3	环部	美濃市教育委員会提供
10		TR15抜張	环身	M4	环部	美濃市教育委員会提供
11			有蓋高杯	M5	环部	美濃市教育委員会提供
12			环蓋？高杯蓋？	M2	天井部	美濃市教育委員会提供

3 結果

試料別の測定結果を第22表に示す。また、小洞西1号古墳の遺構ごと及び丸山南遺跡出土試料の各元素の分布図を第56図に示す。

まず最大の懸案であった、丸山南遺跡出土遺物が丸山2号窯出土遺物であるか否かということは、各元素において多少ばらつきがあるものの概ねグループとしてまとまったと言える。これを踏まえて

第22表 定量分析結果

No.	Na ₂ O (%)	MgO (%)	Al ₂ O ₃ (%)	SiO ₂ (%)	P ₂ O ₅ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	TiO ₂ (%)	MnO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	No.
1	0.33	0.93	19.3	70.7	0.046	3.01	0.28	0.93	0.016	2.14	97.6	104	42	191	322	1
2	0.16	0.95	20.4	69.8	0.045	1.84	0.10	1.10	0.008	3.05	97.5	108	51	172	333	2
3	0.20	1.28	23.8	64.2	0.050	3.01	0.13	1.08	0.018	3.85	97.7	108	52	184	384	3
4	0.11	1.13	23.3	65.3	0.054	1.89	0.08	1.12	0.015	3.97	97.0	102	56	187	426	4
5	0.25	0.96	19.3	66.1	0.067	2.69	0.19	1.00	0.025	7.28	97.9	146	99	149	585	5
6	0.19	1.16	20.4	66.5	0.036	1.08	0.06	1.28	0.020	7.41	98.1	138	95	147	527	6
7	0.14	1.23	21.5	61.9	0.054	1.27	0.07	1.28	0.034	10.50	98.0	141	99	150	605	7
8	0.57	0.96	20.1	68.8	0.109	2.79	0.23	0.92	0.010	3.28	97.8	145	101	146	529	8
9	0.24	0.99	21.3	68.6	0.084	2.41	0.12	1.03	0.012	3.31	98.1	114	88	235	549	9
10	0.29	0.93	18.1	70.3	0.095	2.18	0.14	1.05	0.015	4.45	97.6	99	48	180	369	10
11	0.23	1.04	21.6	68.2	0.096	2.44	0.12	1.05	0.012	3.41	98.1	144	101	149	638	11
12	0.36	0.91	18.3	70.9	0.070	2.62	0.22	0.90	0.011	3.22	97.5	105	84	198	459	12
最大	0.57	1.28	23.8	70.9	0.109	3.01	0.28	1.28	0.034	10.50	98.1	146	101	235	638	最大
最小	0.11	0.91	18.1	61.9	0.036	1.08	0.06	0.90	0.008	2.14	97.0	99	42	146	322	最小

比較を行う。

各遺構とも試料点数がやや少ないと留意する必要があるが、各遺構間にある程度の差異を確認できた。

最初に小洞西1号古墳出土須恵器7点について見てみると、SD1出土試料（No.5～7）は、MnO、Fe₂O₃、Rb、Sr、Y、Zrにおいて、SK1・2出土遺物の4点（No.1～4）とは明らかに異なる組成を示し、胎土材料に違いがあると言えよう。また、SD1出土須恵器については、肉眼観察上でもやや異なる特徴を有しており、この3点間にも差異がある可能性も考えられるが、点数が少ないと組成上でのそれ以上の区分は難しい。SK2出土試料（No.1～3）、SK1出土試料（No.4）については、SK2は1点しか分析してないため判断が難しいが、両者の間に特に大きな差異は見られず、比較的材料が似ていると思われる。

統一丸山南遺跡出土須恵器5点を見てみると、SK1・2出土遺物と比較的組成上の共通点が多く、類似する胎土であると言えよう。ただ、P₂O₅の値が大きいのが特徴で、このような特徴を示す試料は小洞西1号古墳では見られなかった。P₂O₅は有機物や植生などの自然環境によって変化する可能性も考えられ、この値の差異のみで異なる胎土であるとは断定できない。むしろ、他の元素における値の差異がほとんど見られないことから、類似する胎土であると考えられる。SD1出土試料とは、他にもMnO、Fe₂O₃において大きく異なる値を示しており、胎土材料に違いがあると言ってよいと考えられる。

三辻利一氏は、「全国各地にある1,000基を超える窯跡から出土した40,000点以上の須恵器片を分析した結果、K、Ca、Rb、Srの4因子が有効に地域差を表示することが見つけられた」としている（三辻1993）。そこで、微量元素4元素のうちルビジウムRbとストロンチウムSrの分布を第56図に示した。また、比較資料として、関市櫛ノ木洞1号古窯跡、関市砂行古窯跡（財團法人岐阜県文化財保護センター2000b）、各務原市各務東山古窯跡群（各務原市埋蔵文化財調査センター2002）、関市深橋前古窯跡（財團法人岐阜県文化財保護センター2003）のルビジウムRbとストロンチウムSrの分布も第56図に示した。なお、この4遺跡については、波長分散型蛍光X線分析装置（㈱リガクSystem3080）を使用し、データ処理システムDATAFLEX-152（検量線法）を用いて定量分析を行っている。

小洞西1号古墳墳頂で確認した土器埋納遺構SK1・2出土遺物と周溝SD1出土遺物は、明らか

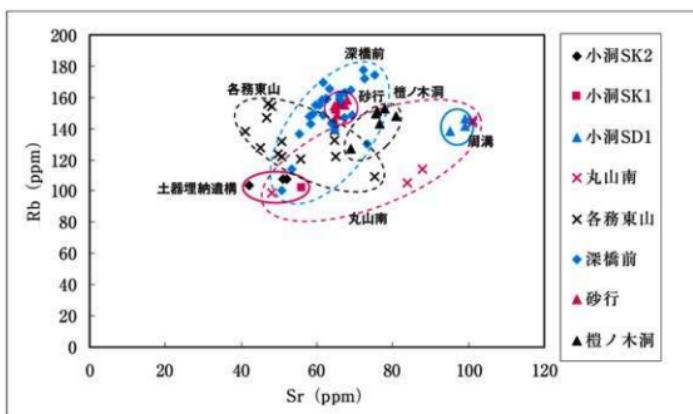
に材料が異なることが分かる。時期は若干くだるが、長良川対岸の榎ノ木洞古窯跡や砂行古窯跡、深橋前古窯跡と比較すると分布が異なる。また、美濃須衛古窯の各務東山古窯跡とも分布が異なる。さらに、SK1、SK2、SD1出土遺物が丸山南と重なることから、当遺跡から出土した須恵器は、丸山古窯、あるいは近隣の古窯で生産された可能性が高いと考えられる。

4 考察

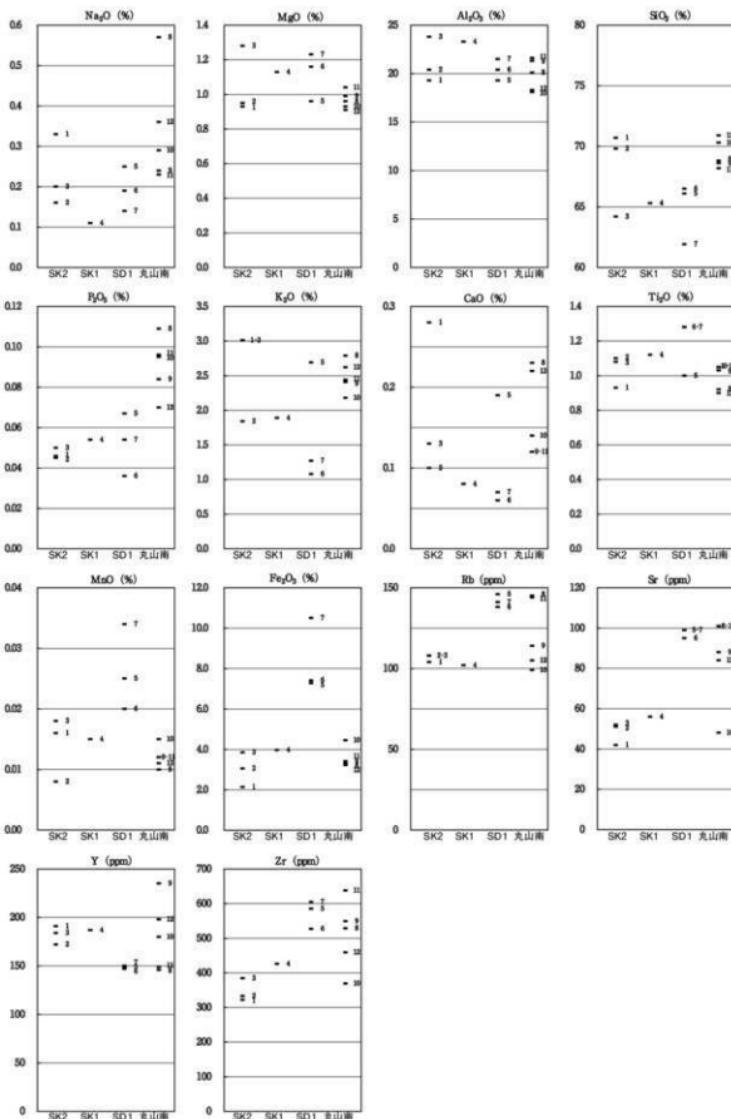
小洞西1号古墳及び丸山南遺跡出土須恵器の胎土を分析した結果、以下のことが指摘できる。

- SK1出土須恵器1点とSK2出土須恵器3点は組成が似ている。
- SD1出土須恵器3点は組成が似ている。
- SK1・2出土須恵器とSD1出土須恵器の組成は明らかに異なる組成を示し、胎土材料に違いがある。
- 丸山南遺跡出土須恵器と比較すると、SK1・2出土須恵器は P_2O_5 の値以外ではほぼ同じであり、組成が類似する。SD1出土須恵器は定量元素についてやや異なる組成を示すが、微量元素について組成が類似する。
- 当遺跡出土須恵器は、組成及び近隣諸窯との比較により丸山古窯に包括される。のことから、丸山古窯ないしその近隣の生産地が想定できる。

胎土材料の違いについては、製作された地が異なれば全く異なるものになると思われるが、同一の窯で製作されても、時期や採取地点によって胎土材料は変化する可能性も考えられる。SK1・2とSD1出土須恵器の組成の差は、時期による粘土採取地の違いを表す可能性が考えられる。つまり、当古墳の須恵器供給地は、一貫して長良川右岸の近接した生産地の可能性が高いと考えられよう。



第56図 Rb-Sr分布図



第57図 試料別元素分布図

第6章 まとめ

第1節 小洞遺跡の土地利用の変遷

当遺跡の発掘調査で、縄文時代から中世まで断続的に土地利用されてきたことが明らかになった。ここでは、当遺跡の土地利用の変遷について第4章で設定した時期区分を元に考察する。なお、遺構の時期決定は出土した遺物で行ったため、時期不明とした遺構の中には、いずれかの時期に属する可能性がある。

1 小洞Ⅰ期（縄文時代）

当遺跡では、当該期の遺構は確認できなかった。これは、当該期には人が居住していた場ではなかったことを意味すると考えられる。遺物は、石鍬1点、打製石斧1点、フレイク2点が出土した。出土遺物が少ないため断定はできないが、石鍬の形状から、縄文時代晩期は狩猟の場として人々が利用していた可能性が考えられる。打製石斧は主に採集の道具として使用されたと考えられているが、このことから、当地は根菜類が獲得できる場であったと考えられる。

2 小洞Ⅱ期（弥生時代末～古墳時代前期）

当該期の遺構は方形周溝墓2基、溝状遺構3条、集石遺構1基、土坑8基を確認した。調査地の中央部西寄りから東に広がる。出土遺物は廻間Ⅰ式後半からⅡ式前半のもので占める。このことから当地は、短期間に墓域として利用されていたと考えられる。

次に遺構の構築順について考察する。方形周溝墓については、まず最初に2号方形周溝墓を構築する。これは、出土した土師器の中では最も時期がさかのばるであろうパレス壺（56）（廻間Ⅰ式2、3段階）が周溝底部から出土したことを根拠とする。同じく周溝埋土から出土した長頸壺（57）（廻間Ⅰ式3、4段階）は底部との間に埋土を挟むことから、周溝の埋没過程で転落した可能性が考えられる。

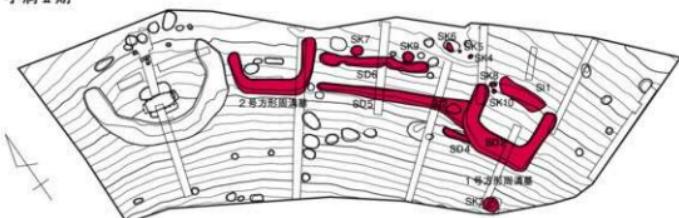
次に1号方形周溝墓を構築する。これは、北辺の帯状の集石遺構内から廻間Ⅱ式前半期と考えられる土師器が出土したことを根拠とする。また、1号方形周溝墓周辺で確認した当該期の土坑のうち完全に近い土器が出土したSK4・5・6は、1号方形周溝墓で行われた祭祀に関連する遺物を埋納したものとの可能性もある。

1・2号方形周溝墓の間に溝状遺構を3条確認した。1号方形周溝墓がSD4・5を切ること、SD5の底面で集石遺構S12を確認したこと、SD6から土師器高杯（61）が出土したことから当該期に位置づけた。この溝状遺構群が当該期の遺構であるならば、1・2号方形周溝墓を結ぶ墓道であった可能性も考えられる。SD5・6は2号方形周溝墓のすぐ東で収束することから、構築時期は2号方形周溝墓をくだる可能性が考えられる¹⁾。

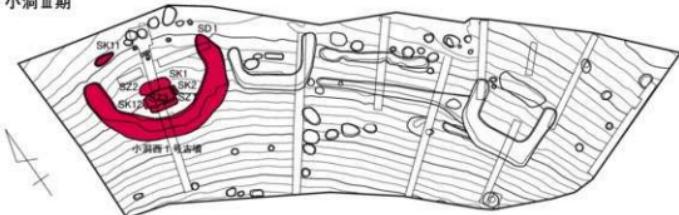
当該期の土坑を8基確認したが、出土した遺物は廻間Ⅱ期前半期に比定できるもので占めることから、1号方形周溝墓とほぼ同時期であると考えられる。

よって、小洞Ⅱ期は①2号方形周溝墓②溝状遺構群③1号方形周溝墓及び土坑の順に遺構が構築さ

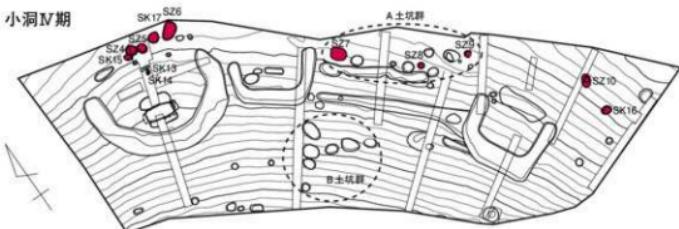
小洞Ⅱ期



小洞Ⅲ期



小洞Ⅳ期



■ 当該期の遺構

第58図 小洞遺跡遺構変遷図 (S=1/600)

れたと考えられる。

当遺跡周辺集落の存在は未確認のため推測ではあるが、丘陵周辺の平坦地にこの墓域を構築した集団の集落が存在する可能性が考えられよう。

3 小洞Ⅲ期（古墳時代後期）

当該期の遺構は、円墳1基（周溝1条、埋葬主体部3基、土器埋納遺構2基）、土坑2基を確認した。調査地の西部にかたまる。出土遺物は6世紀後半から7世紀初頭のもので占める。この時期の遺物は古墳関連遺構出土のものではほとんどを占めるため、古墳の構築及び埋葬のためだけにこの地を利用していた可能性が高いと考えられる。

4 小洞Ⅳ期（中世）

当該期の遺構は、墓坑7基、土坑5基を確認した。墓坑、土坑ともに調査地の斜面下方、丘陵の裾部分に位置する。出土遺物は12世紀後半から15世紀までと、少量ではあるが時期幅が広い。

中世墓については、墓坑と火葬跡がある。S Z 4・5・6は小洞西1号古墳の墳丘北側に位置する。S Z 7は2号方形周溝墓の北東側に位置する。S Z 8は1号方形周溝墓の北西側に、S Z 9・10は北側に位置する。中世は、それ以前の墳丘を「塚」と考えてその付近に墓坑を作る傾向にあると言われ、1号古墳裾に中世墓がまとまって確認できることから当遺跡もそれにあてはまると考えられる。1号古墳裾以外に位置する中世墓は、1・2号方形周溝墓に近い場所で確認できることから、中世には1・2号方形周溝墓の墳丘部分はいくらか残存していた可能性が高いと考えられる。

次に、墓坑のうち時期が分かれる遺物が出土したものについて時期を決定した（第23表）。時期幅が広いこと、特にある時期に集中しているわけではないことなどから、当地を墓域として連続と使用していたとは言いにくい。当調査地の北側には小丘陵が存在することから、この小丘陵を含めた一帯の丘陵斜面下方に墓域が広がっている可能性は十分考えられる。

時期不明とした土坑の中には、埋土中に角礫が含まれているものがある。これらの土坑の角礫は、意図的に並べられた形跡が認められないため、斜面上方からの流れ込みと判断し性格不明としたが、溝状遺構群の北側（A土坑群）と2号方形周溝墓、溝状遺構群の南側（B土坑群）に群を成すことが確認できる。A土坑群の範囲にはS Z 7・8・9があることから、A土坑群はそれぞれ墓坑であった可能性も考えられる。B土坑群は、北東～南西方向に4基、ほぼ東西方向に4基並ぶことから、意図的に形成された可能性を窺わせる。このことから、B土坑群も墓坑であった可能性が考えられる。1号古墳北側に中世の土坑が群を成すように、A・B土坑群もこの時期に構築されたものの可能性が考えられよう。

第23表 中世墓の時期と出土遺物

遺構番号	時期	時期決定遺物	遺物掲載番号	遺物形式
SZ7	12世紀後半～13世紀初頭	山茶碗	75, 76	東濃第8形
SZ5	14世紀中	古瀬戸三耳壺	73	古瀬戸中Ⅳ期
SZ6	15世紀中	古瀬戸三耳壺	74	古瀬戸後Ⅳ期古段階
SZ10	15世紀後半～16世紀前半	土師器皿	77	II-2期(C2類)

第2節 小洞西1号古墳の特異性

1 周辺の木棺直葬の主体部を持つ古墳

小洞西1号古墳は6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳で、丘陵の北斜面に立地し、木棺直葬を主体部とする。この時期の周辺地域では、多くの古墳が東西南方向の日当たりの良い斜面に立地する。木棺直葬はその数を減らし、6世紀初頭にはほぼ一齊に横穴式石室を導入する。県内の古墳時代中期末から後期の木棺直葬を主体部にもつ古墳は第59図及び第24表のとおりである。中でも小洞西1号古墳の属する、田辺編年（田辺1981）のTK209期における木棺直葬の調査例は、岐阜市七反田番場山11号古墳があるに過ぎない。七反田番場山11号古墳は小洞西1号古墳と同様、長良川中流の右岸に立地する。他にも後期古墳のうち長良川水系に立地する古墳には、郡上市西ヶ洞古墳群がある。内訳は、出土した須恵器の主体がMT15期の3号墳とTK10期の4・5・6・7号墳である。前者は5世紀末から6世紀初頭、後者は6世紀前半に位置付くとしている（岐阜県文化財保護センター1995）。

七反田番場山11号古墳は5世紀末から6世紀前半に構築され6世紀後半から7世紀初頭に再利用したという考え方と、6世紀後半～7世紀初頭に構築されそれ以前の遺物は混入とする考え方の2通りを報告している（岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005）。出土遺物を確認すると、5世紀末から6世紀初頭に比定できる須恵器は猿投産で、高坏（掲載番号26）など周溝の最下層から出土しているものが多い。対して、6世紀末から7世紀初頭に比定できる須恵器は、ほぼ完形の提瓶（21）などが主体部から出土している。提瓶は棺外小口の粘土塊上から出土している。また、6世紀代から7世紀



*図中の数字は、第24表と対応する。

第59図 県内の木棺直葬による主体部を持つ古墳位置図

代に比較的多く認められる長頸蟲
 (25) も墓坑埋土から出土している。これらのことから、七反田番場山11号古墳は5世紀末から6世紀初頭に初葬が行われ、6世紀後半から7世紀初頭に埴丘の再利用又は追葬が行われたと考えられる。主体部が1基しか確認されていないことから、6世紀後半から7世紀初頭には初葬の主体部は埴丘を構築していた土砂の流失により消失した可能性も考えられる。よって、小洞西1号古墳と七反田番場山11号古墳の事例から、これまで美濃地方で確認できる木棺直葬を

主部に持つ古墳の年代は6世紀前半を最終としていたが、6世紀末から7世紀初頭にまでくだる可能性が高くなったと言えよう。

次に、埴丘と主体部について考察する。小洞西1号古墳は、一埴丘に3基の木棺直葬の主体部を確認したが、一埴丘に対し複数の木棺直葬の主体部を持つ古墳は各務原市熊田山北1号古墳（5世紀後半～末）があるに過ぎない。木棺直葬ではないが、掛斐郡池田町願成寺西墳之越35号古墳（5世紀後半～末）では、一埴丘に3基の堅穴式石室と1基の木棺墓を営む（池田町教育委員会2001）。5世紀後半から末の段階では、中小の首長墳において家族墓へと変化を遂げる過程にあり、複数埋葬が美濃の先進地域である西濃・中濃において認められる。これは、後期の古墳群を造営するようになる新興の家族体の成長の先駆けと理解でき、直後に展開する横穴式石室の受容はこういった地域内部における階層構造の変化を背景としている可能性がある。一方、6世紀後半から7世紀段階の一埴丘複数主体部の木棺直葬は、横穴式石室の最盛期であり、何らかの事情により横穴式石室を造営できなかつたあるいはしなかった家族体が、伝統的に存続する木棺直葬をもって横穴式石室と同様に一つの埴丘内に追葬を行った結果と考えられる。

長良川水系においては、上流部において6世紀中葉（TK10）まで木棺直葬が一埴丘一主体部として造営され、さらにその中期的要素の強い埋葬形態は6世紀後半から7世紀まで連綿と存続する。今後の調査事例を待ちたいが、長良川水系における後期古墳の特色を表すものである可能性が高い。

2 小洞西1号古墳の被葬者像

小洞西1号古墳は北向きの斜面に立地し、美濃地域の同時期の古墳立地とは大きく異なり、極めて特殊な立地である。6世紀末から7世紀初頭の古墳の多くは横穴式石室を持つ（第25表）²¹ため、南に石室を開口できる南斜面に立地するものが多い。当古墳東側の丘陵に位置する小洞古墳群は未調査ではあるが、踏査から南向き斜面に立地することが分かっている。このことから、北向き斜面に作る

第24表 美濃地方の木棺直葬を主体部に持つ古墳（古墳中期末以降）

古墳名	市町村	時期
1 砂行1号墳	関市	5世紀前
2 遺見塚古墳	池田町	5世紀前
3 藤原東山9号墳	各務原市	5世紀後
4 宮ノ根1号墳	中津川市	5世紀後
5 熊田山北1号墳	各務原市	5世紀後～末
6 南青柳古墳	関市	5世紀後～末
7 宮ノ根6号墳	中津川市	5世紀後～6世紀中
8 森山5号墳	恵那市	5世紀末
9 西ヶ洞3号墳	郡上市	5世紀末～6世紀初
10 西ヶ洞4号墳	郡上市	6世紀前
11 西ヶ洞5号墳	郡上市	6世紀前
12 西ヶ洞6号墳	郡上市	6世紀前
13 西ヶ洞7号墳	郡上市	6世紀前
14 狐塚1号墳	中津川市	6世紀前
15 東天神7号墳	海津市	6世紀前
16 東天神6号墳	海津市	6世紀後
17 東天神8号墳	海津市	6世紀後
18 七反田番場山11号墳	岐阜市	5世紀末～6世紀前（初葬） 6世紀後～7世紀初（再利用）
19 小洞西1号墳	関市	6世紀後（SZ1） 6世紀末～7世紀初（SZ2・3）

第25表 TK209期の主な古墳

何らかの理由があるのではないかと推測できる。

1号古墳が立地する北向き斜面から北に張り出した尾根の付け根部頂部付近に墳丘らしき高まりが認められる。またこの尾根は東側に緩斜面を形成しており、いくつかの後期古墳が存在する可能性がある。つまり、1号古墳は単独墳ではなく群を成していた可能性が考えられる。後期の群集墳は、ある一定の集団内における中小首長層がまず拠点となるやや大規模な古墳を造営し、その他の家族体は、その周辺に次々に古墳を築く。当古墳を造営した家族体は、尾根の東側や頂部からはみ出して展開した古墳群の端部に墓域を設定した可能性がある。その背景には、横穴式石室の構築を古墳造営時にすでに放棄していて、南側を古墳の正面に設定する必要がなかったこと、集団内又は小地域内でのこの家族体の位置づけが低位にあることが可能性として挙げられる。1号古墳北尾根付け根部頂部の古墳には横穴式石室が認められず、1号古墳同様木棺直葬である可能性が考えられることから、1号古墳と未調査・未確認の古墳を合わせた小洞西古墳群が木棺直葬墳の群集墳であれば、この集団そのものが小地域内で低位に位置付く可能性が高いと考えられよう。

長良川水系における6世紀中葉以降の後期古墳の階層差は、①畿内系横穴式石室を内部主体とする群集墳の拠点墳②拠点墳に衛星的に近接して在地系横穴式石室を内部主体とする小規模古墳の2つが確認されていたが、1号古墳の発見によって②の下位に伝統的な木棺直葬による小規模古墳の存在が確認された。これは、群集墳の中にあっては最下位に位置付くが、一つの墳丘に木棺直葬による追葬を行っており、埋葬儀礼に伴って須恵器を用い、儀礼後にはその都度片付け行為を実施しているという点において横穴式石室の儀礼に従っていることが注目できる。

第3節 丸山古窯跡との関連性

当遺跡の小洞西1号古墳関連遺構であるSK1、SK2からそれぞれ出土した須恵器一括資料は、美濃市丸山2号窯で製作された可能性があることが分かっている³⁾。渡邊博人氏は、「美濃地方の須恵器窯が「畿内」6形式あるいは「美濃」6形式に属すると考えられることから、美濃における継続的な須恵器の初源が、「美濃」系須恵器の成立と同時期にあるのではないか」(渡邊1996)と考え、6世紀後半に丸山2号窯の成立を想定されている。

当古墳の須恵器一括資料はTK209形式(畿内6形式)に比定でき、畿内系の様相を色濃く残す⁴⁾。さらに、SK1及びSK2出土の蓋坏、有蓋短脚高坏及びその蓋は胎土が白く、やや焼成不足という特徴を持つ。丸山2号窯跡出土須恵器も同様の胎土で、焼成もよく似る。また、分析結果から類似する胎土であることが分かっている。これらのことから、当古墳は丸山2号窯で焼成した須恵器を使用したと考えられる。SD1出土須恵器は、SK1・2出土須恵器とは器形や質感、胎土の組成が明らかに異なるが、近隣諸窯との比較から、丸山古窯産あるいは近隣の生産地が想定できる⁵⁾。つまり、当古墳の埋葬儀礼に伴う須恵器は、位置的には最も近い生産地である丸山古窯跡及びその周辺から供給されたと考えられる。丸山古窯は弥勒寺跡の瓦の生産から、ムゲツ氏との関連が極めて高いとされる。この丸山古窯跡の製品を一貫として受け入れる背景には、当古墳の造営主体者はムゲツ氏との関連があった可能性が考えられる。また、当古墳主体部から、ムゲツ氏の配下にあった可能性が高いといえよう。

注

- 1) 赤塚次郎氏の御教示による。
- 2) 第25表は「東海地方における後期古墳データベース」(第8回東海考古学フォーラム三河大会2001)をもとに作成した。築造時期及び須恵器時期は、以下のように設定した。
I : 陶邑・MT15以前、猿投・H10以前 II : 陶邑・TK10、猿投・H61 III : 陶邑・MT85～TK43、猿投・蟻ヶ池
IV : 陶邑・TK209、猿投・H15 V : 陶邑・TK217、猿投・H16 VI : 陶邑・TK46/48、猿投・I17
- 3) 三重大学八賀晋名教授の御教示及び土器胎土分析結果による。
- 4) 渡邊博人氏の御教示による。

引用・参考文献

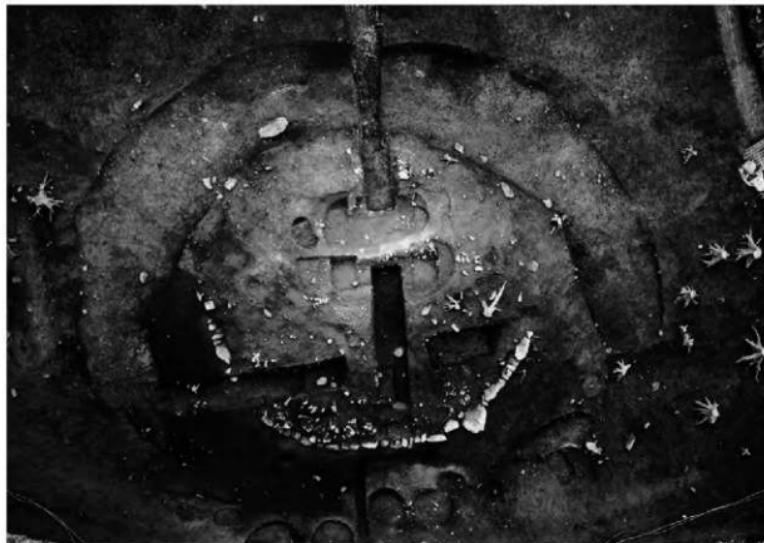
- 財團法人愛知県埋蔵文化財センター 1990「廻間遺跡」
- 財團法人愛知県埋蔵文化財センター 1994「松河戸遺跡」
- 赤塚次郎 1996「濃尾平野低地部における古墳時代の墓」「銅と堀 そのデザイン」第4回東海考古学フォーラム
- 赤塚次郎 2002「土器様式の偏差と古墳文化」「考古資料大観2」小学校
- 赤塚次郎 2004「中部・近畿の弥生・古墳時代の編年の現状と課題」考古学シンポジウム
- 井川祥子 1997「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿 -中濃地盤を中心として-」「美濃の考古学第2号」美濃の考古学刊行会
- 池田町教育委員会 2001「岐阜県史跡頼成寺西墳における古墳群36号古墳発掘調査・74~88号墳確認調査報告書」
- 石黒立人 2002「中部地方の土器」「考古資料大観1」小学校
- 恵那市教育委員会 1984「森山5号古墳調査報告書」
- 小野木学 1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」「美濃の考古学第2号」美濃の考古学刊行会
- 各務原市教育委員会 1984「美濃須恵古跡群調査報告書」
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 1998「熊田山北古墳群」「岐阜県新発見考古速報-平成10年度岐阜県発掘調査報告会-」
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 1999「蘇原東山遺跡群発掘調査報告書」
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 2002「各務原東山遺跡発掘調査報告書」
- 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005「七反田番場山7・10・11号古墳」
- 財團法人岐阜県文化財保護センター 1995「西ヶ洞遺跡・西ヶ洞古墳群」
- 財團法人岐阜県文化財保護センター 1999「ホヤノ木古墳」
- 財團法人岐阜県文化財保護センター 2000a「砂行道路」
- 財團法人岐阜県文化財保護センター 2000b「燈ノ木洞遺跡」
- 財團法人岐阜県文化財保護センター 2002「南青柳遺跡 南青柳古墳 大平前遺跡」
- 財團法人岐阜県文化財保護センター 2003「深橋前遺跡」
- 岐阜市教育委員会 1990「千豊敷-織田信長居館伝子地の発掘調査と史跡整備-」
- 岐阜市教育委員会・財團法人岐阜市教育文化振興事業団 2003「日野不動洞遺跡」「平成13・14年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書」
- 齊藤孝正 1995「I 東海西部」「須恵器集成図録 第3巻東日本編 I」雄山閣出版
- 鈴木元 1998「美濃における加賀壹について-岐阜・西濃地域を中心に-」「土器・墓が語る」第6回東海考古学フォーラム
- 財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1994「東海の中世墓」
- 関市教育委員会 1996「美濃国武儀郡駒形町東遺跡-第1~5次発掘調査概要-」
- 関市教育委員会 2007「弥勒寺西遺跡(第2次調査)」「岐阜県新発見考古速報2007-平成19年度岐阜県発掘調査報告会-」
- 高田康成 2001「鐵鍊から見た美濃の古墳の地域性」「美濃・飛騨の古墳とその社会」同成社
- 中井正幸 2001「前期古墳から中期古墳へ」「美濃・飛騨の古墳とその社会」同成社
- 中津川市教育委員会 1978「宮ノ根古墳群発掘調査報告書」
- 長屋幸二 2003「東海・関西地域における打製石斧の選択」「第5回関西縄文文化研究会 縄文時代の石器Ⅱ」関西縄文文化研究会
- 成瀬正勝 2001「横穴式石室の導入」「美濃・飛騨の古墳とその社会」同成社
- 成瀬正勝 2002「美濃の中世古墳」「古墳時代中期の大型墳と小型墳」第10回東海考古学フォーラム
- 南濃町教育委員会 1981「南濃町文化財発掘調査報告Ⅱ 東天神古墳群 6・7・8号墳」
- 八賀晋・玉井力 1971「第10章 岐阜県の条目」「岐阜県史 通史編 古代」
- 藤原秀樹 1997「美濃丸山窯の須恵器」「古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)」真陽社
- 水野柳太郎 1971「第12章 古代の交通」「岐阜県史 通史編 古代」
- 三辻利一 1993「産地推定の手法」「季刊考古学第42号」雄山閣出版
- 横幕大祐 1997「いわゆる外護列石について」「美濃の考古学第2号」美濃の考古学刊行会
- 横幕大祐 2001「美濃地方における後期古墳の状況」「東海の後期古墳を考える」第8回東海考古学フォーラム
- 渡邊博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相-蓋環の型式設定とその編年試案-」「美濃の考古学創刊号」美濃の考古学刊行会
- 渡邊博人 1997「美濃における後期古墳時代の地域相(1)」「美濃の考古学第2号」美濃の考古学刊行会

写真図版1 調査地全景



調査地全景（右が北）

写真図版2 小洞西1号古墳（1）



小洞西1号古墳（下が北）



SD 1 土層断面（北から）



SD 1 土層断面（西から）



SK 1 遺物出土状況（南東から）



SK 2 遺物出土状況（西から）

写真図版 3 小洞西 1 号古墳 (2)



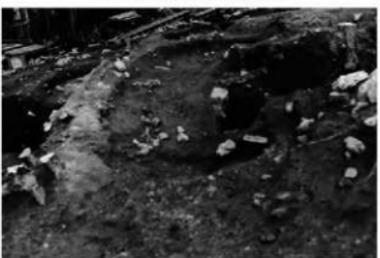
SZ 1 完掘状況（南から）



SZ 1 配石検出状況（東から）



SZ 2 完掘状況（西から）



SZ 3 完掘状況（西から）



SZ 1 鉄鎌出土状況（南から）



SZ 2 刀子出土状況（北西から）



SZ 3 刀子出土状況（南から）



SZ 3 鉄鎌出土状況（北から）

写真図版 4 小洞遺跡の遺構（1）



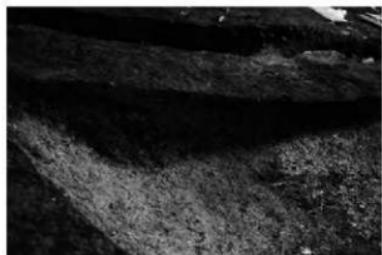
1号方形周溝墓（下が北）



SI 1（北から）



SI 1内遺物出土状況（東から）



SD 2南辺土層断面（東から）



SD 2東辺土層断面（南から）

写真図版 5 小洞遺跡の遺構 (2)



2号方形周溝墓（下が北）



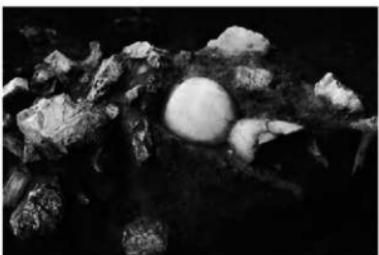
SD 3 南辺土層断面（西から）



SD 3 西辺土層断面（南から）



パレス壺（56）出土状況（西から）



長頸壺（57）出土状況（北東から）

写真図版 6 小洞遺跡の遺構（3）



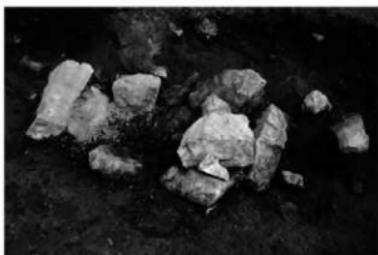
SZ 4 検出状況（北から）



SZ 5 検出状況（北から）



SZ 6 検出状況（北から）



SZ 7 検出状況（南から）



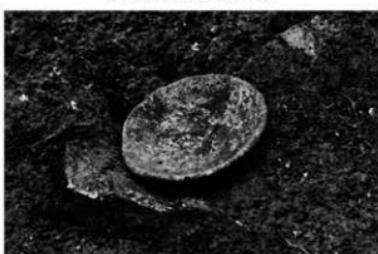
SZ 8 検出状況（北から）



SZ 9 検出状況（北から）



SZ 10 検出状況（東から）



SZ 10下層土器出土状況（東から）

写真図版 7 小洞遺跡の遺構 (4)



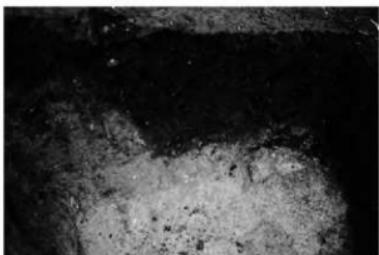
溝状遺構群（下が北）



SD 4 土層断面（西から）



SD 5 土層断面（西から）



SD 6 土層断面（東から）



SI 2 検出状況（南東から）

写真図版 8 小洞遺跡の遺構（5）



SK 3 遺物出土状況（北から）



SK 4 遺物出土状況（南から）



SK 5 遺物出土状況（北から）



SK 6 遺物出土状況（東から）



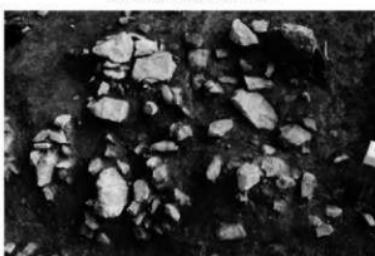
SK10 遺物出土状況（北から）



SK13検出状況（東から）

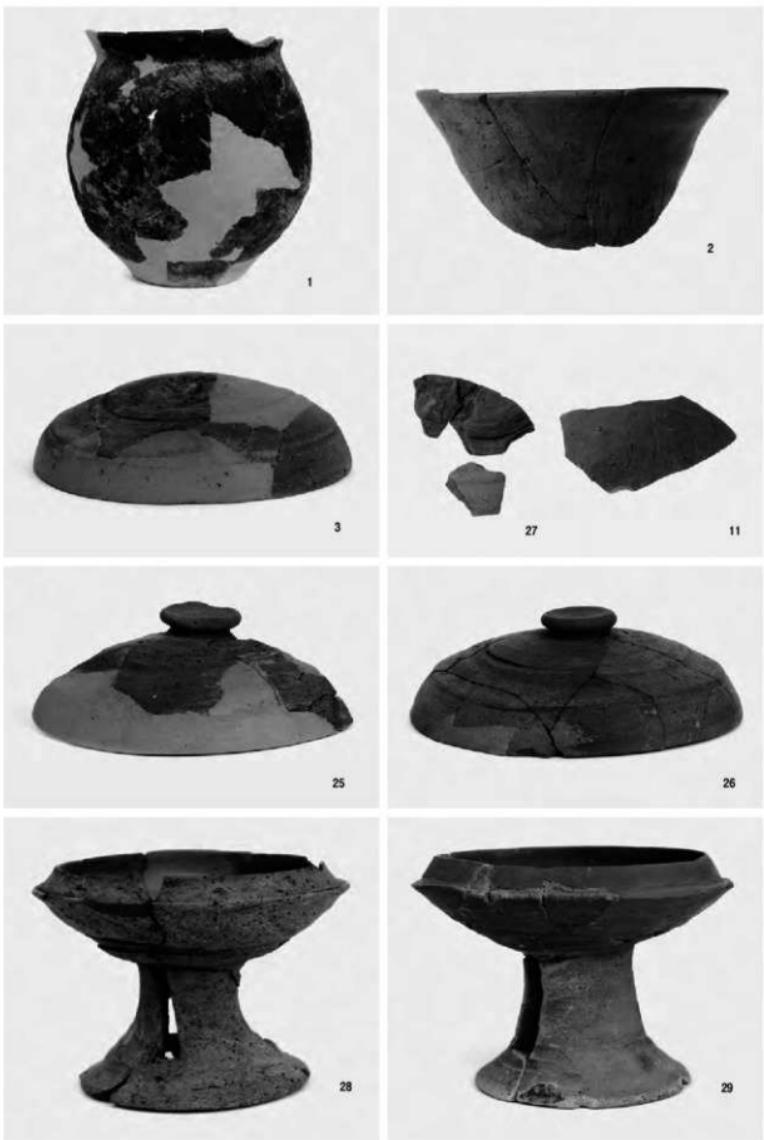


SK16検出状況（南東から）



SK17検出状況（北から）

写真図版 9 小洞西 1 号古墳の遺物 (1)



1号墳埴丘・主体部・周溝 (SD 1) 出土遺物

写真図版10 小洞西1号古墳の遺物（2）

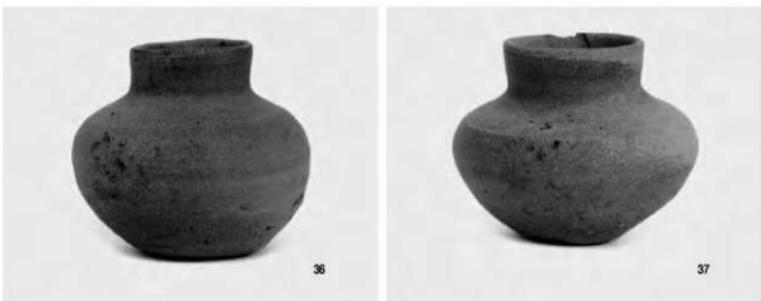


周溝（SD 1）出土遺物

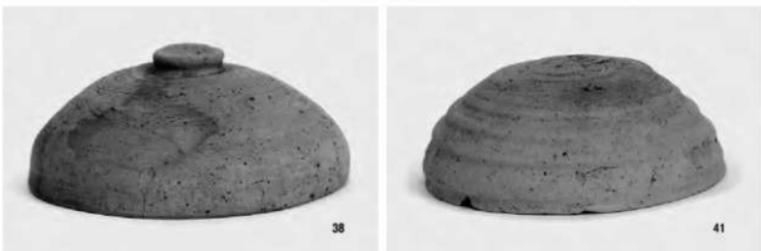


SK 1 出土遺物①

写真図版11 小洞西1号古墳の遺物（3）



SK 1 出土遺物②



SK 2 出土遺物①

写真図版12 小洞西1号古墳の遺物（4）



42



44



45



46



47



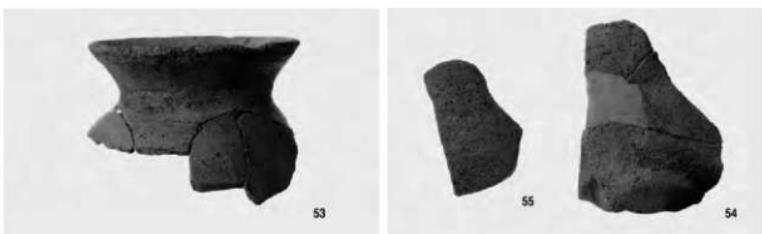
48

SK 2 出土遺物②

写真図版13 小洞西1号古墳の遺物（5）、小洞遺跡の遺物（1）



SK 2 出土遺物③

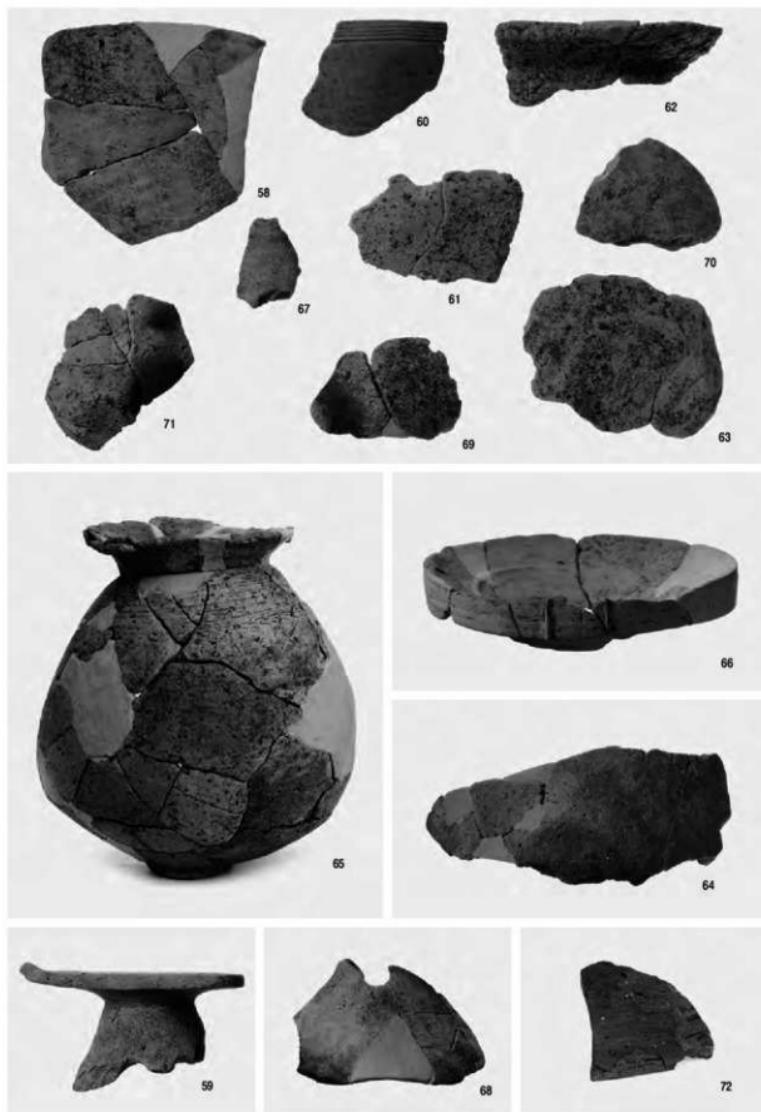


1号方形周溝墓出土遺物



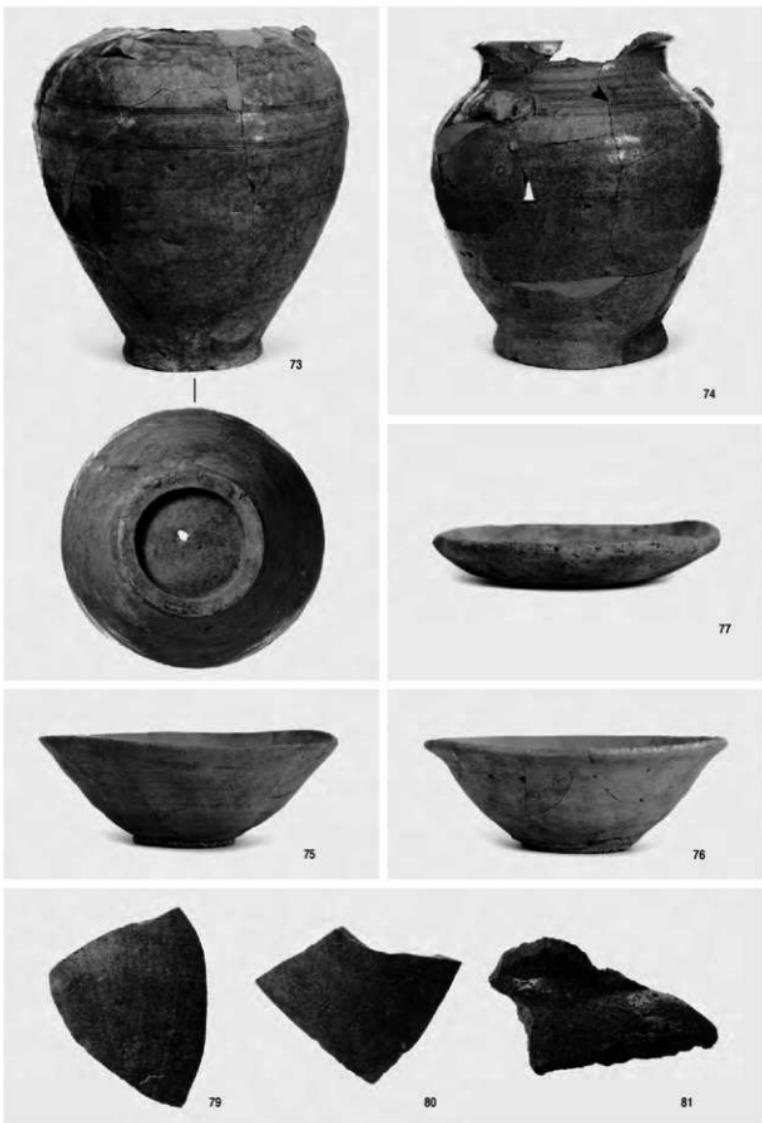
2号方形周溝墓出土遺物

写真図版14 小洞遺跡の遺物（2）



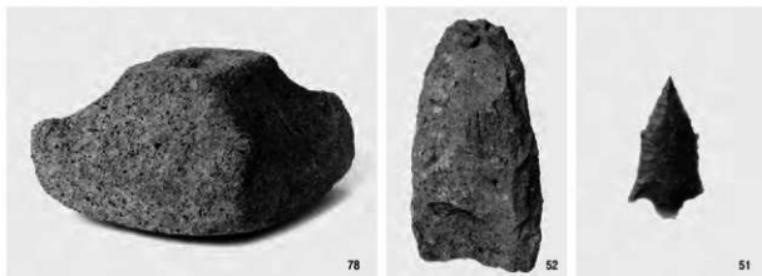
小洞Ⅱ期・Ⅲ期の遺物

写真図版15 小洞遺跡の遺物（3）

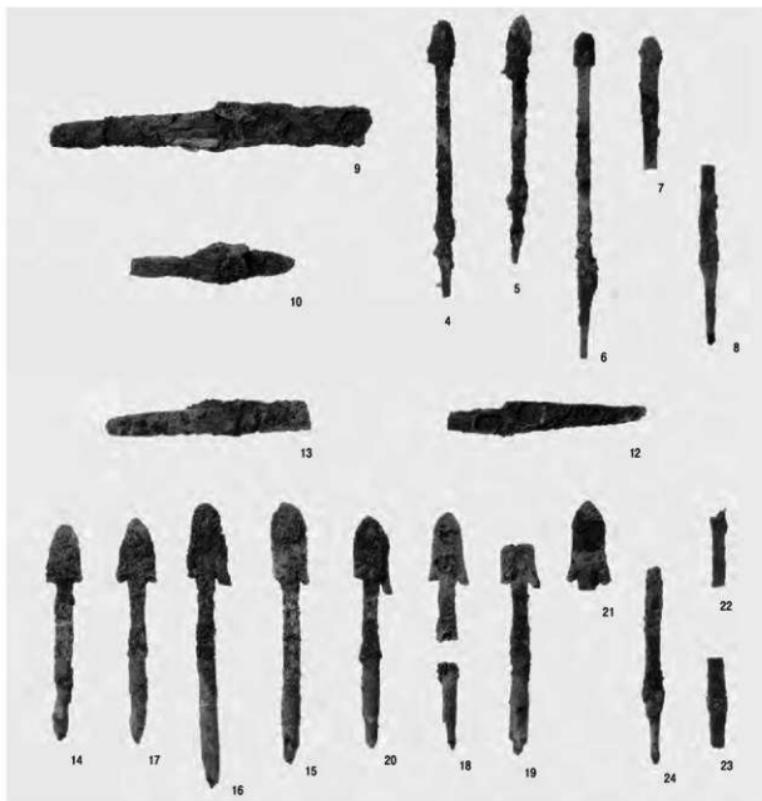


小洞M期の遺物

写真図版16 石製品・石器・鉄製品



石製品・石器



鉄鎌・刀子

報告書抄録

ふりがな	こぼらいせき、こぼらにし1ごうこふん						
書名	小洞遺跡、小洞西1号古墳						
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第109集						
編著者名	河合洋尚、鵜飼高男						
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel058(237)8550						
発行年月日	西暦2008年3月1日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
こぼらにいせき 小洞遺跡 こぼらにしこうごうこふん 小洞西1号古墳	岐阜県関市 わらみあざこはら 広見字小洞	市町村	遺跡番号				
		21205	10465 11272	35° 30° 19°	136° 52' 3"	20060801 ~ 20061220	県営ふるさ と農道緊急 整備事業 (岐阜・関 地区)
1,625m ²							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
小洞遺跡	その他 の墓	弥生末～ 古墳初頭 古墳後期 中世	方形周溝墓2基、中世墓 7基、集石遺構2基、溝 状遺構3条、土坑51基	石器、土師器、須 恵器、中世陶器、 山茶碗、石製品、 鉄製品	弥生時代末 ～中世まで、 断続的に墓 域として利 用されてい たことを確 認		
小洞西1号古墳	古墳	古墳後期	円墳1基、主体部3基、 土器埋納遺構2基、周溝 1条	約3千点			
要約	<p>小洞遺跡は、弥生時代末～古墳時代初頭の方形周溝墓、中世の墓坑を確認した遺跡である。特筆すべきは、各時代の墓を確認していることから、断続的に墓域として利用されていたことが判明した点である。</p> <p>古墳時代後期の円墳である小洞西1号古墳は、周辺地域の同時期の古墳が横穴式石室を持つものに対し、本棺直葬による主体部とする。この違いは、主体部の出土遺物から被葬者の階層差によるものである可能性が考えられる。</p>						

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第109集

小洞遺跡 小洞西1号古墳

2008年3月1日

編集・発行 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社太洋社